
幻界戦線フロントワールド

級長

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

幻界戦線フロントワールド

【Nコード】

N6486X

【作者名】

級長

【あらすじ】

我々が普段目にする漫画やアニメ。それらの正体は何だと思う？それは異世界からの情報だ。作者の頭に電波が如く、異世界の情報が届き、それが作品になるのだ。我々の住む世界に情報を流す異世界は沢山ある。

今日はその異世界を旅した者達の話しよう。

世界を廻る冒険の幕が開く。オタクの少年ルーウエンと傭兵の少女ジンが漫画やアニメ、ゲームの世界を守るため戦う爽快な冒険活劇の始まり始まり。あのキャラ達の夢の共演や対決もあるかもね。

プロローグ（前書き）

注意

二次創作が苦手な人はLR同時押しで逃げてください。
時折キヤラ崩壊してる奴がいる危険があります。（いろいろ保障
できません）

二次とか言ってるくせに妙にオリジナル要素が多い（基本的に物語の根幹）です。

プロローグ

プロローグ

【ポートランド】 ビジネスマンション

ここは交易の世界【ポートランド】。幾多の世界が交わる場所。いくつもある世界はグミシップという乗り物で自由に行き来出来る。例えるなら、宇宙に浮かぶ惑星と惑星の間を旅する様に。

この様に行き来自由なので、世界と世界で争いが起こらないようにする機関や、交易を管理する組織が必要だ。ポートランドは世界をまとめる本拠地となる世界だ。

世界政府の本部や交易管理組織が多数存在する。

交易管理組織【ユニバース】の本部付近に立てられたビジネスマンションに今日も朝日が照り付ける。ここはユニバースで働く者や交易会社に勤める単身赴任のサラリーマン向けに作られたマンションだ。

しかし、その一室に会社員のイメージとは程遠い住人がいた。

「う……ん？」

先ほどまでその住人は1LDKのシンプルな部屋のベッドで寝息を立てていた。部屋は綺麗にまとめられ、備え付けの家具以外無駄なものはなかった。

住人は幼さの残る少女だった。中学生くらいだろうか。短い茶髪を乱して、金色の瞳はまだ寝ぼけているのか半開きだ。体を起こして、周りを見渡す。何故かベッドには少女の身の丈ほどある刀が置かれていた。

「寝てた？」

少女は目を擦って呟いた。彼女は横になるだけのつもりが、そのまま寝込んでしまったようだ。それは服装からも伺える。

深い緑のジャケットにズボン。どこぞの兵士みたいな服装をしていて、ジャケットは前を開けただけで脱ぎもしていない。

「シャワー……」

少女は呟いて、シャワールームに向かった。



「ふう、スツキリした」

数分後、少女はスツキリして戻ってきた。寝ぼけていた表情もキリッとしたものになってる。服も同じデザインのものであるが着替えてる。ジャケットは手に持っていて、普段ジャケットの下に着てるであろう黒いタンクトップからは、健康的な白い肌があらわになっている。

左肩には、目の様な入れ墨が入っている。首にかけたタオルで濡れた髪をおおざっぱに拭き、少女は息をついた。

「おつ邪魔しまーす！ ジン生きてる？」

「なっ、る、ルーアっ！ 鍵は閉めたはず！」

息をついた瞬間、扉が開けられ一人の少女が部屋に入る。ルーアという少女曰く、部屋の住人の名前はジン。おおそ、かわいらしい少女には似合わない名前だった。

ジンは急いでジャケットを羽織った。女の子同士とはいえ、肌を見せるのは恥ずかしいタイプに違いない。

「なぜ？ 鍵を閉めたのに……」

ジンは慌ててジャケットの前を閉めながらルーアに聞いた。ルーアは鍵を取り出して、何気なく言った。

「マスターキー」

「管理人権限か」

ルーアはこのマンシヨンの管理人の娘だ。こんなビジネスマンシヨンにジンみたいな若い年の女の子が引っ越してきたのがうれしいのか、なにかと世話を焼いてくる。

「で、何の用？」

ジンはそつけなく聞く。別にルーアのことを鬱陶しく感じてゐるわけではないが、ジンはつい相手を突き放してしまうのだ。

「いや、昨日帰りが遅かったじゃん。大丈夫かなー、って」

「心配は無用だ」

答を聞いたジンが返した瞬間、ベルがけたたましく鳴り響く。ジンは刀をベッドに取りに行った。

「な、何？」

「警報、か？ 空港から異世界の生き物が逃げ出したのかもしれない。ルーアはここで、扉に鍵をかけて待ってる。警報の長さからすると、危険性の高い生物が大群で脱走したかも」

「わ、わかった」

ルーアはジンの言う通りにした。武器を見てわかる通り、ジンはこんな事態が起きた時のためにユニバースに雇われた傭兵だ。

ジンはベルトで刀を背負うと、ベランダに出た。エレベーターも階段も使わず、ベランダから飛び降りるつもりなのだ。

「はっ！」

飛び降りて、地上に難無く着地する。降りた場所はマンションの近くに通う道路だった。道路には既に、脱走したと思われる生物がいた。

「な、SEED？」

ジンは驚きの声を上げた。ジンが見かけたのは小人のような姿をした、パノンというSEEDだ。

「SEED……。『システムオブグラール』で封印されたはずなの？」

ジンは戸惑いを隠せない。

SEEDとは、『システムオブグラール』という世界に現れた侵略者のことだ。封印されたという報告を世界政府は受けていた。しかし、こうしてジンの前にSEEDはいる。

「せっ！」

数匹がかりでパノンがジンに飛び掛かる。刀を抜いたジンは一刀でそれを切り裂く。

「急がないと、停泊港は大変なことに……」

ジンは刀を仕舞わず、道路を駆け抜けた。

グミシップ停泊港

「なんだったんだ、あれは？」

ジンは呟いた。停泊港までの道に、青いスライムやゴブリンやクリボーやら、おまけに戦国時代にもいそうな歩兵軍団など一貫性ゼロな集団に襲われた。返り討ちにしたが、少しダメージを負ってしまった。SEED以上に戸惑ったせいで、隙が出来てしまったのだ。

停泊港は空港みたいな仕組みで、ポップな宇宙船みたいなデザイアのグミシップが停泊してる。仕組みの関係上、当然海の上だ。

滑走路には青い大トカゲのランポスが大量にいて、占拠といった感じた。ランポスのクーデターみたいだとジンは思った。

「とりあえず、掃除しないと」

ジンは滑走路を駆けて、ランポスを切り伏せていく。時々、ランポスの爪で傷つきながらジンは確実にランポスの死骸を積み上げる。

「貴様がボスか！」

半分ほどランポスを蹴散らしたあと、赤いトサカの大きなボスが姿を現した。この固体をドスランポスと呼ぶ。

「うあっ！」

ドスランポスが飛び掛かり、ジンの左肩を切り裂く。ジンとしては避けたが、昨日の疲労がとれないせいか動きが鈍っていたのだ。ジャケットが裂けて、目の入れ墨が覗く。

（しまった、最近戦い詰めだったから……。疲れが残ってるのか）

ドスランポスは再び飛び掛かる姿勢をとる。ジンは避けることを

やめて、カウンターを取ることにした。

ドスランポスが飛ぶ。ジンはそれに合わせて前進する。そして、刀を振り上げドスランポスを両断した。

「よし！」

「おやおや、君がジン君かね？」

ドスランポスに勝利したジンに声がかかる。ジンは声がした方を振り向く。不意打ち的に声をかけられたので、ジンは緊迫した表情になった。納めた刀に手をかける。

「誰だ！」

「そう怖い顔しないでよ。強いて言うなら、人は私をしまつちゃうおじさんと呼ぶ」

「しまつちゃうおじさん？」

振り向いた方には、ピンクで茶色い水玉模様の、二足歩行のヒョウがいた。ジンは感じる殺気と名前のギャップに戸惑った。疑問の多い不思議な日だとジンは思った。距離は離れてるので、安易に近づかないようにジンは心掛けた。

「そう、この騒ぎを起こしたのも君を呼び寄せるためさ。私は政府から君を確保するよう言われてる」

「私を、確保？」

しまつちゃうおじさんと名乗る獣の言葉を聞いて、ジンは平静を保てなくなっていた。自分が確保される理由に心当たりがあるのだ。ジンは左肩を押さえて言った。

「まさか……、【サイクロプスの目】？」

「そうさ。サイクロプスの目を持つからさ」

サイクロプスの目とは、ジンが生まれながらに持つ入れ墨のことだ。これを見ると、大抵の人間がジンを『世界の破壊者』と罵る。ルーアが部屋に入った時、急いでジャケットを羽織ったのもこのためだ。

自分に世話を焼いてくれるルーアがこれを見た時を想像すると、彼女は悲しみに張り裂けそうになる。

「この印がどうした!」

「私も意味はよくわからない。だが、雇われの身である以上、上の命令には逆らえないさ」

ジンの問い掛けに答えた瞬間、しまっちゃんおじさんはジンのすぐ目の前に来ていた。確かに、距離は離れていたはずだ。ジンは常識外れな出来事に、対応できなかった。

「目を持つ子はしまっちゃんおうね」

「うぐっ、あ!」

しまっちゃんおじさんのボディーブローはジンのか細い身体をたやすく吹き飛ばす。ジンはグミシップに激突して止まった。

「か、はっ……!」

ジンは口から大量の血を吐いた。あばらも折れて、息をするのも苦しいくらいだ。

「さて、しぶとい子はしまっちゃんおうね」

「う、ああっ!」

立ち上がれないジンをしまっちゃんおじさんが蹴り飛ばす。ジンは刀を抜くことすら許されなかった。

「トドメ、か」

しまっちゃんおじさんがジンに近寄る。彼女は力無く横たわっており、動かない。

「う、うう……」

「丈夫な子もしまっちゃんよ」

ジンは無抵抗なまま、しまっちゃんおじさんが放った衝撃波に吹き飛ばされる。一撃ごとに上に吹き飛び、地面に激突する前にもう一撃、もう一撃と受ける。

「くああ!」

最後に特大の衝撃波を受け、ジンは鈍い音を立てて地面に落ちた。

「そろそろしまっちゃんよ」

しまっちゃんおじさんがジンに寄り、掴もうとする。ジンは完全に動かなくなっていた。

しかし、ジンをしまっちゃうおじさんが掴む前に空港が揺れた。

「しまった、ポートランドの崩壊が予定より早くなったか！」

しまっちゃうおじさんの顔に動揺の色が浮かぶ。空港の滑走路がひび割れ、グミシップが割れ目に落ちる。

「しまった！ 目を持つ者が落ちる！」

ジンもまた、割れ目に引き込まれていった。しまっちゃうおじさんは駆け寄るが、落下に間に合わなかった。

「逃がしたか！ 悪運の強い子め！」

しまっちゃうおじさんは悔しそうに地面を踏み鳴らす。その間、空港だけでなくポートランド全体が崩壊していった。

ビジネスマンションでは、ルーアが揺れに堪えながらジンの帰りを待った。不安の表情であるが、目はしっかりとジンが向かった停泊港を見据えていた。

「ジン、大丈夫かな……？」

部屋が斜めに傾く。マンションが割れ目に引き込まれてるのだ。

「ジン……」

ルーアは友人の無事を祈りながら、割れ目にマンションと共に転落した。



この日、世界政府の拠点【ポートランド】は崩壊した。

1 漆黒の騎士（前書き）

世界ガイド

トワイライトタウン

キングダムハーツシリーズに登場する世界。夕暮れの町。現在、王様により世界を失った人々の避難所になっている。

町に路面電車が走り、地下通路も広がる。イベントが行われる広い空き地や時計塔もある。

1 漆黒の騎士

トワイライトタウン 屋敷

ここは常に夕暮れの、煉瓦造りの町、トワイライトタウン。

名所という名所はなく、強いて言えば駅の時計塔くらいしか見るものはない。町中に地下道が通い、町の外れの森には怪しげな屋敷がある。

その屋敷の部屋で、新聞を読む者がいた。赤い装束に身を包み、顔すら赤い包帯で隠した男だ。部屋は書斎みたいなもので、大量の資料が棚や机に置かれている。今、男が座ってる椅子の前にある机にも、資料が大量にある。机の脇に置かれた冷蔵庫が異彩を放つ。

「ふむ。ルーウエンの言う通り、もう新聞やテレビは信用出来ないな。世界間ネットを見るか」

男は新聞を畳むと、ごみ箱に放り投げた。普段からそうやってゴミを捨ててるせいか、最近では百発百中の勢いでごみ箱にシュートできるようになった。新聞がごみ箱に入ると同時に、書斎の扉がノックされる。

「デイズ先生ー。パトロール終わりました」

「そうか。ああ、そうだ。ちょっとわからないことがあるから来てくれないか？」

デイズと呼ばれた男はノックした人間を部屋に呼ぶ。部屋に入れたのは、黒いフード付きロングコートを着た、銀髪の少年だった。

「ルーウエン。世界間ネットの見方だが……」

「画面に青いeのマークがありますよね？ それを押して下さい」

「こうか？」

デイズはノートパソコンを開いて、ルーウエンと呼んだ少年の言う通りにeのマークを押した。しかし、少年が言ったのはクリック

のことで、デイズは画面をタッチして押そうとしている。

ルーウエンはデイズの近くまで行き、パソコンを操作して教えた。

「あー。ここにあるこれをこう動かして、こう」

「なるほど」

デイズはようやく理解した。元々頭のいい人間なので、この程度のデジタルデバイトは乗り越えられる。

しばらくネットを見ていたデイズだが、あることを思い出したように言った。

「ハネカワが呼んでいたぞ、ルーウエン。なんでも、お前が拾った奴が目覚めたとかかな」

「羽川さんが？　じゃ、行ってきます」

ルーウエンは書斎を後にした。デイズは机に置かれた資料のうち、表紙にジャンプと書かれた雑誌を取り出しつつルーウエンを見送った。

屋敷 客室

この屋敷にはいくつも客室がある。デイズは主人だが、ルーウエンや先ほど話題に上がった羽川という人物も、基本的に客室を利用して暮らしている。

「羽川さん、呼びました？　おっと、ナミネもいるのか」

ルーウエンはあるノートを持って普段は空いてる客室に入る。そこには、眼鏡にみつあみの優等生スタイルでキメた羽川翼と、白いワンピースに金髪が特徴のナミネがいた。この屋敷は元々デイズとナミネしか住んでなかったが、ある事情により羽川とルーウエンが暮らすことになったのだ。

「ルーウエンくん、来た？」

「来ましたよ。で、そいつの容態は？」

「怪我は大したことないけど、不思議なのは治りが早いことかな？」

羽川は部屋にあるベッドを見た。ベッドには茶髪の少女が寝かされている。傍らの椅子にはナミネが座っている。

「俺的な気掛かりは、コイツの左肩にこのマークがあることだが……。これはなんだ？」

ルーウエンは手にしたノートを羽川に見せた。そこには、目を象ったマークが描かれている。

「黒歴史ノートね。ルーウエンくんがリアルアースの住人なら、世界の情報ってことで納得いくけど」

ルーウエンが見せた黒歴史ノートとは、ルーウエンが故郷の世界、リアルアースで書いた小説の設定だ。あまりに中二臭いので、羽川には黒歴史と呼ばれている。

リアルアースとは、この世界において特殊な立場にある世界である。リアルアースはトワイライトタウン初め、様々な世界の情報を受信する。リアルアースで漫画やアニメと呼ばれるものは、作者がその情報を受けて作ったものだ。

さらにルーウエン達リアルアースの住人は、リアルアースを一步出ると姿や能力が一変する。これに関しては、デイズも理由がわからない。そもそも、リアルアースという世界の存在すら知らなかったのだ。

「ルーウエンも彼女の住んでた世界はわからない。けど、ソラに繋がる人ではない。それはわかる」

ナミネが口を開いた。ナミネは『ソラとソラに繋がる者の記憶を操る能力』を持つ。彼女が言うからには、この少女はソラと無関係ということになる。リアルアースの仕組みから、世界に詳しいルーウエンも少女のことを知らなかった。

「こりゃ、本格的にモブキャラの可能性が出てきたな……」

「あれ？ ルーウエンくん、これ」

ルーウエンが少女をモブキャラ認定したが、黒歴史ノートをめくっていた羽川がなにかを見つけたようだった。

「なんすか羽川さん？」

「多分、その子の名前はジンよ。ノートに書いてある設定と一致する」

「なん……だと……？」

ルーウエンはノートを確認した。名前はジン・クレツシエンド。茶髪に金眼、身の丈ほど長い刀を背負って戦うなど、少女の特徴に一致する。拾った時の服装や、壁に立て掛けられた刀が、彼女をジンだと証明していた。

「う……」

「あ、起きた」

「ちょうどいい。本人に聞こう」

話し声が聞こえたのか、少女が目を覚ました。開いた目は金眼だった。初めに話し掛けたのは羽川だ。

「大丈夫？ どこか痛まない？」

「ここは……くっ！」

羽川の言葉に反応した少女は起き上がったが、傷がまだ痛むようだ。脇腹を押さえて苦しそうにした。

「聞きたいことは山ほどあるが、名前だけ今は聞こう。俺はルーウエン・ヴァイサス。こっちの優等生が羽川翼で、こっちはナミネ」

「私は……ジン。ジン・クレツシエンド。ここはどこだ？」

ジンは周りを見渡して、場所を確認する。とりあえず、彼女がジンであることはわかった。

次にジンは自分の状況を確認する。服はパジャマに代えられ、傷の手当がしてある。しかし、傷の手当がされてるという現状がジンをある不安に駆り立てた。

「まさか、見たのか？ 目を！」

「ここはトワイライトタウン。目つてのが入れ墨のことをいうなら、見たな」

「っ……！」

ジンの身体が固まる。左肩を押さえて硬直することしかできない。しかし彼女は、そこでふと気が付いた。サイクロプスの目を見た者

は例外なく、彼女を迫害した。けれども今のジンは、目を見られているのにぬくぬくと寝ていられた。これはどうということだろう。

「見られたくないってなら謝るが……」

「いや、別に構わない」

「そっか」

ルーウエンは謝ったが、ジンは布団を被って寝ることでもやり過ぎた。下手に目の事情を話して、目の意味がバレてもまずいからだ。ジンは何故だか全身から力が抜けるような気分だった。妙な安心感があつた。いままでは目のことがバレないように気を使って過ごしていた。けれど、今は目のことを気にせず休める。少なくともルーウエン、羽川、ナミネの三人は目の意味を知らない。

（こんなにゆっくり眠れるの、いつ以来だろ）

ジンは重くなったまぶたをそれに逆らわず、閉じた。布団のせいか、温かい気持ちに包まれた。

（そうだ。ジンと暮らしていた頃以来だな）

ジンとは本来、彼女の名前ではない。彼女の恩人の名前だ。そんな大事な人のことを思い、ジンは少しだけ泣いた。

（ルーウエン、翼、ナミネ……か。この三人なら、少しだけ心を許してもいいかな？）

ジンは目がある関係か、人に心を許さない。心を許して親しくなっても、もし目が発覚したらその分辛いだけだ。だけれど、この三人は目の意味を知らない。なら少しだけ、心を許しても構わないかと感じた。

ジンは三人の存在を確認する。そこでふと、あることに気付く。ルーウエンは目を見た。傷は手当てされてた。傷は当然、服の下にもあつた。

「っ……………！」

ジンは顔が熱くなる感覚を感じつつ、勢いよく起き上がる。そして、壁に立て掛けられた自分の刀まで跳び、それを抜き放つ。抜いた刀をルーウエンの首筋に近づけた。

「見たのか？」

「見たから謝るって言ったよねさつき。まさかの無限ループ？」
ルーウエンは慌てたように言った。言葉からするとルーウエンはジンの台詞の意味を理解出来てないようだ。ジンの言いたいことを察した羽川が、ジンに告げる。

「大丈夫。手当ては私とナミネでしたから、ルーウエンは見えないよ」

「ああ、なんだそうブア！」

ルーウエンがジンの言いたいことを察した瞬間、ジンが峰でルーウエンの首筋を打つ。ルーウエンは盛大に壁へ吹き飛んだ。
ジンによる、最大級の照れ隠しだった。

数分後

「俺の世界、リアルアースも羽川さんの世界、フェイクテイルズも壊されたわけだが。どうも原因がわからんな」

ジンの強力な照れ隠しを喰らったルーウエンは復活して、状況を説明した。ジンの世界、ポートランド以外にも崩壊した世界はあるようだ。ジンはベッドに座ってそれを聞いていた。

「リアルアースって世界が案外特殊でさ、他の世界と違うみたいなんだ。まず、俺の現在の姿はリアルアースの姿とは違う。リアルアースは世界中の情報を受けとって、それが漫画やアニメになる、とかな」

「リアルアースが崩壊してから2ヶ月。政府からは発表はなにもないの」

ルーウエンの言うことには、リアルアースという世界は特殊らしい。ジンはそういう細かいことはわからないので、ナミネの情報に耳を傾けた。

「政府が？ 行政を行うポートランドが崩壊しても、立法に関わる国会は別の世界にあるはず……」

「ポートランドの方は崩壊の理由がわかってるの。デイズさんの言うには、ポートランドには二つの指輪があつて、それを何者かが奪う際にミスがあつたようね。あの指輪は二つ同時に台座から外す必要がある。片方だけ外すと、もう片方を奪われないように、ポートランドという世界を崩壊させて指輪の所在をくらます」

そのプロセスを無視したからポートランドは崩壊した、と羽川は言う。ジンは指輪の話しを聞いて何かを思い出したように言った。

「そうだ、指輪！ 私の首に、鎖で指輪がかかつてなかったか？」

「えっと、これ？」

羽川は鎖を通された指輪をジんに差し出す。紅い宝石が散りばめられた、銀の指輪だ。

「よかった、流血のリング……」

「ポートランドの指輪つて、そんな感じの奴か？」

大事な物だつたらしく指輪が見つかつてホッとしたジンにルーウエンが聞く。ルーウエンは自分の右手の薬指に付けた指輪を見せる。黒い宝石でできた盾の付いた、銀の指輪だ。気になったジンは聞いてみた。

「それは？」

「断罪のリング。この指輪の効果はわからないが、なんかすごいってデイズが言ってた」

「確か、流血のリングは使用者が流した血の量だけ手にした刃物の切れ味を増すって効果があつたな。その指輪はどこから？」

ジンは流血のリングの効果を思い出しつつ、ルーウエンに指輪の出所を聞いた。ルーウエンはあっけらかんと答える。

「昔、誰かからもらった。誰だっけ？」

ルーウエンが答えた瞬間、サイレンらしきものがけたたましく鳴り響いた。

「これって……」

「外敵侵入警報？」

ナミネと羽川がサイレンの意味に気付き、慌てたように言う。

「外敵？」

「このトワイライトタウンには、自分の世界を破壊された人達がたくさん避難してきてる。なかには非戦闘員もいるから、外敵は危険なの」

よく意味の分かってないジンに羽川が説明する。放送が現在、外敵に関する情報を流していた。

『トワイライトタウン駅に外敵発生！ 姿からして無人遠隔捜査のマシナリーと思われる。至急、戦闘員は……』

放送はそれだけ流すと、いきなり切れた。そして、別の声で放送が入る。

『やあ、君らが抵抗勢力の【漆黒の騎士】だね？ 早く目を持つ者を差し出して欲しいな。隠す子はしまっちゃうよ？』

「しまっちゃうって……。あいつ！」

放送を乗っ取ったのは、しまっちゃうおじさんだった。ジンを倒し、ポートランドを崩壊させた張本人だ。ジンは声ですぐにわかった。

「私が行く。あいつは私だけが狙いだ」

「死ぬ気か？ お前まだ病み上がり……」

ルーウエンの言う通り、ジンの怪我では万全の状態ですら倒せなかったしまっちゃうおじさんに勝てるわけがない。そんな奴と戦うとは、まさに死に行くようなものだ。

「でも、私は行く！」

ジンは刀を背負い、指輪を鎖で首にかけて部屋を後にした。ルーウエンはやれやれと頭を搔いて、羽川に告げる。

「羽川さん。ロクサス達に駅の敵をやらせてください。ジンは俺が追います」

「わかったわ。ロクサスに伝える」

トワイライトタウン 空き地

トワイライトタウンの中心街、トラム広場の隣にある大きな空き地。そこは時々イベントが催されるくらい広く、何も無いのだ。部屋を出たジンはそこにたどり着いた。正直スリッパでは走りづらかったが。

「はあ、はあ……。どこにいる！」

「やあ、君がジン君だね？ 病み上がりなのに無理する子はしまっちゃんよ？」

「黙っ……。ね。私が狙いなら、私だけ狙え！」

肋骨が折れてるせいで息をするだけでも苦しいが、ジンは刀を抜いて言った。

「じゃあ、遠慮なく……」

しまっちゃんおじさんは言うなり、ジンに接近した。そして、容赦なくボディーにパンチを打ち込む。

「ぐっ……。あ！」

「しまっちゃんおうね〜」

ジンが空き地の壁に激突したのを見届けると、しまっちゃんおじさんは手を振った。それと同時に、しまっちゃんおじさんの後ろの地面から巨大な岩倉がせりあがってきた。

「私のとっておきな岩倉にしまっちゃんからね〜」

「な、それ……は」

岩倉の扉が開かれる。その瞬間、凄まじい重力がジンを襲った。

「まずい、吸い込まれ……」

「この岩倉の中は重力が発生しているから、なんでも簡単にしまえちやうよ〜」

ジンの体が浮き上がる。元々小柄というのもあるが、ダメージで力が入らず、その場に踏ん張れないのだ。

「うあっ！」

「しまっちゃんよ〜！」

「風車斬り！」

ジンが岩倉に吸い込まれる寸前、何者かがしまっちゃんおじさん

に爆撃に近い斬撃を叩き込んだ。ジンは爆撃に吹き飛ばされ、横に反れたので重力から逃れられた。

斬撃を放った張本人は、上空から空き地に降り立った。当然、岩倉の重力に捕まらない位置だ。

「やれやれ、原作無視もここまでくれば笑い話だ。お前、戦闘要員じゃないだろ作品的に」

「だ、誰だね！ 邪魔する子はしまっちゃんよ！」

しまっちゃんおじさんは斬撃で吹き飛ばされ、岩倉の淵に手を掴んでしまわれないように必死だった。

「ルーウエン・ヴァイス。あと、名前を聞く時は自分から名乗れよしまっちゃんおじさん」

「ルーウエン、お前……」

斬撃を放った張本人、それはルーウエンだった。ルーウエンは背中に剣の鞘を背負い、フードを被っていた。鞘の中身である剣は右手にあった。ルーウエンは漆黒の片手剣をしまっちゃんおじさんに向けて言った。

「お前ら、何が目的だ？ 冥土の土産くらいには聞いてやる」

「ぐぬぬ……。我々の目的は八元素のリング。ポートランドにある二つはちよつと失敗したけどしまっちゃんやったよ。あと、世界中からエネルギーを集めてるけど、あのお方の考えは私にはよくわからない」

しまっちゃんおじさんは岩倉から出ると、重力に耐えながら答えた。全力でダッシュして、なんとか岩倉にしまわれずにいる。

「さあ、真実を知った子はしまっちゃんよ」

「出来るもんならやってみろ。俺はさっきの風車斬りで足を狙った。岩倉に吸い込まれるのは時間の問題だぜ？」

必死に走るしまっちゃんおじさんに対し、ルーウエンは余裕を見せていた。しまっちゃんおじさんは足を痛めており、走るのも苦しそうだ。

「だが、悪役はここで油断して、主人公に負ける。だが俺は容赦

無しだ！ 風車斬り！」

ルーウェンは剣を振る。爆撃に近い斬撃がしまっちゃんおじさんを襲う。しかも、何十発と。ルーウェンは本当に容赦無しだった。まるでグレネードランチャーを連発されてるかのような爆撃の嵐に、しまっちゃんおじさんは遂に耐えられなくなった。

「う、ぐあー！」

「原作無視するような子はしまっちゃんよ」

しまっちゃんおじさんは地面から引きはがされ、岩倉に吸い込まれた。ルーウェンは黒いカードを取り出して呟いた。

「そうだ、これも持ってた」

ルーウェンの投げたカードも、しまっちゃんおじさんと共に吸い込まれる。岩倉は地面に沈んで消えた。

同刻 暗い王座

「来たか。えらく苦戦したものだ」

黒装束で姿がよくわからない男が会議室みたいな部屋で呟いた。円卓が部屋の中央にあり男はそれに資料を並べて、近くの床からせりあがった巨大な岩倉を見た。

「サイクロプスは手に入ったか？」

男が岩倉に話し掛けるも反応がない。岩倉の隙間から滲み出る血を見た男は岩倉を開けた。そこには大量の血液と一枚のカードがあった。

「なんだ。とある世界のらっこが妄想したこの生き物がリアルアイズ住民のトラウマだと聞いたから具現化させたものを……。ままいいさ」

男はカードを拾いあげる。カードは黒くて、そこに白抜きの手と文字が書いてある。裏には盾と鳥の紋章に英語で『漆黒の騎士団』、表には十字架と英語で『ルーウェン・ヴァイサス』と記されている。

「漆黒の騎士団、ルーウエン・ヴァイスス……か」

男は作戦が失敗したのに面白いと言わんばかりに笑った。そして、両手を見る。左右の手にそれぞれ二つずつリングがはめられている。

「常闇のリングと天光のリングはポートランドから手に入れた。

煌炎のリングと水龍のリングはすでに我が手のうち……」

世界を崩壊させた張本人は暗い王座に高笑いを響かせた。

トワイライトタウン 空き地

「さつき投げ込んだカードはこれか……」

ジンはベンチに座り、ルーウエンが岩倉に投げ込んだものと同じカードを見ていた。ルーウエンは応援にきた赤毛の男と話していた。

「ルーウエン、倒したのか？」

「ああ、余裕余裕」

ツンツンした赤毛の男はアクセルというらしく、えらく長身でルーウエンのものとはデザインの違う黒いフード付きコートを着ていた。

「お前、いきなり強くなったな……。この前までストラグルで口クサスはおるかピンツにも勝てなかったのにな」

「離見沢行った時かな？そこを境にいきなり腕があがったつか」

ルーウエンの強さに関して釈然としない内容の話を聞いて、ジンは自分が真面目に修業したことをあほらしく感じた。

ルーウエンは首にかけたロザリオを丁寧に磨いている。コートのせいでジンはルーウエンがロザリオをかけてるなんて気付いてなかった。

「カードの十字架とそのロザリオは何か関係でも？」

「ああ、これは俺の師匠から貰った」

「師匠？」

やはりその強さはよい師匠を持ったからか、とジンは納得した。

一人の自分よりよっぽど訓練の効率がいいと感じたのだ。

「で、このカードの漆黒の騎士団ってなに？」

「それは俺達のチームの名前だ。トワイライトタウンに集まる世界を壊された難民達を守り、この異変を解決するために集まった」

ジンの疑問に答えたのはアクセルだった。

「最近世界中で、『タイガーフォース』を名乗る連中が八元素のリングと『目を持つ者』とやらを狙っている。当面の目的は奴らより先に八元素のリングを得ることだ」

ルーウエンが追加で説明した。タイガーフォースという組織がなんであるかジンには察しがついた。目を持つ者とやらを狙ってたあたり、しまっちゃんおじさんもその一員なんだろう。

漆黒の騎士団。ジンに行く宛てなど無いので、彼女はこの組織に身を置くことに決めた。

2・8月32日(前書き)

世界ガイド

どこかの山奥

『ぼくのなつやすみ』に登場する世界。平凡な昭和の夏休みを楽しめると大人に人気だが8月31日以降の日記を書こうとすると…
…?

2・8月32日

ジンが漆黒の騎士団に入団して三日目。傷も少し癒えたので彼女は仕事に参加する事にした。今、食堂でルーウェンに仕事の説明をしてもらってるところだ。机が並び、組織の人数に対し広いため全員がいるのに寂しく感じる。

「これがカードだ。敵対組織のメンバーを倒したらこれを置いていけ」

「なんでこんな目立つ真似を？」

ルーウェンから黒いカードの束を貰ったジンは呟いた。傭兵としての発想である。名が売れば確かにフリーの傭兵なら仕事が増えるし、組織所属の傭兵は名が売れば存在だけで組織の威厳を高める。ただ、それは傭兵の話。ルーウェン達漆黒の騎士団は傭兵ではなく、単なるタイガーフォースに対するレジスタンスだ。

「警戒されると逆に動きにくいんじゃない？ ユニバースみたいに防衛一方の組織じゃないみたいだし」

「そうかもな。けどさ、俺にはあるポリシーがあるんだよ」

ジンの意見にルーウェンは同意した。しかし、そんな戦略的なものより優先すべき理由が彼にはあるようだ。ジンはわけがわからず考え込んだ。

アクセルが二人の会話に入る。ジンにヒントを出すつもりみたいだ。

「漆黒の騎士団は仕事の関係上、人を殺さなきゃならない時がある。そうだな、これはルーウェンが初めて人を殺した時に考えたシステムだった」

「人を……、殺す？」

ジンが言葉を濁らせる。彼女は傭兵だが、モンスター専門なので人を殺すことはない。人と戦うにしても、やるのは拘束するまでだ。「正解は、そいつを殺した事に責任を持つって意味だ。復讐なら

ぜひ俺までって。要するに、殺すからには殺される覚悟を持てってことさ」

ルーウェンが正解を言って立ち上がった。仕事には屋敷の裏に止めてあるグミシップで向かう。

「殺される覚悟、か」

ジンはルーウェンの言葉を復唱した。その言葉はどこかで聞き覚えがあつたのだ。

『殺していいのは、殺される覚悟のある人間だけだ』

「え……？」

一瞬、ジンの脳裏に声が過ぎつた。ちょっと自分の声に似てたが、自分はこんなこと言つた覚えはない。

「どうしたの？」

声をかけられたので、ジンは振り向いた。そこにはアクセルと同じ黒いコートを着た黒髪の少女がいた。

「シオン。あれ？ ロクサスは？」

「先にグミシップに乗ってるって。ジンの補佐と、行く世界に興味が出たって」

シオンと呼ばれた少女はロクサスの居場所を答えた。ロクサス、アクセル、シオンの三人は漆黒の騎士団でも、外の世界に行かずトワイライトタウンを警護する役割にある。今回、ロクサスは新人であるジンの補佐のために付き添うことにしたのだ。

グミシップ

「俺の夏休みは、あと七日間で終わる」

「日帰りだ。残念だったな」

グミシップのロビー。その多少広いだけで何もない空間にロクサスとルーウェンがいた。ロクサスは金髪の少年で、普段はアクセルと同じコートを着てるが、今日は白基調の私服だ。ルーウェンと髪色や服装でいい感じに対照的だ。

「海がないのが残念だけどな」

「山奥だからな。今回は異変が起きてるし、遊ぶ余裕ないかもな」
ルーウエンは紙の束をロクサスに渡す。ロクサスはそれを見て驚きの声を上げた。

「え？ 夏休みが続いてる？ 8月32日なんてあったか？ うるう年？」

「あー、たしかにうるう年ってなんで8月にもってこないんだろうな」

「40日も休んで、まだ休むつもり？」

二人の他愛もない会話にジンが割って入る。彼女は確かにルーウエンやロクサスと同じ年だが、傭兵であり学校には行っていない。それにジンが働き詰めるのはサイクロプスの目によっていろいろ考えるのを防ぐためだ。身体を動かさないと余計な事を考えてしまうため、なるべく休みをとらないようにしてる。サイクロプスの目で考えるのはどれも辛いことばかりだ。40日も休んだらストレスで死んでしまうかもしれない。

「それよりルーウエンは、人を殺したことあるの？ アクセルから聞いたけど」

「あるよ。つっても、正確な数に入るか微妙だけどな」

「そう……」

ジンは自分の意識をサイクロプスの目から遠ざけるためにルーウエンに聞いた。朝言ってた、殺される覚悟のことだ。

「あ、もしかしたら殺される覚悟より殺す覚悟の方が大変かもよ」
「早く行こう」

ルーウエンが余計なことを喋る前にジンはグミシップを発進させるべくロビー先端の操縦席に座った。操縦席は椅子とモニターがあるくらいで、あとはハンドルしかない。足元にブレーキとアクセルがあるかもしれない。

グミシップは高速で浮上して、気付けば宇宙のような空間にいた。トワイライトタウンが惑星みたいに見える。

「目的地は？」

「自動操縦だ」

ロクサスの指示通り、モニターを自動操縦モードにして目的地としてインプットされた場所を選択する。デイズはユーモアに欠けるタイプらしく、目的地の名称は『目的地10月6日』としか書かれてない。

「目的地って結局どこなの？」

「資料がある。それと、世界間ネットも忘れずに」

ルーウェンがジンに資料を渡す。単なる紙の束だが、これが行く世界の情報である。

世界間ネットとは、世界の王である人物が今回の敵、タイガーフォースが世界を跨いだ行動をするため世界中で情報を共有できるように作ったのだ。この世界間ネット設置にはリアルアースの住人も関わってるらしい。

「夏休みを楽しめる世界、か。夏休みマニアのロクサスが付いてきたのも頷ける」

ジンは資料を見ながら言った。別にロクサスは夏休みマニアではなく、単に夏休みに未練があるってだけなのだが。

「夏休みがまだ続いているってどういうこと？」

「さあな。着いてからのお楽しみだ」

ルーウェンはジンの質問をはぐらかしつつ、窓の外を見た。

山奥 獣道

「ここに命樹のリングがある。八元素のリングがあれば、リアルアースを元に戻せると聞いたのだが……」

山奥に一人の少年がいた。中学の夏服らしい服を着た黒髪の少年だ。名前はバン・グローリー。リアルアースの住人だ。

「しかし漆黒の騎士団とはとんでもない奴だな！ 殺した相手のところにこんなカード置いときやがって、まるで快樂殺人犯だ！」

バンは黒いカードを取り出した。そのカードにはルーウェン・ヴァイスアスという名前と十字架が白抜きで書かれていた。

「そう思うだろクレア！」

「別に……。武器を持って相手を攻撃したら、それは殺されて当然なんじゃない？」

同意を求めたバンの声を、クレアと呼ばれた少女は一蹴した。金髪を伸ばした、赤い目をした少女だ。白い騎士装と鎧を纏っている手には槍が握られていた。

「まったく、クレアはわかってないな。相手を殺しては意味がない。大事なのはわかりあうことさ」

「相手が殺す気満々だったら無理かもね」

クレアはやれやれとお手上げのポーズをとった。立派な思想ではあるが、実現する力がなければ結局口先だけなのだ。

「あれは、グミシップか？」

バンは空を見上げると走り出した。クレアは一応追い掛けるのだった。

広い邸宅 庭

ジン達が着陸したのは、大きな家の庭先だった。着陸といってもグミシップは浮上しておりジン達は飛び降りたのだが。

「この家、誰もいないな」

「見るよロクサス。この家焼き物やつてるぜ」

「あ、本当だ。離れに工房がある」

「うわー！ 棚が崩れた！ ロクサス、キーブレードだ！」

ルーウェンとロクサスの会話にジンは頭を抱えた。さっきまで人を殺すの覚悟なのと言ってたからシビアな任務が待ってるかと思えばこの始末。本来人の気配がしない建物ほどやばいというが、この二人にはその基本セオリーがわかってないようだ。

「なんの、一文字スラッシュ！」

「キーブレード、必要なかったな」

「あー！ 今度は牛小屋に！」

ジンは完全に呆れ、二人を呼び戻すことにした。このままでは奇襲されたら一巻の終わりだ。こんな緊張感のない戦闘要員をジンは見たことがなかった。ユニバース所属の同僚もプライベートでふざけてこそいれど、仕事の時は連携の為に軽口が精々だ。

「ちよつと、ロクサス、ルーウェン！」

「牛がキレたあー！ ロクサス、キーブレードだ！」

「なにやってんだ！」

ロクサスとルーウェンが走って戻ってきたと思ったら牛に追い掛けられていた。牛は怒り狂っておさまりそうにない。

ジンもルーウェン達につられて牛に追い掛けられた。横に逸れればよかったが、あまりに突然のことに避けきれなかった。敵襲ならまだしも、味方が牛を怒らせるとは。

「この家は牛も飼ってるのか」

「ルーウェン！ なに遊んでるの！」

「俺が悪いみたいにな！」

状況を冷静に分析するロクサスとは対照的にルーウェンとジンは全力で逃げた。牛という生き物はなかなか早い。プロの傭兵にすら追い付きそうだ。

気付けば家を出て山道にいた。そして、前には人影。

「誰だ？」

「敵か？」

牛に追い掛けられるというマヌケな構図ながら、ロクサスとジンは警戒した。世界を巡るにはグミシップが必要だ。一応、グミシップはすべて王の管理下にあり、漆黒の騎士団にもグミシップの運用状況は伝わる。事前にその手の情報がなかったため敵の、つまりタイガーフォースの可能性を考えたのだ。

「お前がルーウェンか！ この快楽殺人犯め、倒してくれる！」

「面倒臭い中坊だな……。コイツは俺がやろう。お前らは仕事を

続ける」

人影は中学の夏服を着た人物、バン・グローリーだった。ジンとロクサスは脇に逸れ、牛の追撃を振り切った。

「これ以上命を奪うのをやめろ！」

「やれやれ、お前はなににもわかってない」

「なに……？」

ルーウエンは牛に追われながらバンに向かって走る。

「というわけでくらいやがれ。猛牛アタック！」

そして、飛び上がった。牛は飛んだルーウエンの下をくぐり抜け、バンに激突した。

「ギヤアアア！」

「悪いな。俺の相手は俺だ」

ルーウエンは声高らかに宣言した。

広い邸宅 子供部屋

「仕事はたしか、原因の調査よね……？」

ジンは仕事をするために着陸した家にとんぼ返りした。仕事とは、今だに八月が続いてるといふよくわからない状況を調査することだ。ベッドと机のある狭い子供部屋をジンは調査していた。そこで彼女は興味深いものを見つけた。絵日記だ。

「なにこれ？ 8月67日？ どうなってるの？」

その絵日記はいろいろと奇妙だった。ベッドに腰をかけて読んでみると、8月31日以降が奇妙なのだ。いや、この絵日記すべてが奇妙であることにジンは気付いた。

「なにこれ……？ 書いたページの上からまた8月32日以降の日記を？」

その絵日記は何度も同じページに日記を書いたあとがある。辛うじて日にちだけ読み解けたが、それ以外の内容はさっぱりだ。始めのページなど、三回ほど上書きされていた。

「よくわからない」

ジンは絵日記を机に置くと家を出た。家は調べつくした。住人がいない。離れと牛小屋はルーウェンが壊してしまった。もう家にめぼしいものはない。

「スターズ……」

「へ？」

庭に出たジンは声を聞いた。声の方を振り向くと、そこには黒いコートを着た大男がいた。肌が爛れ、所々紫色の触手が覗いている。「こいつは！」

ジンが知るよしもないが、ルーウェンなら、リアルアースの情報で彼の正体を見抜いたはずである。

「ユニバースのデータバンクにあった、追跡者？」

追跡者ネメシス。ある世界で開発された生物兵器だ。コートにはタイガーフォースとアルファベットで刺繍しており、タイガーフォースに所属してあることがわかる。

「化け物の相手は私の役目、か」

さっきまで人を殺すのなんだの迷いのあったジンの瞳は、まっすぐにネメシスを見据えた。

山奥 獣道

「何を調べたらいいかも、わからないなんて」

ロクサスは自虐気味に呟いた。夏休みといえば海とばかり考えていたロクサスは、山でやることがわからないのだ。

「あ。あれは？」

ロクサスは目の前を虫が横切ったのに気付いた。大型の甲虫、ヘラクレスオオカブトだ。しかも、羽の部分がなんか白い。

「これは、ヘラクレスリッキブルーじゃないか！」

ロクサスはカードの絵でしか見たことのない虫を追い掛けることにした。

山奥 町へ下りる道

「何故人を殺す！」

「あつちが殺そうとしたからだ！」

バンとルーウエンは死闘を繰り広げていた。バンの武器は籠手が大型化したナックルだが、ルーウエンと互角だ。下る道のため、相手より高い位置にすることが勝負の鍵だ。牛はバンに殴られ、気絶していた。

「何故むやみに殺す！ 無力化するだけでいいはずだ！」

「相手が殺す気ならこつちも殺す気でいかねえと死ぬんだ！ わかったか中坊！」

「それは甘えだ！」

バンが両手の拳を使うのに対し、ルーウエンは片手剣のみ。手数に差があるはずだが、ルーウエンはバンの攻撃をすべていなしている。実力はルーウエンの方が上だ。

「甘えだ！？」

ルーウエンとバンは言い争いながら戦っていた。バンにはルーウエンが戦った相手を殺す理由がわからないのだ。

「そうだ。それは甘えだ、ルーウエン・ヴァイスス！」

「バンとか言っただな……。誰一人殺す覚悟がなくて、なにが守れる？」

二人は手を止めた。ルーウエンが上の方にいる。バンはルーウエンの考えが理解できないとばかりに叫ぶ。

「誰かの犠牲の上に生かされて、その人は嬉しいと思うのか！」

俺は誰も殺さず、リアルアースを復活させるためにタイガーフォースに入った！」

「リアルアースの住人、か。やれやれテンプレ批判乙。たいてい犠牲になる奴って、守りたい奴の命を狙ってるんだろ？ なら殺すのが一番そいつを安心させる方法だ。人の命を守るってのは、そん

な甘い発想で出来ることじゃねえ！」

「この人殺しめ！ そんなのは間違ってる！ 敵だった奴も、いつかは仲間になれるかもしれない！ その可能性をお前はみすみす見逃すのか！」

バンにそう言われたルーウエンはというと、やれやれお手上げだと肩を竦めた。

「握り拳とは握手できないさ。今の俺とあんたがそうだ。もしそんな可能性があるなら、戦ってる時にわかる。もう一度聞こうバン・グローリー。お前の目的はなんだ？」

「俺の目的は、なにも奪わず、なにも失わず、リアルアースを取り戻すことだ！」

バンは拳を突き上げ、宣言した。ルーウエンはそれを見下す目で見ていた。

「お前はその目的のためになにを捨てた。俺は捨てた」

「人の命をか！」

「いや、自分の潔白さ。俺には守りたいものがある。今の仲間、羽川さん、ナミネ、デイズ、ロクサス、アクセル、シオン、避難所のみんな、そんでジン。守りたいものは大くなる一方だ。俺は、それを無くしたくないから、代償を払った。これがその代償だ！」
ルーウエンが歩き出し、バンが身構える。ルーウエンから溢れるほどの闇が流れ出す。

「うっ！ いきなり持病の心臓病がヤバくなったぞ……！ あとは、頼む……。バタリ」

そして、苦しんで倒れた。

「な、なんだ？ おい、大丈夫か！」

バンは今まで戦っていた相手だということを忘れ、ルーウエンに駆け寄る。

しかし、それは罠だった。

「スキあり！」

「ぐあっ！」

ルーウエンはバンが近づくのに合わせて起き上がり、アッパーを決めた。バンは吹き飛び、かなり道の下の方で頭を打って動かなくなった。

「これが俺の代償だ！ 正々堂々だの、もう捨てた！ ようは勝ちやいいのさ！ 頭の打ち所が悪かったかな？ 死んだだろうし、おいていくか」

ルーウエンは黒いカードをコートから取り出し、バンに投げた。ルーウエンは仕事をするため、家へ戻った。

広い邸宅 庭

「くそっ！ 強い……！」

ジンはネメシスに押され気味だった。傷が完治してないこともあり、一拳一足が身体に響く。

自分の攻撃すら傷に響くため、なかなか攻撃を出来ずにいた。そのため、彼女に分の悪い防御中心の戦いになってしまう。ジンの持ち味は（本人は認めたくないが）小柄な身体を生かして高速で敵の懷に潜りこむ攻撃主体の戦闘。傷が原因で速度を出せず、そのスタイルができないのだ。

「どうすれば……」

ジンは考えた。しかし、ともに頭を使って戦ったことのないジンには難しい。考えてるジンの耳に、エンジン音が鳴り響いた。

「ヤッホー、ジン」

「ルーウエンっ？」

ルーウエンがバイクに乗ってやってきた。バイクはウイリー走行をしており、そのままネメシスにぶつかった。ネメシスはよろけて倒れた。

「今だ！」

困惑するジンにルーウエンの声がかかる。ジンは我に返り、立ち上がろうとするネメシスに駆け寄った。

「流星、」

ネメシスが彼女の姿に気付いた時には、すでに遅かった。ジンは太刀を横に薙ぎながら駆け抜けた。

「極爪！」

ネメシスの身体に一筆書きで星を書いたような切り傷が刻まれる。ネメシスは崩れ、動かなくなった。

「そのバイクどうした？」

「グミシップに積んであったの忘れてた。サラマンダーだ」

ジンはルーウエンのバイクに目を向けた。漆黒の大型バイクである。サラマンダーという名前にはジンも聞き覚えがあった。

「サラマンダーって、グリフォンやフェンリルに並ぶバイクブランドの？」

「まあ、グリフォンみたいなデザイン重視のデくのぼうより速いけどな。オフロードはフェンリルの専門だが、オンロードならサラマンダーが一番速い。初仕事の後に世界まわって修業しててさ、その時に手に入れた」

「なるほど。私もバイク持つてるが、軍用のバハムートって味気ない奴だな」

「バイクトーク中悪いが、こちらを向いてもらえると助かる」

バイクトークに花を咲かしてる二人に、不意に声がかかる。少女の声で、やたら凜としていて落ち着いている。そこには白い騎士装をまとった金髪の少女がいた。伸びた金髪が夏の風に吹かれ、優雅になびく。

「バンを倒したようだな。なかなかの腕だ。私はクレア・ハーデイ。強さを追い求める者だ」

クレアは緑色の、豪華な飾りが付いた厚い本を持っていた。

「君の信念はなかなか見上げたものだ。なにかを守るために、自分の潔白、つまり自らの安全や平穩を率先して捨てる。私程度にはとても追いつけない領域だ。そして、そうした者は強い」

クレアは本の飾りの中央から指輪を取り外した。それは緑の宝石

が付いた、葉を模したデザインのものだった。

「これは命樹のリング。八元素のリングが一つ。これがあればリアルアースが復活したり、フロントワールドって兵器が動いたりするとの話だが、私にそれは関係ない。これを狙って強い奴がたくさん来るっただけで、私は充分だ」

「八元素のリングだと？」

ルーウエンがクレアの長い言葉にようやく入れた。クレアはルーウエンを見つめて言葉を続ける。

「そうだ。この本がこの夏休みが終わらない原因だ。この家の日記帳から思い出を吸い取り、命樹のリングに力を与えていた。ルーウエン・ヴァイス、これは再会の約束だ。リングが欲しければ私を追い、タイガーフォースに抗え。本来なら今戦いたいところだが、君はすでにバンと戦った。連戦は君が不利になる」

クレアは緑色の本をルーウエンに投げ渡し、ネメシスの足を掴んで引きずっていった。

クレアの姿がなくなると同時に、二人の前に一人の少年が現れた。少年は顔や服の配色がめちゃくちゃで目も当てられない状況だ。

「ルーウエン！ 本、見てっ！」

ジンの声を聞き、ルーウエンが渡された本を見た。本は勝手にパラパラとめくれ、文字が溢れだした。文字は光になり山に降り注ぐ。山の緑はたちまち紅葉していく。暑い空気は冷えていった。

「どうなっているの？」

「この本が、一人のガキの妄想を具現化したみたいだな。デイズが言ってたけど、八元素のリングってのは大半が未完成なんだ。この本は多分、命樹のリングを完成させるための装置なんだと思う」

ルーウエンはジンに本を渡しながら、彼女の疑問に答えた。ジンは本の表紙裏を見て呟いた。

「命樹のグリモア。我、人の思い出を得てリングを生むものなり。つまり、思い出がリングの栄養ってこと？」

「多分な。詳しくはデイズに聞かないとわからないや」

ルーウェンとジンは、秋の装いとなった山を眺めた。秋の風がジンの頬を撫でる。

思い出。彼女にとっては楽しい思い出よりも悲しい思い出が多い。思い出を栄養にするということがまだ、ジンには理解が出来なかった。

3 ルーウェン・ヴァイサス散る（前書き）

世界ガイド バロウズ邸

クロックタワーに登場。迷路のように入り組む大邸宅。迷いやすい点とシザーマンに目をつぶればよい物件。つまりわけあり物件。

3・ルーウェン・ヴァイスス散る

トワイライトタウン 屋敷の会議室

「原因がわかった。恐らく命樹のグリモアは焦っていた」

会議室にデイズとジン、羽川はいた。先日の任務で見つけた命樹のグリモアが異変を起こした原因がわかったのだ。

「焦ってた？」

「このグリモアは命樹のリングを完成させるための装置に過ぎない。思い出という栄養を得るための消化器官のようなものだ。何らかの理由で命樹のリングの完成が急がれ、栄養をより多く得るために夏休みを続けたと考えるのが妥当だ」

「夏休みって、思い出がたくさん出来るもの。思い出が欲しかったら夏休みを繰り返すのが一番早いわね」

デイズの解説に羽川が付け足す。命樹のリング完成と共にグリモアが夏休みの呪縛を解いたのも納得できる。

「理由はだいたいわかったけど、夏休みってのは思い出を大量に残すものなのか？」

ジンは夏休みをあまり知らず、メカニズムは理解出来たが夏休みの実態を掴めずにいた。

「夏休みってのはそういうもんさ。ま、俺ら受験生は大変なだけだな」

「ルーウェンって、『受験生』だったのか？ 言葉は知ってるが受験生つてのもよくわからない」

ルーウェンが会議室に入る。手には前回の仕事の報告書がある。

「ああ、高校受験の真っ最中だ。幸い、羽川さんのおかげで学校通うより成績がうなぎ登りだな」

「高校？ ルーアも時々言ってたっけ」

ジンはポートランドの友人に思いを馳せる。世話焼きで、なにか

と助けられた。今はどこで何をしてるのやら、少しだけ気になっていたところだ。

「ルーウェン。情報が入った。リアルアースの住人が目撃された。この写真だ」

「これは？」

デイズがルーウェンに一枚の写真を見せる。その写真には一人の少女が写っていた。ルーウェンはその写真をまじまじと見て言った。

「こいつ、リアルアースでのクラスメイトじゃないか！」

「え？」

「やはり、か。リアルアースの住人はリアルアースにいた時と姿が違う。が、知り合い同士なら認識可能。トラヴァースタウンでそんな研究結果が出ていたのではな」

「しかも俺の片思いの人じゃないか！」

デイズの解説もそこにルーウェンはソワソワしだした。片思いだそうだ。

「今回の仕事は彼女と接触し、避難所に連れて来ることだ。グミシップのメンテナンスが済み次第向かえ」

「了解！」

ルーウェンは走って会議室を出て行った。ジンはなにやら釈然としない気持ちでそれを見ていた。

トワイライトタウン 避難所

ジンは気づくと避難所まで来ていた。ルーアのことを考えていて、知らないうちに着いていたのだ。

町に設置された避難所では今も多くの人々が暮らしている。王様の支援のおかげか生活には困らない段階まで来てるが、被災者の自立など、課題はまだある。マンションみたいなもので、避難所というより仮設住宅に近い。

「初めまして。貴女が新しい漆黒の騎士団メンバー？」

「え、ええ」

避難所の近くにある公園に入るといきなり声をかけられた。声をかけてきたのは金髪の女性だ。羽川と同年か少し上かもしれない。

「私はヨヨ。よろしく」

「ジン・クレッシェンドだ」

ヨヨとジンは互いに自己紹介した。ヨヨという名前はちょっと耳にしたことがある。どこかの世界の王女だった。

「ルーウエンはどうしてる？ 最近あの子、顔見せないから」

「大丈夫だ。生きている」

「そう。ならたまには顔を出すように言っておいて。あの子、かなり無謀なことやるから。貴女も、トリートメントくらいした方がいいかもね」

ヨヨはジンの茶髪に触れて言った。ジンは服装などオシャレをしない。気にかけるのは最低限の身嗜みのみだ。髪は整えているが、実は痛みまくって体以上にボロボロなのだ。

「あ、ああ」

ジンもルーアと同じ空気をヨヨに感じたからか、拒絶は出来なかった。

トワイライトタウン 空き地

「すげえロクサス！ こんな虫どこで捕まえたんだ？」

「仕事で行った世界で捕まえたんだ」

ロクサスとその友人である少年、ハイネは空き地のベンチに座って話していた。ロクサスの持っている虫かごには、ヘラクレスリッキーパープが入れている。

「それよりさ、八元素のリングは見つかった？」

「この前相手に一つ渡った」

そんなネガティブな情報を流しつつ、ロクサスは夕暮れの町を眺めていた。

グミシップ ロビー

「で、準備出来たと聞いたから来たのに、こいつの浮かれようはなによ」

グミシップに来たジンはルーウェンがやたらソワソワしてるのを目撃した。

「目的地はバロウズ邸、か。一つの世界の、誰の家かなんてよく特定したわね……」

「バロウズ邸はお化けが出るって有名なんだ」

「お、お化け……？」

お化けと聞いた瞬間、ジンの顔色が変わった。お化けとかダメなタイプかもしれない。

「お化けとか苦手か？」

「そ、そんなことはない！」

ジンは必死に否定するも、お化けが嫌いだと顔に書いてあるような状態だ。凶悪モンスターに立ち向かうユニバースの傭兵にも弱点はあるのだ。

「んじゃ、いっちょ行きますか！ バロウズ邸へ！」

ルーウェンはモニターに向かって、自動運転の操作をした。

コントロールルーム

「これが、フロントワールド」

黒装束の男が、中央に大きな羅針盤のようなもののある部屋にいた。部屋は広く、部屋の隅に縁取るように水が流れている。

「リアルアースという結界を得ることで封じられていた最終兵器。リアルアースの住人すら防衛システムの一環に過ぎない、か。封印が解け、姿形の変わったクレア君やルーウェン・ヴァイサスが高い戦闘能力を有するのも理解出来る」

男は羅針盤の淵を指でなぞりながら呟いた。羅針盤にはサイクロプスの目が刻まれている。ジンと関係があるのだろうか。

「そういえばバン君の友人が仇討ちに必死になってたな。バン君は生きてるのに、せっかちな子だ。まあ、ルーウェンがこの程度で負ければそれまでの戦士でしかないということか」

男は羅針盤を見ながら、これからの計画を組んでいく。世界を統一する為の計画を。

バロウズ邸 ロビー

「あ、お客さんみたいよ暁美さん。出るね」

「その必要はないわ」

豪邸というより迷路に近い間取りを持つバロウズ邸。そのシックな佇まいをしたロビーに二人の少女がいた。一人は栗毛のよくいそうな感じの少女。彼女がルーウェンの片思いの人だ。

「またシザーマンを奪いに来た連中かもしれない」

もう一人の少女は長い黒髪をなびかせ、地味な色合いやデザインではあるが魔法少女のような衣装に身を包んでいる。彼女は魔法少女の暁美ほむら。ざっくりいうと現在、バロウズ邸はほむらのものだ。

彼女がバロウズ邸に来た当初はシザーマンがいたが、どうやったのか鉄を奪って樽に押し込めてしまった。魔法少女とは恐ろしい。その後、リアルアースが崩壊してバロウズ邸に行き着いた栗毛の少女を住ませている。

「タイガーフォースの人ですね……。暁美さんに任せる」

栗毛の少女はほむらに來客を任せると、ロビーの奥へ行った。ほむらはゴルフクラブを取り出し、玄関へ向かう。

「ちわー。漆黒の騎士団です」

扉の向こうから声がした。ほむらは慎重に声の主を確認した。「馬鹿ね。そんな怪しげな団体の名前出して開ける人いない」

扉の向こうからは少年の声以外に少女の声も聞こえる。タイガーフォースの連中は今まで、男しか来ていない。女性を連れて来たのだろうか。

「新聞と魔法少女の契約なら間に合ってるわ」

ほむらは漆黒の騎士団と名乗る二人に返事をした。しばらく二人はキョトンとしたように黙った。

「魔法少女？」

「クロックタワーに魔法少女はいなかったな。なら、他の世界から来た奴だな」

（こちらの正体を知らない？）

タイガーフォースとほむらはシザーマンを巡り何度か戦闘した。ただ、人の家に土足で上がり込むタイガーフォースが悪く、ほむら自身はシザーマンなんかじゃないと思ってるが。

それなのに扉の向こうの二人はこちらの正体に気付かない。タイガーフォースではないとほむらは判断した。

「入って」

「お、センクス」

ほむらが扉を開けると黒コートで銀髪の少年と、茶髪の少女がいた。少年はほむらの一つ年上くらいだった。さつさと屋敷の奥へ歩いていく少女は同い年だと判断した。

「俺は漆黒の騎士団メンバー、ルーウェン・ヴァイス。こっちはジン。実は、こいつを探しててな」

ルーウェンと名乗る少年はコートの懷から写真を取り出す。それには栗毛の少女が写っていた。ほむらは思わず驚く。

「メイ……？」

「知ってるのか。メイ、か。この世界じゃその名前なのな。俺はメイと同じ、リアルアースの住人だ」

ルーウェンは事情を説明した。ほむらは少し、彼のここを訪れメイを探した目的に興味が出た。

バロウズ邸 中庭

「一つ、聞きたいことがある」

「なに？」

「リアルアースが崩壊した時の状況」

ほむらとルーウエンがロビーで話し込んでる間、ジンはこっそり屋敷の奥へ向かった。少しでも屋敷の情報が欲しかったのだ。歩くうちに中庭に出て、栗毛の少女メイと会ったのだ。

中庭にはプールがあり、泳げないジンはプールの必要性に疑問を感じたが今は黙殺することにした。

メイは頭を捻ってジンの疑問に答える。

「うーん。いきなり崩壊したから、わからない」

「なら、崩壊の前に異変はなかった？」

「それならあるよ。日本中に大きな建物がたくさん建てられた。

新型の発電所だった」

ジンは新型の発電所という言葉に注目した。ルーウエンも同じことを言っている。デイズも『新型の発電所』以外、情報のなさ故仮説しか立ててなかったが、リアルアース崩壊の原因はわかった。いや、もしかしたら羽川やヨヨの住んでた世界の崩壊理由も同じかもしれないとデイズは言っていた。

「新型の発電所が、もしも世界からエネルギーを吸い出す施設だとしたら、エネルギーを吸い尽くされて世界は崩壊した、か」

ジンはデイズの仮説を呟いた。普段はアイスばかり食べていて、研究者にすぐわない服装をしてるデイズだが、研究者としての頭脳は天才的なのだ。それ故、一応デイズの仮説は正しいとジンは考えた。

「タイガーフォースはなんのために世界を……？」

ジンは難しいことを考えるのが苦手だ。クレアがまとめてくれたにも関わらずルーウエンの言った「殺す覚悟と殺される覚悟」のことが理解出来てない。

「あ、あれは？」

しかし、ジンの思考は打ち消された。敵襲があつたのだ。

「敵か！」

塀を飛び越えて来たのは、緑色の四角いモンスターだった。シューという音がしており、四角で出来た雪だるまみたいな感じだ。腕はなく、足と思わしき四角は四つについている。そんなモンスターが大量にいた。

「メイは逃げて。こいつら、嫌な予感がする……！」

「わ、わかった」

メイが中庭からいなくなったことを確認すると、ジンは背中を抜いた。

バロウズ邸 ロビー

「こいつら、クリーパー！」

「知ってるの？」

ロビーにいたルーウエンとほむらのもとにも中庭にいたモンスターが現れた。玄関を爆破して侵入したのだ。

「ああ。こいつら爆発するんだ。こんな屋敷リフォームされるぞ！」

ほむらはルーウエンの言葉を聞きながら銃を構えた。魔法少女的な武器ではなく、本物の実銃だ。それでクリーパーの内一匹を仕留める。

「自分の意思でしか爆発しない、撃つても爆発しないのね」

「よし、なら俺が全部斬る！」

「その必要はないわ」

ほむらはクリーパーの性質を確認するとルーウエンの提案を却下しつつ、左腕に丸い盾の様なものを装備した。こちらは色合いが地味だが魔法少女的なアイテムだ。

ほむらは魔法を発動させた。すると、一瞬でクリーパー達は風穴

を開けられて倒れた。

「な、なんだあ？」

「時間を止めて、その間に全部倒した」

「時間停止能力……？」

ルーウエンは魔法少女としてはこれまた地味で反則レベルな能力に驚いた。ルーウエンとしては盾から光が出て一掃するものだと思うっていたのだ。

「さあ、今日こそリアルアース復活の為にシザーマンを渡してもらう！」

タイガーフォースの人間と思われる武装集団がクリーパーの爆破した扉を乗り越えてきた。全員がマシンガンの様な重火器を持っている。

「やれやれまたリア充か。俺としては別にリアルアースに帰れなくともいいんだが」

「貴様！ バンの言ってた快樂殺人者！」

ルーウエンの言葉に武装集団が反応した。実際、ルーウエンが殺した数は二人に満たないのだが。

「快樂殺人者はどっちだか……。お前ら、そんなたいそうなもん持つてるからどうせ殺されないとか思ってたんだろ？」

「当たり前だ！ こんなもん持って、剣に負ける奴いるか！」

ルーウエンの問い掛けに武装集団は即答した。しかし、ルーウエンは嘲笑の目を向けて笑い飛ばす。

「それなら戦術に立つ覚悟は、無い！ では昔話をしよう。俺は漆黒の騎士団に入った当初、サポート要員だった」

ルーウエンは昔話を始めた。剣を抜いて、指揮棒の様にもてあそび、演技がかった仕草をする。

「俺は護身用に銃を隠し持ってたんだがな。ある日トワイライトタウンの避難所が制圧されたんだ。そこで、俺も捕まった。相手はマシンガンを持っていた。今のお前らみたいにな」

「それがどうした？」

ルーウエンの昔話を武装集団はさほど真剣に聞いていなかった。

当然である。いきなり戦闘中に昔話を始める人間など正気ではない。

「俺は捕まつてるとヤバそうだから、スキを見て反撃したんだ。

敵の頭に俺の弾丸が命中して、即死だ。そんな時俺は何となく理解した。こんなに武器の性能差があっても、相手が武器を持つてりゃ反撃されて死ぬんだ、って」

「意味がわからん。その時の敵は馬鹿かもしれんが、俺達は違う。そこまで馬鹿ではない。スキなど見せん」

「いいや同じだね。圧倒的な人数差と武装差があるから自分だけは死なないと思ってやがる。そんな奴に武器を持つ資格も人を傷付ける資格もない……！」

ルーウエンは右手に持った剣を武装集団に向け、首にかけた口ザリオを掴んだ。そして、武装集団に確固たる覚悟を持つて宣言する。

「ロツソ・ファンタズマ。二度とそんな薄っぺらい覚悟で武器を持てん様に、腕一本貰っていくぜ」

その瞬間、ルーウエンの姿が揺れた。

バロウズ邸 中庭

「うつ……あ」

ジンは中庭に倒れていた。クリーパーの爆発に巻き込まれたのだ。ジンのとった戦法はこうだ。クリーパーを連れて中央のプールに飛び込み、爆発させる。クリーパーは爆発までに全滅させられる数ではなかったが、彼女はユニバースのデータベースからクリーパーの情報を端的に知っていた。結果として爆発のダメージはジンと建物共に半減させたが、それでも彼女は再起不能レベルのダメージを負ってしまった。屋敷の方はプールの水が無くなった以上の損害は受けてない。

ジンはずぶ濡れで中庭の壁に背中を預けた。こうしていると、昔を思い出す。サイクロプスの目が原因で差別を受けていた頃だ。よ

く雨宿りもろくにできず、雨に打たれて座り込んでいた。

「ジン……私は、まだ、生きて……」

ジンというのは彼女の名前ではない。彼女を拾ってくれた傭兵の名前だ。ジンは恩人の事を思い出して目を閉じた。

5年前 ポートランド郊外

時はしばらく遡る。ポートランドの郊外にバス停があった。屋根もない、ベンチだけのバス停だ。雨の日だった。

ただでさえ小柄なのに、今よりいくらか小さいジンはそのベンチに寝ていた。理由は単純。金がなくどの宿にも泊まれなかったし、サイクロプスの目が原因で誰の助けも借りられないのだ。当時、サイクロプスの目が原因ということもわからなかった少女は涙も涸れ、点々と各地をふらふら渡り歩く生活をしていた。

そんな折、バス停を一台の車が通る。バスではない。もうこの時間では始発までバスは来ない。屋根のついた軍用のジープだった。

ジープから下りる人影をジンは見た。サイクロプスの目を持つと知れば、二言目には罵声が飛ぶ。そんな状況になれていた彼女はベンチから動こうとしない。

人影は銀髪の青年だった。青年の口が開く。ジンとしては罵声を浴びせされる覚悟は出来ていた。ただ、殴られたり痛い目にあうのは嫌だったが、逃げる気力もなかった。

「大丈夫かい？ こんなところで寝てたら風邪ひくよ？」

しかし、青年が口にしたのは罵声ではなかった。この青年が、ジンの恩人であり彼女が名前を受け継いだ初代ジン・クレッツシェンドである。

現在 バロウス邸中庭

「何となく似てるのよね……」

ジンは膝を抱えてまどろんでいた。ルーウェンと初代ジンは外見が似ている。まるで生き写しだった。しかし、性格までは似ていない。初代ジンは紳士的だったが、ルーウェンはひっちょかめっちょかだ。

ジンは気付けば眠りについていた。

バロウズ邸　ロビー

「貴方、その魔法……！」

「え？　知ってる？」

ほむらはルーウェンが行ったことに驚いた。いきなり敵の腕を落としたことではない。

ルーウェンが発動したロツソ・ファンタズマという魔法だ。これは分身魔法で、原理としては相手に幻覚を見せているのだ。

「それは、佐倉杏子の……」

「杏子を知ってるのか。見なかった？　探してるんだが。ロツソ・ファンタズマもそいつから使い方を習った」

ルーウェンはあっけらかんと言った。この技はほむらの知り合いからの受け売りなのだそうだ。

「おいこれはどういうことだ！　計算違いだぞ！」

目の前で仲間の一人が腕を落とされた瞬間、武装集団は逃げ出したが、それと入れ代わりに一人の男が来た。

「やけに制圧が遅いと思ったら、たった二人に足止めされていたのか！　クリーパーはどうした？　おい、おい待て！」

「あ、黒幕来ちゃった」

男は武装集団に声をかけるも、武装集団は泣き言を喚いて逃げってしまった。男は一人取り残された。

「貴様がルーウェンか。よくも私の華やかな人生の邪魔をしてくれた。これ以上人生設計狂わされると困るんだよキモオタ風情が！」

男は気を取り直してルーウェンに喚いた。しかし、ルーウェンは

剣を構えて動かない。

「言いたいことはそれだけか、ゆとり」

「そんなこと言っていないのかな？ こっちには人質がいる！」

ルーウエンの反応に対して男は、人質を取り出した。人質の姿を見たほむらが思わず叫ぶ。

「メイ！」

「曉美さん！」

人質はメイだった。クリーパー2匹がメイを拘束している。男は高笑いをしている。

「てめえ！ 人質を取るってことは、死んでも文句ねえよな！」

「いいかキモオタ。人質がいるということはこちらに君は手出し出来ない」

男は自信満々に語る。しかしルーウエンは、剣を構え続けた。

「私が時間を止めて……」

「その必要はないぜ。俺に案がある」

ほむらの提案をルーウエンは却下した。ルーウエンは一步、男に向かつて歩く。

「何もできんだろ？ 私の能力でクリーパーを操ってるのだ。キモオタ風情にはない能力だ」

「知るか。ネタバレ乙」

ルーウエンは剣を振り下ろす。すると、男が爆風に吹き飛ばされた。風車斬りだ。なぜ斬撃なのに爆発するか不明だ。

「なっ！ なにを……！」

男の精神が乱れたことで能力の支配が解けたのか、クリーパーはどこかへ行ってしまった。洗脳系の能力は扱いが難しく、術者が精神の平静を欠けば容易に解ける。三ヶ月そこいらで完全習得出来るものではない。

ルーウエンは男がコントローラーの類を持ってないことを確認すると、男を攻撃して術を解除した。そうすれば男はクリーパーに指示が出せなくなる。

男は人質を失い、自分が非常に危険な状態にいることに気付いて慌てだした。

「ま、待って、許してくれ！」

「許さん」

必死な命乞いもルーウエンは無視する。

「私が悪かった！」

「俺は悪くない」

男はこの状況を打開する最後の手を思いついた。手持ちのナイフでもう一度メイを人質に取るのだ。手持ちのナイフといってもペーパーナイフだが、首筋を切れば充分人は死ぬ。

「フハハッ！ 形勢逆転だ！」

男はメイに向かって飛び掛かる。しかし、ルーウエンも同時に動いていた。

「てめえはとことん救えねえ男だ」

男がメイに届く前に、ルーウエンは男を切り裂いた。踏み込みで男を通り過ぎ、男が真つ二つになるのを確認したらバク転でもとの位置に戻る。剣を収めたルーウエンは、メイまで歩いていった。その手には剣ではなくやたら豪華な花束があった。

「な、なに？」

遠くで見てるほむらは戸惑った。思わず目を擦って、何時からかかけてなかった眼鏡までかけて確認した。そのくらい、ルーウエンの行動は意味不明だった。

当のメイも困惑している始末だ。

「リアルアースにいる頃の俺じゃあ、自分に自信が無くて言えなかったんだ。けど、俺は今なら言える気がしたんだ」

「？」

ルーウエンは恥ずかしそうに目をメイから反らしながら、武装集団に言った時とは違う覚悟を持って言った。

「あなたが好きです！ 付き合ってください！」

ルーウエン全力の愛の告白が世界に響き渡った。しかし、メイの

心には響かなかったようだ。

「あの、意味不明です。あと、タイプじゃない」

ルーウェンは花束を取り落とした。ほむらは見てられないとばかりに屋敷に入った。

バロウズ邸 中庭

「ふふっ、いいじゃないか少年。まさに青春だ」

「あなたは？」

中庭に着いたほむらを待っていたのは、白い騎士装をまとった少女、クレアだった。プールサイドに腰をかけて、ジンを膝枕している。

「失礼。私はクレア・ハーディ。タイガーフォースの人間だが、同僚の馬鹿が迷惑をかけた」

クレアは丁寧な喋る。ジンを芝生に寝かせたクレアは、ほむらに向かって提案する。

「すまないが、必要ないならシザーマンを譲ってはくれないか？」

「初めからそうやって頼めばいいのよ。武器なんか使わないで」

「恩に着る」

クレアはそう言うと、小屋まで歩いていった。

バロウズ邸 寝室

「ここは？」

ジンが気づくと、寝室のベッドに寝かされていた。近くの机ではほむらとデイズが話している。

「これはデカントアビリティという品だ。人の意思と能力が物を介してやり取りされる。佐倉という魔法少女からルーウェンがこのロザリオを受けとったのだろう」

「それで、佐倉さんの魔法をルーウェンが……」

ジンはそんな話を聞きながら、痛む体に鞭をうって起き上がる。

「っ……」

「起きたかね？」

「デイズ！　なんでこんなところに？」

デイズがバロウズ邸にいることの不自然さに気付いたジンは驚きの声を上げる。

「闇の回廊で来た。この建造物に興味が出てな」

「そうか」

デイズはサラリと質問に答えた。さすがに大人の対応だ。本当はおいしいアイスが町にあるから来てたのだが。

ジンはベッドから下りると、服を取り出すためにたんすを開けた。今の彼女はパジャマ姿だ。

「風雲たけし城」

ガチャリ。

たんすを開けたジンは即座にたんすを閉めた。ルーウエンが中にいたのだ。なんかこれ以上にならない暗いオーラをまとって。

「ついに人を殺した罪深さに堪えれず、おかしくなかつたか……」

「原因は失恋だ問題はない。確かに人を殺してはいたが」

デイズはジンのツイートをフォローして言った。明らかに笑いを堪えていた。研究と結婚したようなデイズでは、今のルーウエンは滑稽にしか映らないようだ。漆黒の騎士団では数少ない男性組なのだから、少しは理解して欲しいとこだが。

「これでいいの……？」

「大丈夫だ問題ない」

デイズはたけし城に籠るルーウエンを放置して部屋を出た。ジンは組織内の男女比率の偏りに不安を感じ始めた。

3・ルーウェン・ヴァイス散る（後書き）

解説

暁美ほむら

『魔法少女まどかマジカ』に登場する魔法少女。時間を操る魔法を使う。

クリーパー

『マインクラフト』に登場するモンスター。爆発してせつかく建
てた建物を破壊、リフォームするため匠とよばれる。落雷でパワー
アップした姿は巨匠と呼ばれる。みんなのトラウマ。

シザーマン

『クロックタワー』シリーズお馴染みの追跡者。みんなのトラウ
マで不死身らしい。今回は樽に押し込められてたが、タイガーフォ
ースに回収されたため再登場の可能性が高い。

番外 ハロウィン（前書き）

「ハロウィンって最初は収穫祭だったんだと。じゃあなんでお菓子をあげるようになったかって？ 知るかバーカ！ リア充爆発しろ！ いや、斬る！」

『ルーウェン・ヴァイス、フラれた直後にハロウィンについて語る』

番外 ハロウィン

トワイライトタウン 屋敷

「トリックオアトリート！」

「いきなりなに？」

コスプレしたルーウェンがいきなり叫ぶため、ジンは驚いてしまった。今日はトワイライトタウン全域でハロウィンパーティーが行われている。

ルーウェンのコスプレは吸血鬼。銀髪で中二病全開な外見の彼にはうってつけだ。

「世界崩壊はみんなの心に傷を作ったからね。それを癒すのも、漆黒の騎士団の仕事よ」

「そうなのか」

羽川に諭され、ジンは納得した。しかし、デイズの姿を目にした瞬間疑問が浮かんだ。

「あれはトナカイの角じゃないか？」

「間違えてるね」

トワイライトタウン 駅前

「いつもの格好でそれっぽくなるところが凄いな」

ロクサスはアクセル、シオンと黒コートで死神コスプレだった。

ロクサスのつぶやきも理解出来る。

「私を忘れてもらっては困るわ」

そんな三人にほむらが近付く。いつもの格好でコスプレに見えるグループは仲良く町を練り歩くことにした。

トワイライトタウン ترام広場

トラム広場はトワイライトタウンでも広い市街地だ。その市街地に高笑いが響いた。

「フハハハハ！ 凶華様の華麗なるコスプレを見るがよい！」

「あ、ここにもいたよそのままコスプレみたいなの」

通り掛かったジンと羽川が足を止める。高笑いをしていたのは乱崎凶華という小柄なネコミミ少女。ジンより頭一つ小さい。一応、魔女のコスプレをしてる。ショートカットの頭にあるネコミミは付けてるのではなく、生えてるようだ。

「で、誰？」

「避難所の子供達のリーダーみたいなものよ」

「凶華様はこれでも二十歳なのだが……」

ジンの質問に羽川は的確に答えた。しかし、当の凶華は不満げだ。実際酒もタバコもする大人だし、（特殊な事情があるが）家庭も持っている。だが、その姿はまだ子供だ。

「あ、凶華さん。勝手に行っちゃだめですよー！」

「猫が増えた！ まだ本編出てないのに！」

ジンが声の方を向くと、猫がもう一人。ジンと同じくらいの背丈の女子高生、中野梓だった。先日的事件（第四話の話なのでジンがメタ発言せざるをえなかった）で知り合った軽音部のギター担当だ。ツインテールにした黒髪に合わせた黒のネコミミは生えてるわけではなく、カチューシャのようなもので付けたのだ。服装自体は高校の冬服だが、ご丁寧に尻尾がついている。

「梓！ 来てたの？」

「先輩と来ました」

久しぶりの再開に話が弾む二人。猫ばかり増えてることは、もう気にしない。

「男のネコミミ需要も忘れてもらっては困るなって、ルーウエンの奴が言ってたな。レディに親しまれるなら気にしないが」

「ウルフ・エニアクル！」

こちらもまた、避難所の子供達の人気者が白いネコミミを付けて登場した。ウルフ・エニアクルは地球連邦の軍人とジンは聞いていた。モビルスーツというロボットを操るらしい。白い髪に褐色の肌、性格に問題があるが卓越した操縦技術と親しみやすさで人気とか。ジンもウルフが操縦してるジェノアスという白いモビルスーツを見たことがある。あれに子供達を乗せているんだそうだ。

「ジェノアスはカスタム機でウルフ好みの白で塗られて……。ルーウェンってメカが好きなのよね」

「俺はあんたみたいなレディが好きだ。お菓子をあげずに悪戯されたいくらいだ」

「はいはい」

ウルフの言葉を見無視すると、ジンは羽川の方を見た。ウルフに絡まれる前に場所を移りたいと考えたのだ。

「にゃおん」

「は、羽川？ いや……。ブラック羽川？ 猫が増えすぎてついに？」

羽川は既にブラック羽川と化していた。ブラックというのが髪も耳も白い。なぜこうなるかというと、それは羽川だからとしか説明できない。

「ど、どうにかしないと……。うわ！ 猫バス！」

対応するためデイズを予防としたジンだが、行く手を猫バスに阻まれる。また猫だ。

「だれか……。どうにかして。私、猫アレルギー……」

ジンのつぶやきは夕暮れの中に消えた。

番外 ハロウィン（後書き）

作者の級長です。今回は急遽、ハロウィン話書きました。次からは予定立ててやるッス。

急遽やったから、本編未登録のあずにゃんや時期的にいろいろ早かったウルフさんの二次登場とかになりました。

では、また本編をお楽しみ下さい。

4・砲火後ティータイム（前書き）

世界ガイド

桜ヶ丘高校

『けいおん!』に登場する高校。これといった特徴はない普通の学校。しかし、リアルアースでは有名なスポット。

4・砲火後ティータイム

トワイライトタウン　トラム広場

「なんだかんだ、大義名分掲げてもまだまだ子供なのよね」

以上がルーウエンの実情を聞いたヨヨの反応だ。ルーウエンは現在、フラれたショックでたんすに閉じこもっている。

「じゃあ、私そろそろ行く」

ナミネに頼まれた買い物を済ませたジンはヨヨと別れた。買い物は食料品で、荷車を使わなければならないくらいの量だ。だが、ジンの力ならたやすい。ジンは荷車を押して帰ることにした。

「しかし重いな……。怪我があるとはいえ、こんな程度で音を上げるほど私は弱かったか？」

ジンは首を捻った。普段の自分なら余裕と思っていた重量だが、怪我のせいかなんなのか、体が悲鳴を上げている。

「ジン、大丈夫？」

「シオン！」

ジンが立ち止まっていたら、巡回警備中のシオンが近付いてきた。シオンはナミネがジンにこんな無茶を頼んだのは、ジンに戦える身体でないことを自覚させるためと知っていた。だからジンを見守っていたのだ。

「闇の回廊を使うよ。そっちの方が楽だし」

シオンは手をかざして闇の回廊を開く。楕円型に闇が広がり、入口になる。この闇の回廊は世界間の移動だけではなく、同じ世界の中を移動することも可能だ。いわばどこでもドアだ。

「……」

本来、楽を好まないジンはシオンの提案に乗るのをためらった。しかし、身体が限界なのも事実だ。仕方なくここはシオンの言う通りにしたジンだった。

屋敷 会議室

「ふう。なんか身体の調子がおかしいのよね……」

「休んだら？」

ジンが会議室で体調不良を漏らすと、羽川が休むことを提案する。確かに最近激戦続きで、身体が丈夫なジンもそろそろ限界だ。しまっちゃんおじさんと戦う前から、ユニバースの仕事で蓄積した疲労もある。

「今回の仕事は簡単よ。ある世界に行って、八元素のリングを持つてくるだけ。タイガーフォースも見つけてないみたいだから、戦う必要はないんじゃないかな？」

羽川が提示した資料には、震土のリングが桜ヶ丘高校から発見されたと書かれている。

「なるほど。行ってくる」

「それと、新しいメンバーがいるから連れて行ってね」

「新しいメンバー？」

羽川の言葉に部屋を出かけたジンは立ち止まる。そして、新メンバーは彼女が瞬きをする間に現れた。

「ほむら！」

「ここが本部なの？ 思ったより落ち着きがあるのね」

新メンバーは暁美ほむらだった。ほむらは黒いカードをジンに投げ渡す。

「時計のマーク。私が三日月でルーウェンが十字架、と」

ジンはカードに書かれたマークを見た。このカードを持つてるということは、既に手続きは終わらせたみたいだった。あることが気になったジンはほむらに聞くことにした。

「メイは？」

「トラヴァースタウンの避難所に行かせたわ。ここじゃいづらいでしょから」

ほむらの答えに、たしかにとジンは納得する。自分がメイでも、ふった男と出くわす可能性の高い町には住みたくない。避難所は様々な世界に展開しており、トワイライトタウンはその一つに過ぎない。どの避難所も王様と呼ばれるネズミに支援、管理されている。

「私の魔法は時間操作。武器は魔法で出ないから、現地調達よ」

「パイプ爆弾はいくつか持ってたのね。ゴルフクラブまで持ってた」

「世界によつては武器になるものがない場所もあるって赤い人が言ってたから」

ほむらはリュックに自作の爆弾を詰め、ゴルフクラブを持った。赤い人とはデイズのことだろう。

ジンもユニバースの都合でいろいろな世界を知ってるが、とある動物しかいない森の世界では斧くらいしか殺傷能力のあるものがないとか。スコップも辛うじて武器になるかどうかだ。

「じゃあ、行こう」

「ええ、私には探さなければならぬ人がいるもの」

ジンとほむらはそれぞれの決意を持って、グミシップへ向かった。

トワイライトタウン 地下通路

「こんなところにいた」

「……ヨヨか……」

トワイライトタウンには地下通路が通っている。その地下通路の奥で、ルーウエンはぐったり倒れてふて腐れていた。

「そりゃあ、あんな告白じゃフラれるわよ」

「あれが本気で成功すると思ってた俺は一体……」

ヨヨの言葉にルーウエンは力無く応える。彼はショックと同時に自己嫌悪にかられているようだ。

「この世界には女なんか五万といるわよ」

「そんなこと言ってたって……」

ルーウエンは完全に再起不能だった。なんかいろいろダメな状態。

「そうだ。気分転換しない？」

「気分転換？」

ヨヨは気分転換を提案する。確かにこんな時は忘れるのが一番だ。次にヨヨは、具体的な方法を提示する。

「サラマンダーで走るとか」

「サラマンダー？」

ルーウェンはオンロード最速ブランドの大型バイクを所有している。それがサラマンダーだ。正式名称はサラマンダーRX-70『ファイアドレイク』だ。

「いいコース知ってるのよ」

ルーウェンはひとまず起き上がり、ヨヨの提案に乗ることにした。

桜ヶ丘高校 運動場

グミシップは運動場に着陸した。リアルアースによく似た外見の校舎にポップなデザインのグミシップは浮いている。

「ここに震土のリングがある……」

「グミシップはこんな目立つ場所に置いてあつていいの？」

ほむらが言うなり、グミシップは天高く浮上した。着陸したのは上空から飛び降りるのがジンの身体に負荷をかけるためである。しかし、目立たなくなったわけでもなく、逆に未確認飛行物体として扱われかねない雰囲気だ。むしろ、そちらの方が厄介だ。

ほむらはまだ魔法少女に変身しておらず、自分を通つてするという中学の制服のままだ。制服のデザインがブレザーなので、中学の制服といえばセーラーといったイメージの強いジンは、ほむらを一瞬高校生かと思つた。

「音楽室にあるんだな」

ジンは資料の地図を暗記しており、音楽室に迷わず歩く。ほむらもそれについていく。校内はそれほど入り組んでなく、当然のように饅もないのですんなり音楽室にたどり着いた。ジンとしては、ハ

元素のリングのうち一つを保管してるならもつと警備を厳重にしてほしいところだ。

「うー。学校自体初めてだから緊張する」

「緊張するなら職員室じゃないかしら？」

「羽川がアポ取ってあるから大丈夫だけど」

ほむらのツツコミは軽くスルーして、ジンは扉をノックした。

「はい。今きますね」

扉を開けたのは、黒髪ツインテールの女子高生。背丈に関してはジンと同じくらい。

「資料にあつた、中野梓ね」

「は、はいそうですか？」

ほむらの固い言葉に、梓はつい敬語で話す。ほむらは中学生なのだが、雰囲気では梓より年上に見えてしまう。

「おつ。連絡くれた漆黒の騎士団の人？　あまり黒くないな」

奥から力チューシャで前髪を上げた部長、田井中律が出てきた。黒くないと言われたジンは反論出来ずに呟いた。今の彼女達に黒要素はほむらの黒髪ロングしかない。ルーウエンがいれば黒要素は格段に跳ね上がるのだが。

「新規メンバーは黒要素が徹底されてない」

「そうなのか」

「納得されましたもっ……！」

ジンは早速ペースを掻き乱された。しかし、奥の音楽室を見ると人数が足りないことがわかった。もうあと、3人いたはずだが。だが本題は震土のリングを手に入れることだ。人数が足りなくても問題は無い。

「しかし、学校という割に人がいないな。今年度で廃校するのかここ」

「いや、普通に休日だから」

ジンのボケ（本人は真面目に思った）に律は間髪入れずツツコミを入れた。こういうやり取りは慣れてるのかもしれない。

「チャリティコンサートの準備で先輩達は体育館にいます」

梓の言うことには、残りの三人、唯、澪、紬はチャリティコンサートとやらの準備をしているためいないのだ。彼女達軽音部はリアルアースでも人気が高く、ファンも多いとか。チャリティコンサートの収益を避難所に寄附して、自分達の世界を無くした人達の自立を支援するようだ。軽音部も漆黒の騎士団と違う方法で、この事態に立ち向かっているのだ。

「まあまあ中入って。ゆっくり話そうじゃないか。なんたらなのとかとやらは職員室前のトロフィーが並んだ場所にあるから、さわちゃん来るまで待ってて」

「震土のリングですよ」

梓のツツコミを受けつつ、律は二人を音楽室に入れた。音楽室には疑問が残るレベルで私物があつたが、ジンは本来の音楽室を知らないので気づかなかった。

「で、この私物の山はなに？」

「お恥ずかしい……」

ほむらだけは気付いた。部長の律も中学生に言われては面目もない。

「あれ？ 音楽室ってこういうのがあるんじゃない？」

「これは私達が持ち込んだんですよ」

「え？ 違うの？ てつきりこのぬいぐるみで一人演奏会とか……」

「寂し過ぎる！」

「じゃあ、この薬局にありそうなカエルの置物はこの世界特有の楽器とか……」

「なんか天然ボケが唯より酷いな……」

律は疲れたようにうなだれた。ジンは本気なのだが。実際、一人演奏会はやったことがある。梓もそんなジンを唯と比較してみる。

「一見、しっかりした唯先輩みたいに見えますけど」

「あの子、あれで傭兵なのよ。私なら絶対雇わない」

ほむらは絶対を強調した。ジンは傭兵としては一流だが、まだ中学生くらい少女だ。そうした歳相応な部分も、あるにはある。

ぼろくそに言われたジンはしばらくガツクリなっていた。ほむらの絶対に雇わないが大打撃らしく、所謂『orz』状態になっている。彼女は社会経験が少ない分、アイデンティティの大半を傭兵という肩書に頼っている。そこを突かれると弱いかもしれない。

「……！ この匂い！」

ジンはいきなり顔を上げた。なにかの匂いに反応したようだ。ほむらも気を配るが、音楽室には甘い匂いがする一方だ。

「こいつ、ケーキの匂いに……！ 結構薄れてると思っていたが、結局『戦えそうな唯』か！」

「なんですかその称号……」

「伏せる！ これは火薬の臭いだ！」

律と梓の会話にジンの緊迫した声が割って入る。ほむらが状況を確認する前に、音楽室の壁が爆発した。

「なっー！ 音楽室が爆発した！」

律が驚くが、爆発での負傷はなかったみたいだ。梓とほむらも同様だ。三人共、爆発が強く吹き飛ばされたが致命的な傷はないが、

「う、ぐっ……。大丈夫、か？」

「ジン！」

律は起き上がってジンに駆け寄る。三人のダメージが少なかったのは、ジンが壁になってくれたからだ。彼女は小さな身体で爆風を遮るため、太刀を抜刀して横に風切った。しかし、三人は守れてもジン自身に及ぶ分まではダメージを防げなかった。

「大丈夫か！ なにが起きて……」

膝をつき、太刀を支えにしてようやく立っているジンに、律が心配そうに声をかける。ほむらは壁に開いた穴から、爆撃を行った犯人を見つけた。それも複数。

「二足歩行のロボット？」

ほむらは敵を確認すると、魔法少女に変身した。光に包まれたと思ったら、すぐに衣装が変わってるため律も梓も驚いた。

「私が爆撃を抑える。その間に避難して。敵は複数よ」

「わかった。私が二人を誘導する」

ジンが同意すると、ほむらは消えた。時間を止めて敵のいる場所に向かったのだ。時間停止には制限があるらしく、非戦闘員である律と梓を避難させる間中時間を止めておく、なんてことは出来ないようだ。それなら、負傷したジンの代わりに敵を引き付けようというのが、ほむらの算段だ。

「行こう。ほむらでも全部の敵を引き付けられるとは限らない」

ジンは律と梓を連れて、音楽室を後にした。

今週のアイキャッチ（ルーウエンが体育館の中、ステージを背景に剣を構える）。

CM。こだまでしょうかのあれ。挨拶の魔法1分バージョン。

CM明け。アイキャッチは無く右下のロゴのみ。

桜ヶ丘高校 体育館

「もしかして熱狂的なファンとか？」

「どう見ても、違う！　そしてさっきの謎描写に疑問はなに！」

体育館にいて難を逃れたはずの唯、澪、紬の三人は敵に銃を突き付けられていた。唯の天然に澪は全力でツッコミたくなった。正直、それくらいしかこの現実から目を背ける方法が無かった。澪はさっき挿入されたアイキャッチとCMにも触れておく。こういうのをメタ発言という。

音楽室は爆撃されたが、楽器はすべて体育館にあったので無事だ。だが、敵はその体育館すら跡形も無く吹き飛ばしかねない雰囲気を持っていた。

「我々はタイガーフォースだ！」

「リアルアース復活の妨害は許さない！」

タイガーフォース所属の兵士達はリアルアース出身らしく、リアルアース復活なんていう大義名分を掲げていた。しかし、実際はオタクの聖地に等しいこの高校を破壊したいだけであった。

「で、核未搭載小型メタルギア部隊は？」

「フェーズはすでに、校舎の爆撃に移ってる」

「いいなー。そっちの方がよっぽど楽しそうじゃん」

「キモオタ共がブヒブヒ喚くのが目に浮かぶようだぜ」

「ホントだな。あんな奴らがいるからリアルアースは崩壊したんだ」

兵士達の言動からそれは伺い知れる。節度を失った軍隊ほど恐ろしいものはない。彼らは武器も持ち、軍服も着てるが、軍人としての気概は持っていないかった。まさに、遊び感覚で破壊と殺戮を振り撒いている状態だ。もしかしたらタイガーフォースのトップである男が襲撃を人が少ない休日にしたのは、これを事前にわかっていたからかもしれない。ともすれば、タイガーフォースは優秀な指揮官を有することになる。破壊大好きアホ軍団を使いながら、敵側の犠牲は最小限で済むように計算されていたのだから。彼らの目的もまた、震土のリングだ。

「じゃ、漆黒の騎士団が死ぬの待ちますか」

「あと3分は持つかな？」

「お茶でもどうぞ」

「おい！」

敵にお茶を勧める紬。澪は止めたが、何故かあったティーポットから紬は丁寧な人数分お茶をいれる。

「あ、じゃ、いただきます」

「おい待て、毒が入ってるかもしれない！」

「え？ じゃあ俺が毒味してやるよ」

迂闊な兵士が紅茶を勧められるまま飲むとするのをリーダー格の兵士が止める。しかし、黒いコートに包まれた腕が伸びて、紅茶

のカップを取る。そして腕の主は紅茶を飲んだ。

「うまいな。俺コーヒー派なのに。ホントにうまい紅茶飲んだことないからかな？」

腕の主は、銀髪を揺らして感想を述べた。背中の片手剣は大人しく鞘に収まっていたが、この殺伐としていた雰囲気の中、いつ抜かれてもおかしくない。

「というわけで、ルーウエン・ヴァイス参上！」

「貴様いつから！」

腕の主はルーウエンだった。兵士達は一斉に銃を構える。ルーウエンは芝居がかったポーズで肩をすくめながら答えた。

「おっぺけペーのよいよい、あらほらせっせの下りからいた」

「いつだ！」

「さつき挿入されたアイキャッチ、あれ思い出せ。背景がここだったろ？」

言われて澪や兵士達はアイキャッチを思い出す。そして同時に納得した。

「「あれか！」」

「あれだ。先週までなかったものがあっただろ？ わざわざ幻影魔法で見せた甲斐があっただぜ」

「貴様ふざけてるのか！」

兵士の言葉にルーウエンは急に真面目になった。所作の端々、彼の一挙一動に殺気が滲んでいる。

「大まじめさ。少なくとも、殺される覚悟もなく武器を持つお前らよりは、な」

ルーウエンは目隠しの帯と耳栓をそれぞれ三つ、澪達に投げ渡した。

「それしとけ。特に澪。こっからはあんたの嫌いな、流血の時間だぜ」

澪は血という言葉に反応して、即座に目隠しと耳栓をした。

気分転換したルーウエンは、もう精神的なダメージから立ち直っ

ていたのだ。

桜ヶ丘高校 運動場

校舎の反対側ではほむらが核未搭載小型メタルギアの相手をしている。ジンは辛うじて二人を避難させた。

「私を置いて、先に、行つてて！」

「ジン！ 出来ねえよ！ 死亡フラグだろ！」

しかし、状況は最悪だった。運動場の中央で敵に囲まれてしまったのだ。ジンには律と梓を守りながら戦う力は残されていない。二人だけでも逃がしたいが、律の人格がそれを許さなかった。避難する間ジンは二人を守るために、敵の砲撃を身体で受け続けてダメージが蓄積している。

「敵の二足歩行マシンリーはグリナ・ビートSが3セット。シノワ・ヒドキが15機。グリナ・ビートCは30機。四足歩行マシンリーはシーカー、ボーマルタ、ティレントスが数えられないくらい。全部グラール製のマシンリーね」

ジンは即座に敵の勢力を確認した。とても倒し切れない数だ。全開の彼女でもできるかどうか、そのレベルの話である。

「あ、ヘリコプター」

「え？」

梓が上空の音に気付いて見上げると、ヘリコプターが滞空していた。ジンはそちらに気を取られる。そしてヘリコプターから人影が降りてくるのを見た。

「こいつは！」

人影は地面に降り立った。人影の正体はネメシスだった。ネメシスはロケットランチャーを装備している。

「馬鹿な！ こいつは倒したはず！」

ネメシスは前回戦った時と違い、上半身のコートがはだけて触手が発達している。

「まずい！」

ネメシスはロケットランチャーをジン達に向けて放った。ジンはすぐ、二人の壁になるように前に出た。

ロケットランチャーの弾頭は光と熱を放つ。

桜ヶ丘高校 校舎裏

「あなたは？」

「ブラックロックシューター……」

ほむらはメタルギア軍団を半数ほど削ったところで、思わぬ支援を受けた。黒いコートを着た、長い黒髪のツインテールをなびかせる少女だ。背中のフライトユニットもよく映える。ブラックロックシューターという長い名前を呟いた少女は、バヨネットと呼ばれる銃剣を先端に付けた長大なキャノン砲をメタルギア軍団に向け、連射した。ほむらが気付くと、メタルギア軍団はいなくなっていた。

桜ヶ丘高校 運動場

ジンは死を覚悟していた。しかし、いつになっても膨大な熱は彼女のか細い身体を焼かない。爆発音はすでにした。熱も感じた。ジンはゆっくりと目を開けた。

すると一台のバイクが目の前に転がっていた。

「キノひどい」

「バイクが喋った！」

バイクがいきなり喋るため、律が驚いた。バイクなんて喋るものじゃない。

「エルメス、ナイス！」

「投げたのはキノじゃないか」

少し離れたところから声が響く。セーラー服を着た短髪の少女だ。ガンベルトをしていて、銃のホルスターといくつかの緑色ポーチが

っている。

「一気に片付けてご飯にしよう！」

キノという少女はポーチから銃を取り出して敵に向ける。出した銃はミニガンというガトリング砲。大きくて、ゲームなどでは人が持つて使用してるが本来はできないくらいの反動がある。

キノはジンより少し大きいだけの体格なのにも関わらず、ミニガンを敵に難無く掃射。敵の集団はあっという間に壊滅した。

「あとはデカブツだけ！」

キノはミニガンを仕舞うと、ポーチからロケットランチャーを出す。RPG7。ゲームではお馴染みのザ・ロケットランチャーというべき品。

「ファイアー！」

ロケットランチャーはネメシスに直撃、体勢を大きく崩した。ジンもすかさず援護を行う。

「流星爪！」

振った太刀から飛んだ斬撃がネメシスに命中する。ネメシスはダメージがかさみ膝をついた。キノはロケットランチャーの筒を捨てるとホルスターから大型リボルバーを取り出す。

「ビッグカノン、魔射滅鉄！」

「キノ。相手魔物じゃない」

「威力は充分！」

キノはバイク、エルメスの忠告を無視してビッグカノンと呼んだリボルバーを放つ。弾丸はネメシスの頭にクリーンヒットして、頭を消し飛ばした。

運動場での戦いはその一撃で収束した。

「あれは……？」

ジンは安心して身体から力が抜けた。しかし、意識が薄れる中、体育館の方へ向かう見覚えのある少年の姿を見つけた。名前はたしか、バン・グローリー。

桜ヶ丘高校 体育館

「これはどういうことだ！」

「命ははかないな。ほんの一閃の太刀筋で散ってしまうのだから」
体育館にバン・グローリーは到着した。しかし、目の前に広がっていたのは惨劇だった。開けられた扉の外に、体育館を占拠する予定の仲間の死体がぶちまけられていたのだ。ルーウエンはチャリティーコンサートのある体育館を極力汚さないように、事前に体育館中の扉を全開にして敵をそこから叩き出しながら戦ったのだ。軽音部の三人は既に避難させてあった。

「どういっつもりだ！ まだ攻撃を行ってない人間すら殺すとは！」

「決まった……！」

「てめえ！」

ルーウエンは自分の世界に入っていたため、バンの憤りなどどこ吹く風である。ルーウエンなら、『武器を構えた時から戦いだ』と答えたであろうが。

「お、いつぞやの甘ちゃんじゃないか。お仲間のお肉でも引き取りに来たのか。人肉なんかマズイからやめとけ。廃棄は任せだが」

「そういう意味じゃない！ なぜ皆を殺した！」

「知るかゆとり。自分がめちゃくちや弱くてグズのノロマなせいで仲間守れなかったの棚上げして逆ギレかよ。ま、仲間が武器持っても覚悟は持てないクズぞろいじゃつるんでるあんたの程度も知れるってもんだ。あいつらの最後の言葉教えてやるうか？ 『助けて！。命だけは！』 だってお。あひゃひゃ、マジウケるんですけど！ 武器持つてる時点で死ぬことくらい覚悟しとけし！ あー、腹痛てえ！」

ルーウエンはバンに嘲笑を向けながら笑い転げた。武器を持つからには死ぬ覚悟を持つのが当たり前なルーウエンにとって、タイガーフォースの兵士の末路はどんな漫才よりも笑えるのかもしれない。

「ルーウェン・ヴァイサース！ てめえに人間の心はねえのか！」

「あるよ。少なくとも無駄な犠牲出して楽しんでるお前らより、な。あいつらみたいなクズをほかっておくと、罪の無い人間の血と涙が流れる。俺が手を汚せばそれを防げるんだ。こんな簡単なこと、やらないって奴の方が人間の心つてのが無いぜ」

ルーウェンはすぐ正常に戻り、バンに告げる。これが覚悟を決めた人間と軽い正義に燃えるマヌケの違いだ、と言わんばかりに。しかし、それはバンの怒りに油を注ぐ結果となった。

「説得してやめさせればいい！ なんで殺すんだよ！ 説得を諦めた時点で、その主張は間違ってる！」

「おーおー。甘ちゃんが吠えとらっせる。怖いよー」

ルーウェンは始めからまともに取り合わなかった。完全にバンを茶化し始めた。

「貴様ーッ！」

「おやおや。説得でやめさせるんじゃないのかい。結局てめえの信念はその程度か」

バンはルーウェンに殴り掛かった。しかし、ルーウェンは慌てず身体を右に反らして避ける。

「おらよつと」

ルーウェンはバンの顔面を殴り飛ばした。バンは10mほど飛んでいった。ルーウェンは剣を抜いてバンに近寄る。

「なんかさ。お前を生かしておくとか誰かが悲しむことになる気がする。だから斬る」

「や、やめろ！」

「竜巻破裏剣！」

「うぎゃー！」

バンの悲鳴が体育館に響き渡った。

数分後 桜ヶ丘高校音楽室

「すげー！ 本当に元通りだ！」

「朝メシ前、とかいうところ」

ほむらの魔法で時間を巻き戻された校舎は元通りに直った。皆を集めてお茶会ということになった。

「わーいケーキだ」

「……」

キノとブラッククロックシューターはそれぞれの反応をする。エルメスはバイクからストラップになっていた。ほむらは二人の素性に関してルーウエンに聞いてみた。

「誰？」

「キノコ王国のサーキットで知り合った。連絡受けて、戦力になるから連れてきたんだ」

「連絡？」

ルーウエンが不可解なことを言う。世界を渡ったのは闇の回廊だとしても、ほむらもジンも、ルーウエンに連絡など寄越してない。

「ヨヨが桜ヶ丘高校で大規模な敵襲って、教えてくれてさ。そうだ、震土のリングは？」

「あ、さわちゃんに『来るな』ってメールしたから、後少し待つ

……」

「その必要はないわ」

ほむらが律の言葉を遮り、震土のリングを差し出した。

「爆撃でトロフィーの入ったショーケースが割れたから、直す前に取っておいたの」

「すごい。これならケーキを半分食べて時間戻してって、いつまでも食べれるね！」

「時間戻した時に吐き出すことにならないか？」

唯がほむらの魔法の応用を思いついたが、零の現実的な意見に実践をやめさせられた。

「ジンさんもどう？」

「あ、ああ……」

紬に誘われ、ジンはぎこちなく輪に入る。みんなで騒ぐのは苦手かもしれない。

けれどもジンは、たまにはこういうのも悪くないと感じた。

4・砲火後ティータイム（後書き）

解説

メタルギア

メタルギアシリーズお馴染みの歩行戦車。通常の戦車では立ち入れない場所にも入れる。本来は核を搭載してるが、桜ヶ丘高校制圧戦で投入されたのは小型の核未搭載機。メタルギアシリーズ本編にはない、タイガーフォースオリジナルのバリエーション機。

ネメシス

バイオハザード3に登場する追跡者。みんなのトラウマ。今回は第二形態で登場。ちなみにあの後、クレアが回収したため再登場の可能性あり。

謎の美少女ガンファイターライダー・キノ

高校生の木乃が変身した姿。学園キノに登場する。大量の銃器を使う時雨沢得なヒロイン。ストラップのエルメスは喋り、バイクに変身する。大食いで有名。

番外 ポツキーの日（前書き）

「ポツキーってなんだ？ 食えるのか？」

『ジン・クレッツシエンド、知らないポツキーという単語について語る』

番外 ポツキーの日

11月11日 ホウエン地方 ミナモシティ

自然豊かなホウエン地方。その港町ミナモシティ。そのデパート屋上で、赤い髪を黒いリボンでポニーテールにした少女がフェンスにもたれて言った。

「今日は何の日だ？」

隣に立つルーウエンはそれにすかさず答える。

「あれ？ 杏子って誕生日今日？」

「違う！ ポツキーの日だ」

杏子はポツキーをくわえて言った。確かに、今日の日付はポツキーに見えなくもない。

「そんな事言ったらプリッツとかトツポも当て嵌ま……」

「無粋なことを言うんじゃないねえ。あたしは今日を、ポツキーの日として認識しているのさ」

杏子謎のこだわり。やはり、ポツキーをトレードマーク的に用いる杏子はポツキーに並々ならぬ思いがあるのか。

「で、味は何が好きなんだ。俺は個人的に苳だな」

「ノーマルに決まってんじゃない」

そんな杏子は決まってノーマルのポツキーを食べている。プロのポツキーマニアには、ノーマルが一番なのか。

「ポツキーといえばポツキーゲームだが、今回はやる必要ないだろ」

「ポツキーゲームねえ」

ルーウエンがポツキーで思いついた話題を振るが、別にポツキーゲームをしたいわけじゃない様だ。実際、女の子と面と向かって話すことすら、ルーウエンには困難だ。今も杏子と目を合わせていない。漆黒の騎士団メンバーはルーウエンと話す時、ルーウエンの目

線があらぬ方向にいつてるのに気付いているのだろうか。羽川やほむらあたりなら気付いてるかもしれないが、他人の目を気にしないジンや、色気より食い気な木乃は気付かないだろう。

「今思えば、漆黒の騎士団って女率高いよな。あれから男増えた？」

「増えたのは女だ」

杏子が男女比について聞くと、ルーウェンは頭を抱えながら答えた。研究と結婚したみたいないなディズや、軟派なアクセルならまだしも、思春期のルーウェンとロクサスには女の子しかない空間は命を削り取られるだけだ。しかも、両方奥手だ。

ルーウェンの様子を見て、杏子が悪戯っぽく笑う。

「今度同盟組まない？ 魔法少女連盟と」

「俺とロクサス殺す気か。さらにその屍を踏み越えてアクセルが電話番号とか聞くとこが容易に想像できるからやめよう」

杏子は予想通りの答えを聞いて満足そうだった。

番外 ポツキーの日（後書き）

今回はポツキーの日ということでこんなを書きました。てか、また本編より先にキャラ出るしorz

ポツキーといえば、まどかマギカの杏子だろうということで、本編合流前に出しました。次の話で出ます。ルーウエンの幻影能力はお察しの通り、彼女から貰ったものです。デカントアビリティって奴です。

それはさておき、級長的には一人の知識で漫画やアニメ、ゲームをフルカバーするのは限界ツスマジで。

そこで感想などで、出して欲しいキャラのリクエストお待ちしております。作品名と名前があればググれます。では、この辺で。

5 ・ひとりぼっちは寂しいもんな（前書き）

世界ガイド

カイナシティ

ホウエン地方の港町。市場が開かれフレンドリーショップ涙目な町。実際、市場でこそないが浜辺にある海の家で買えるサイコロソーダはいいきずぐすりより回復量が多くて安い。

5・ひとりぼっちは寂しいもんな

トワイライトタウン 屋敷

屋敷の会議室では、あることを決めるためにルーウエン、木乃、ほむら、ブラッククロックシューター（BRS）の四人が集まっていた。

キノは変身ヒロインなので変身前の姿、つまり高校生の木乃、になっている。だが、ほとんど違いが見られない。強いて上げるなら、ポーチの留め金の動物が変わったくらい。

まず、ルーウエンが口を開いた。

「デイズ曰く、『他の世界の知識があるジンとルーウエンに後一人を加えた三人一組で行動すべし』だそうだ。そこで俺は、くじ引きを行う」

「くじ引き……？」

BRSはルーウエンが差し出したくじ引きに興味を示した。くじ引きは秋葉原お馴染みのパン缶の空き缶に割り箸が三本入ってる。恐らく、この三本の内一本の先端が赤く塗られてるに違いない。

「それで、ジンは？」

「スマン、遅れ、た……」

ほむらがジンの所在について聞くと、会議室の扉が開いてジンが現れた。太刀を杖にしてグズグズのグダグダのフラフラだ。額に冷えピタを貼り、肩で息をしていて苦しそうだ。

「風邪か。ならもう一本赤い棒を追加して……」

「大丈夫、だ、同志ルーウエン！ 私はまだ、戦える！ 新技、の……アイディアが固まった今！ 我々は何も怖くはない！ 万国の労働者団結せよ！」

「どうしたんだ？ 資本主義の現実でも垣間見たのか？」

ジンのキャラ崩壊ぶりは完全に大丈夫じゃない感じを滲ませてい

た。強がろうとして、昔の社会主義者みたいな台詞だとルーウエンは独断と偏見で思った。

ほむらと木乃はルーウエンが肅清される前にジンをたしなめた。

「これは誰がどう見ても、戦闘の疲労が蓄積してるわね……。しかもその死亡フラグ、まんまマミよ」

「大変！ 私がお粥作ってあげるから寝てて！」

「木乃の料理なんか食べたたらお腹壊むぎゅ！」

エルメスが余計なことを言うので木乃は握り潰した。ストラップ状態のエルメスは簡単に握り潰される。

しかし、ジンのキャラ崩壊はやばいことになっていく。作画だったら目のハイライトが消えてるかも。

「なるほど、貴様らは我らが『病は気から主義』に反感する退廃した『コンビニ受診主義者』なのだな！ 私の健康状態について疑うことは階級的な犯罪であり、病は気から主義の勝利を疑う医師協会的反動分子であることを示すものである！ 肅清が必要だ！」

ジンは太刀を抜き放つと、ルーウエン達に向けた。流石に混乱もここまでくるとやばい。ルーウエンも仲間までは斬ることなどできない。

「ウラーああああああああアアアア！」

「ダメだ！ これはロシア語で万歳を意味する言葉！ こいつ完全に社会主義に染まった！」

「なにをどうしたら風邪で社会主義者に転身するのよ！ 私の周りで赤いのは佐倉さんだけで充分！」

「ロシアってピロシキが美味しいよね」

「今って食べ物のお話をしてる場合？」

「……」

ルーウエン、ほむら、木乃、エルメス、BRSがそれぞれの反応をする中、ジンの太刀が振り上げられる。正直、ルーウエンも全快のジンの一撃を見たことはない。だから防げるのか、そもそもどんな技で来るのかも予測がつかない。

さらにいえば、錯乱状態のジンは全快時以上の力を発揮する危険もある。ルーウエンは覚悟して、ジンの技を待った。

「両断、絶爪！」

「まったくの新技？ いや、太刀に気を込めて切れ味増してる！」
振り下ろされた太刀は、紅いオーラをまとっている。対するルーウエンは背中の鞘から剣を抜く。

「練習中の技だが、逆にちょうどいい！」ミラージュ×ビューア
「！」

ルーウエンは剣に青いオーラをまとわせた。ルーウエンの方が若干強そうだ。これならいける気もする。

「一つ問題がある」

「なに？」

ルーウエンの呟きに木乃が反応する。

「これって幻影だから、威力増えてないんだよね」

「ダメじゃん！」

「WRYYYYYY！」

ついに吸血鬼みたいな叫び声まで上げ始めたジンに、ルーウエンの新技はなすすべなし。ミラージュ×ビューアは相手の視覚を騙す技なのだ。ルーウエンは遺書書いといてよかったとか考えていた。

「ロード、ローラー、だ……ッ」

しかし間一髪、ジンは太刀を振り下ろす前に倒れた。息が荒く、ずいぶんと苦しそうだ。

屋敷 ジンの部屋

「あー、互いに死ぬかと思った」

「戦闘のダメージが回復しきってないのね。しばらくは仕事させない方がいいわ」

羽川の言う通り、ジンはここまで全ての戦闘で重大なダメージを受けている。それが今日になって爆発したのだ。

「んじゃあサクツと薫風のリングとつてくる」

「よろしく」

ルーウェンは仕事に行くため部屋を出た。屋敷には多数の部屋があり、漆黒の騎士団メンバーには一人ひとり部屋が割り当てられている。ジンの部屋はほとんど何もなく、ジンが住み始める前と対して変わってない。あるのは始めから部屋に置かれていた机、ベッド、クローゼットくらいだ。

羽川はジンの額に濡れタオルを乗せて、もうちょっとなにか置けばいいのに、と思った。

屋敷 ロビー

「で、今回行くのは俺、ほむら、木乃の三人か」

「私は上空から町を警護する」

ルーウェンは出立メンバーを発表した。BRSはフライトユニットを起動して飛び立った。あのフライトユニットはかなり速く飛べるみたいだ。

「じゃあ行くか。今回の仕事は薫風のリングの回収。アクセルが同行する。場所はカイナシティか」

「カイナシティはハウエン地方の港町で、ミナモシティとの連絡船が出てるわ」

ルーウェンにほむらが情報の補足をする。港町に木乃が反応した。食い物関係だ絶対。

「港町なら新鮮な魚介類が？」

「木乃、仕事優先。それにコイキングくらいしか魚いないんじゃない？」

急造ルーウェンチームは波乱含みでグミシップへ向かった。

カイナシティ

「ついたぞカイナシティ」

「あ、アクセルどっか行ったわ」

「アイス巡りでしょどーせ」

ルーウェン、ほむら、木乃の三人がカイナシティに降り立った。

アクセルは勝手に動こうとしたのをほむらに見咎められていた。

「海岸沿いの警備だ。俺に任せとけ。俺、強いから」

「じゃあ、私は市場の警備！」

「私は町でまどかの目撃情報を調べるわ。ルーウェンは博物館のクスノキ館長と交渉して薫風のリングを貰って」

アクセル、木乃、ほむらはルーウェンから離れて行動した。確かに配置的にはカイナシティ全域を警護できるが、目的は薫風のリング。なら博物館に戦力を集中させるのがいいとルーウェンは思っていたのだ。

「お、おい？ 俺ってこん中じゃ一番弱くないか？ しまつちゃうおじさんだって不意打ちだし、今までの敵は雑魚過ぎんだよ！」

「頑張れ」

アクセルの薄情な一言でルーウェンは町の真ん中に置き去りにされた。ルーウェンは強いと思われがちだが、本人は自身を過小評価してる点がある。

ルーウェンのリアルアースでの能力は勉学、運動共に平均以下。周り曰く、『無茶苦茶に頑張る以外才能ない』とか。しかもその努力すらやり方を間違えて徒労に終わることが大半だ。今回こそ、口サスやハイネという優秀なコーチを得られた。しかし、ルーウェンの戦績は不意打ちで勝ったり雑魚を片付けたり、（全部無傷で乗り切ったが）そんなもんだ。

ルーウェン的には仲間からの援護が受けられて、相手を単なるリア充と侮れるなら楽だ。しかし、ネメシスやしまつちゃうおじさんという敵と一対一で張り合う自信はない。本人に自覚はないが、それらと戦ってルーウェンは充分勝てる力を持っている。

これならルーウェンの力をクレアの方が正しく評価してるという

ものだ。

「大丈夫かあ？」

ルーウエンは一抹の不安を感じつつ、博物館に向かった。

博物館 入口

「食うかい？」

「えっと、杏子？」

ルーウエンは覚悟を決めて博物館に特効した。遺書の場所（正直、ガンブラの台座の裏だったか、壁時計の裏だったか曖昧）を確認し、黒いカードを名刺代わりに入口の人に名乗ればいい。しかし、博物館の玄関口で知り合いに捕まった。

赤い髪を黒いリボンでポニーテールにした、青緑のパーカーを着た中学生くらいの少女だ。彼女はルーウエンを見るなり、ポツキの箱を差し出してきた。本人も一本くわえている。

「杏子、ここにいたのか」

「なんだよ。貨物グミシップの警護をしてここに着いて、クスノキ館長からあんたのこと聞いたから、あたしが師匠として様子を見に来てやったんだ。戦績目覚ましいみたいだね」

彼女は佐倉杏子。ほむらと同じ世界に住む魔法少女だ。ルーウエンは彼女から幻影魔法のデカントアビリティを受けとったのだ。

「ほむらと会った。今この町にいる。漆黒の騎士団のメンバーになった」

「よかったな。あいつも友達ができて」

ルーウエンはほむらと会ったことを告げる。ほむらは親友、鹿目まどか搜索のためにメンバーになった。その際、ほむらはまどか搜索を個人行動として優先させることを条件にした。そのくらい、ほむらはまどかのことが大事なのだ。

「なるほど。そうだ、さっき護送したコンテナがあっちにあるんだ。お前の好きなガンブラってのもあるから、見て行くかい？」

「マジ？ いやー、ガンプラがこつちじゃ入手困難だから助かるよ！」

杏子とルーウェンは同時に港の方を見る。港は連絡船、タイドリップ号がミナモシティに出たり、最近では貨物グミシップの停泊港になっている。貨物グミシップからの貨物コンテナが置かれている場所がその隣にあるのだが、

そこがなんの前触れもなく爆発した。

「なっ……！」

「コンテナが！」

杏子とルーウェンは驚いた。あまりにいきなりなことなので、町はパニックに陥る。

「食い物をつ……！ 粗末にしゃがつて！」

杏子はくわえていたポツキーを噛み締めた。ルーウェンの耳にポツキーが折れる音が届く。杏子はその生い立ちから、食べ物を粗末にすることに憤りを感じたのだ。コンテナには食料が入っていた模様。

「大変です！ 武装した連中が潜水艦を奪い、逃走しました！」

爆炎に照らされる二人に、クスノキ館長が駆け寄り伝える。杏子はゆっくり口を開く。

「オイ、ルーウェン。お前のグミシップ、水中行けるかい？」

「行けるぜ」

ルーウェンの答えを聞いた杏子は、ほむらの様に変身した。赤い光に包まれ、それが晴れた時、杏子は赤い衣装をまとい、槍を手に入っていた。

「戦闘、開始だな」

師匠の行動を理解していたルーウェンは、グミシップを呼ぶコントローラーを操作した。

カイナシティ浜辺 海の家

「これがサイコソーダアイスか。美味しいな」

アクセルは浜辺の海の家でサイコソーダアイスという新製品を食べていた。これはサイコソーダをシャーベットにして、バータイプのアイスにしたのだ。見た目がシーソルトアイスに似ていたので、食べた時は驚いたのだ。

アクセルはアイスを食べ終わり、当たりでないことを確認すると立ち上がる。

海の家を出ると、なにやら騒がしい。観光客の悲鳴だろうか。アクセルがよく見ると、火の玉が空から降っている。空には一匹のモンスター。雰囲気から、ポケモンでないことをアクセルは理解した。赤い体に黒い翼、レッドアリーマーだ。

「わかりやすく腹にタイガーフォースのマーク。やるか」

アクセルは牽制にアイスの棒を投げた。レッドアリーマーはアクセルに気付いて体を向ける。

「ぎぎやぎや！（訳：お前の髪型ダサいな！）」

「俺とやる気が、とでも言いたそうだな」

アクセルはレッドアリーマーの言葉を勝手に翻訳する。実際、間違っていたが、アクセルにわからなくてよかっただろう。もし、アクセルがレッドアリーマーの言葉を理解できたら、レッドアリーマーは即消し炭だからだ。

こうして、赤い両者は向かい合った。

カイナシティ 市場

「オマエノシワザダッタノカ」

「木乃、口調」

到着早々、市場が無残に荒らされてるといふ惨状を見た木乃は（魚介類が食べられなかったため）怒りに燃え、犯人探しを開始。そ

して、犯人を見つけたのだった。木乃の口調は狂気に満ちていた。一見すると事件の黒幕が犬だったことを知り落胆するような口調だが、声には犯人を銃殺刑にするという意味が滲んでいる。

犯人の正体、それは化け物だった。巨大なピラミッド状の兜を被り、肉屋のエプロンのようなものを着た大男だ。手には巨大な鉈。周りにはゴキブリの様なクリーチャー、ラージローチを従えている。大男のクリーチャーの名はレッドピラミッドシング。ジンがユニバースのデータベースから得ていた情報をまとめた資料に両方共載っていた。

「ならば、変身だ木乃！」

「了解！ 誰も見てない！」

木乃はホルスターのビッグカノンを取り出し、天高く突き上げ引き金を引く。

「フローム！ マイコールド！ デットハーンズ！」

変身ヒロインの台詞としては意味不な言葉を叫び、謎の美少女ガンファイターライダーキノの戦いは幕を開けた。

カイナシティ沖 水中

「待ちやがれ！」

「なんであの潜水艦、グミシップより速いんだ？」

杏子とルーウェンは逃げた潜水艦をグミシップで追っていた。何故か潜水艦の方がグミシップより速く、追跡は難航していた。

「この辺は海流が速いからね。潜水艦には海流突破機能があるけど、グミシップには無いからかな？」

クスノキ館長の説明に、杏子は首を傾げる。よくわかってないらしい。グミシップの運転はルーウェンが行っており、彼は理解出来ている様で、策を練っていた。

「あいつらの行く場所がわかれば、海流のない場所までグミシップは飛んで移動できるんだが」

「ルーウェン君。通信だよ」

クスノキ館長が通信を取る。通信は運転席のモニターに映される。
『グミシップのパイロット、聞こえるか?』

「あ、赤い彗星のシャア? しかも逆シャア版?」

通信を寄越したのは金髪をオールバックにした赤服の男、シャア・アズナブルだ。リアルアースでも有名なので、ルーウェンは知っていた。

『私を知ってるなら話は早い。今私は君達の後ろにいる。幸い、昔に乗ってた水陸両用のズゴックだ。しかし、こう海流が速くては敵わん。そこで策がある』

「あの赤い彗星の策に協力できるなら光栄だ。どうすればいい?」

『君達のグミシップは形状的に充分海流を切り裂ける。だが、パワー不足だ。私のズゴックはパワーがあるが海流の抵抗をもろに受けている。なら、君達のグミシップで海流の抵抗を消し、私のズゴックがパワーで押す。そうすれば速くなるはずだ』

「なるほど。ズゴックでも抵抗は受けにくいが、流線型であるグミシップの方が海流を受け流し易い。だから、グミシップを壁に、後ろの抵抗がない場所からロスのないパワーで押す。グミシップもエンジンを飛ばすから速くなる、と」

「おい待て、なに話してるのかあたしにはさっぱりだ」

杏子の困惑を放置し、ルーウェンはレーダーでシャアのズゴックがグミシップの後ろに付いたことを確認する。

快進撃の始まりだ。と言わんばかりにルーウェンはエンジンを全開にした。

カイナシティ 浜辺

「おらよ!」

「ぎぎやぎやぎやぎや! (訳: 髪型の割に繊細な武器だな!)」
カイナシティの浜辺では、青空の下、火の玉とチャクラムが飛び

交っていた。観光客は逃げてしまったのでアクセルは存分にチャクラムを飛ばす。レッドアリーマーは飛びながら、火の玉以外にいろいろなものを吐いていた。

「ちつ、厄介な！　だが、段々と動きが掴めてきた。パターンがあるな！」

アクセルはレッドアリーマーのパターンを掴んでいた。傍目には、パターンなどわからないが、ずっと戦えば理解できるようだ。アクセルはパターンを見つけるにしても、早い方だが。

「だが、隙が出来るのを待つ俺じゃねえ。一気にカタを付ける！」
アクセルは跳びはね、砂浜に降りる。そして、地面をまさぐった。レッドアリーマーはチャンスと思い、空中からアクセルにダイブする。

しかし、それがアクセルの策なのだ。

「かかったな！　大当たりだ！」

アクセルは何かを投げる。それは、先ほど牽制に投げたアイスの棒だ。レッドアリーマーは反射的にそれを避ける。

「そこだ！　燃え尽きる！」

「ぎゃ？」

右に避けたレッドアリーマー。しかし、アクセルはそれを読んで、左右にチャクラムを投げていた。レッドアリーマーは避ける際、左右に避ける確率が高いとさっきまでの戦いで理解したのだ。

「ぎゃぎゃぎゃぎゃぎゃー！（訳：こんなダサい髪型の奴に負けるだー！）」

レッドアリーマーの体にチャクラムが突き刺さる。そして爆発。アクセルは爆炎に背を向けて呟いた。

「記憶したか？　俺、強いだろ？」

カイナシティ　市場

「どーするのよこれー！」

キノは困惑していた。レッドピラミッドシングがいつまでも倒れないからだ。新鮮な魚介類、じゃなくて市場を破壊した犯人は不死身だった。

キノ的に思いつく強力武器をぶっ放したが、レッドピラミッドシングはびくともしない。今しがた、ミニミマシンガンも撃ち尽くしたとこだ。

「ならば！ パンツァーファウスト3！」

キノはポーチからパンツァーファウスト3というロケットランチャーを取り出した。発射の際、後ろに爆炎が飛ばないので狭い部屋からでも撃てる代物だ。

「ファイアー！」

キノは容赦無くそのロケランを放つ。レッドピラミッドシングに命中するも、彼は持ちこたえた。

「次！ ヘカート！」

キノが次に取り出したのはヘカートという対物ライフル。対物、というから戦車やヘリコプターを撃つもので、決して人を撃つものではない。キノはそれをレッドピラミッドシングのボディに向けて乱射。反動が強く、普通のライフルの様に持って使えないはずだが、それをキノは平然と乱射していた。

「嘘っ……！」

レッドピラミッドシングはそれでも、弾丸が貫通することなく膝を付く程度だった。キノは最終手段に出る。ビッグカノンだ。

「ターゲットロックオン！」

「魔物じゃないよ？」

「わかってる！」

キノがビッグカノンのハンマーを上げる。しかしその瞬間、声が響いた。

「その必要はないわ」

声と同時に、レッドピラミッドシングの頭上にタンクローリーが

降ってきた。

「逃げろっ！」

状況を理解したキノは全力ダッシュでその場を離れる。タンクローリーの運転席がレッドピラミッドシングを押し潰すと、後方タンクの重みで運転席も潰れる。そして大爆発。

爆発の後には誰もいなかった。

「死ぬかと思ったー」

「まどかはこの町に来てないわね」

ほむらはいきなりキノの隣に現れた。時間を止めていたのだ。タンクローリーもほむらが投げ込んだようだ。

「少しは周りを見てよね」

「問題ないわ。貴女達ならすぐ逃げれるでしょ？」

エルメスからの非難をほむらは平然といなした。きっとタンクローリーで特効するのに慣れてるんだとキノは思った。

「そうだ！ あいつは？」

「逃げたみたいね」

レッドピラミッドシングは生きているとほむらは告げた。キノは一抹の不安を感じて消し飛んだ市場を見ていた。

海底洞窟 入口

「追い詰めたぞ！」

「海底洞窟の入口を塞いでおいてよかったよ」

潜水艦を奪って逃げた犯人は遂に追い詰められた。犯人は黒いマントの様なものを着た男の様だ。ルーウェン、杏子、シャアの三人が男ににじり寄る。

「私の正体を知りたいか？」

「すっげえ知りたい！ お前絶対様子見に来た黒幕さんだろ！」

男がルーウェンに聞くと、ルーウェンは興奮気味に答えた。男は

やれやれと言わんばかりにマントを脱ぐ。

「君の予想通り、私がタイガーフォースのリーダー。名前は……、*（アスタリスク）とでも名乗っておこう」

そう言ったタイガーフォースリーダー、*の姿は莊嚴そのものだった。

全身を白銀の鎧で包み、顔も隠している。鎧の布地は黒なので、コントラストがよく映える。

「結局顔見えねーじゃん」

「君も過去を捨てたのか。奇遇だな、私もだよ」

杏子が辛辣な言葉を、シャアが共感の声を投げかける。対してルーウエンは二人とベクトルの違う反応を見せた。

「すげっー！ ラスボスらしいな第一形態から！ カッコイイ！」
「君は見る目があるようだね。私はまだ3回の変身を残しているが、それは終盤のお楽しみだ」

ルーウエンと*は気が合いそうだ。その分では、タイガーフォースという組織名の由来がトラウマを変換した虎馬、つまりタイガーホースの鈍りからきてることも理解してるだろうと*は思った。

「私の手には現在、煌炎、水龍、天光、常闇、命樹のリングがある。君には震土がある。八元素のリングは我々の目的に必要なのだ。譲ってくれないか？ もちろんただではないさ。リアルアースも復活出来るし、君の欲しいものはなんでもやる」

*はルーウエン達に交渉を持ち掛けた。*はどうやら、リアルアースを直す方法を知っているらしい。ルーウエンは少し考えて言った。

「お前、リアルアースとかが崩壊した理由がわかるのか？ 少し気になっていたところだ」

「ああ、それが。ポートランドは部下が天光と常闇のリングを手に入れる際、同時に取らねばならんのをしくじったから保護機能が働いて崩壊した。もう片方の行方をくまますシステムだった。その他は……、世界からエネルギーを生み出す新型の発電所を開発した

のだが、それを資金調度のため世界の政治機関売った。案の定、彼らは扱い切れずに世界を保つエネルギーまで吸い上げたさ。特にリアルアースの日本の都知事はアホでね。リアルアースは一度、どうしても崩壊させる必要があったから調度いい」

＊はルーウエンの質問に答える。ルーウエンが答えをメモしてると、退屈そうな声が聞こえた。

「＊……。喋り過ぎだ。まったく、人には話が長いという割に、自分が一番長いじゃないか」

「すまないクレア。待たせたね。出番だ」

砂地の地面に、クレアはふわりと降り立った。洞窟の天井に彼女は潜んでいたのだ。白い騎士装は＊と並ぶに相応しい。

クレアは＊の隣に立ち、リングを見せる。

「それは、薫風のリング！」

クスノキ館長が驚く、クレアが手にしてるリングは薫風のリングだ。右中指のリングが命樹のようだ。薫風のリングは館長室に置いてあったのだ。恐らく、逃げ出す前に持ち去ったのだろう。爆破事件の犯人がこの二人なら、片方が爆破し片方がリングを入手、その後合流なんてことも可能だ。

「命樹を中指にしてるわけか？ これは君との決闘の誓いだ。いわば、婚約指輪みたいなものだ」

「いや、聞いてねえ」

＊の時と打って変わり、ルーウエンは冷たくツツコミを入れる。クレアは薫風のリングを口元に持っていく。そして、薄い桃色の、桜の様に艶っぽい唇でリングに口づけし、ルーウエンに言う。

「これは君がする誓いだ、ルーウエン・ヴァイス。この薫風のリングは預ける。私がこれを奪う時は必ず君からだ」

クレアはルーウエンにリングを投げる。ルーウエンはリングを掴み、クレアを見る。ルーウエンには、この可憐な少女が戦いに囚われた修羅だとは思えなかった。しかし、充分に生きてる充実感は伝わる。

「ありがとう。俺、少し悩んでたんだと思う。戦いに、命の奪い合いに快感を得てた自分に。死ぬかもしれないってことは、今は生きてるってことなんだな。共感できる奴がいてよかった、ひとりぼっちは寂しいもんな」

「礼はいい。それより、フラれた件は大丈夫か？ 私は君と、万全な状態で戦いたい」

いい雰囲気の二人に、杏子達は釈然としない気分でした。なんで敵と仲良くなるねん、とでも言いたいのか。

「あたしの台詞とりやがった……！ 会心の名台詞、ひとりぼっちは寂しいもんな、が！」

台詞をルーウェンに取られた杏子が齒ぎしりし、かつて命懸けで戦った敵と共闘した経験を持つシャアは感慨深げに呟く。

「敵と味方は二極ではない。状況が変われば敵が味方に、味方が敵になる時代だ」

そしてクスノキ館長が納得できないと呟く。

「あの、これってわざわざここでやる必要ありました？」

5・ひとりぼっちは寂しいもんな（後書き）

解説

レッドアリーマー

魔界村に登場する敵。追尾能力が高く、多くのプレイヤーにトラウマを刻んだ。よく間違えられる（実際間違えた）が、レッドアリーマーではない。

レッドピラミッドシング

サイレントヒルに登場するクリーチャー。通称、様。再登場の兆しあり。劇中通りの不死身である。

ラージローチ

ゴキブリのクリーチャー。レッドピラミッドシングはサイレントヒルでもゴキブリを従えてるようなので、バイオハザードから出ていただいた。

シャア・アズナブル

お馴染み赤い彗星。説明不要だが、『逆襲のシャア』バージョンで出てくれた。

6 ・それぞれの懐古（前書き）

世界政府とは？

数多の世界を統べる政府。最近腐敗してる。

司法、立法、行政の三つはそれぞれ別の世界にあり、ポータランドに立法機関があるようだ。

6・それぞれの懐古

トワイライトタウン 屋敷

「我々は現在、震土、薫風のリングを所有している」

屋敷の会議室で、シャアは一人呟いた。司令系統の人数が少ない漆黒の騎士団に、戦術参謀として加入したのだ。彼とて一年戦争を初めとする大戦を潜り抜けた軍人。モビルスーツと人では意外に（地上戦の場合）戦術は変わらないもので、シャアが適任とルーウェンが考えたのだ。

「八元素のリングとしては圧倒的不利な状況だが、これまでの戦績は悪くない。数ではタイガーフォースとやらが上だが、戦力では上回っているか」

シャアは資料を見て状況を把握した。数で劣りこそすれ、一人ひとりの実力はこちらが上。まるでホワイトベースかアーガマだと思えた。

「ここまで数が少ないと、一人の価値が大きい。とりあえず、データベースを見て彼らの経歴を調べよう」

シャアは端末を操作した。

ジンの部屋

「熱、下がらないね」

「う、うっ……」

ジンは部屋で寝ていた。冷えピタでは瞬時に冷たさが奪われるので、ドライアイスを袋にいれて額に当てている。枕も冷蔵庫に入れて冷たくするやつだ。

羽川はジンが脇に挟んでいた体温計を見て言った。下がらないと言ったが、測定不能なのでもしかしたら上がってるかもしれない。

ジンの体は冬のストーブみたいに熱かった。ジンのには、サイクロプスの目がある人間はこんな高熱が出るのか、と生まれて初めての苦しみを味わっていた。

「う、ジン……」

「そういえば、ジンって恩人の名前だったね」

羽川は看病してる間にジンに聞いた昔を思い出した。

ジン（当時はメアリーと呼ばれていた）は、初代ジン・クレッシェンドに拾われた。それ以前の記憶は無く、荒涼とした大地にやたらぶかぶかの服を着て座り込んでいたのが最古の記憶だそうだ。

その後は町を点々とし、サイクロプスの目が原因で迫害されると気づいた頃にはボロボロでバス停のベンチに寝ていた。そこで、初代ジンに出会ったのだ。

しばらくは幸せに過ごしていたが、事故で初代ジンが死に、その際サイクロプスの目も露見してしまったのだ。そこから、住んでいた場所を追い出され、ポートランドのユニバースで働くようになった。

そんな辛い過去を持つが故、ジンはそれを思い出したり、サイクロプスの目のことを考えて辛くならないように、過去を振り切るように戦い続けるのだ。一日中休むのも久しぶりらしい。

「でも熱、下がらないのね」

羽川はジンの寝顔を見ながら心配そうに呟いた。

トワイライトタウン 森

「これまで殺した累計は32人か。名前を覚えてるのはバンの甘ちゃん野郎だけだな」

「なんだそりゃ？ いちいち殺した人数数えるのか？」

トワイライトタウンのトラム広場にある壁、そこは一部欠けてい

る。そこから森に行け、漆黒の騎士団本部の屋敷にもそこらいく。ルーウェンは杏子と久々に鍛錬をしていた。杏子曰く、ルーウェンは圧倒的に経験不足なのが弱点だそうだ。そこで、模擬戦を行い戦闘経験を積むのだ。ルーウェンは前に杏子と会った時より強くなっていた。

今は休憩がてら高い木の枝に二人して座っていた。

「なあ、お前フラれたんだって？」

「う……、クレアめ」

杏子がフラれた話をふる。クレアがサラっと言ってしまったのだ。ルーウェンは口惜しそうに言った。

「いいんだよ。今は違う人好きなんだから。年上過ぎだけど」

「ヨヨだろ」

「……」

「凶星か」

杏子は一発で言い当てた。大方、フラれて落ち込んでいたところ励まされて好きになったといったところだろう。

「なんか行動に移したのか？ 無行動で告白して失敗したんだろう？」

「ああ、すでにバイクの二人乗りはした」

ルーウェンはサラマンダーというブランド物バイクを持っている。サラマンダーはオンロード最速のバイクだそうだ。

「そういえばお前、リアルアースつてのに帰るつもりなのか？」

「最初はそのつもりだったが、今じゃこっちの方がいいな。帰らん」

ルーウェンはリアルアースに戻るつもりはないと宣言した。リアルアースにさして思い入れがあるわけではないらしく、こっちの方がいいらしい。

「それに、リアルアースが復活する保証はないからな」

「ふうん。じゃ、その『断罪のリング』ってのはなんだ？」

杏子はここぞとばかりに質問責めをする。漆黒の騎士団に入った

わけではなく、明日には貨物グミシップの護衛に戻るからだろう。

「これか？　これはな、昔貰ったんだ。そういえばこっちの世界、前に行ったことあるんだよな」

「どういことだオイ。リアルアースってのは簡単に出来るもんじゃないだろ」

「なにか特別なものを使ったらしい。小学生の頃、学校の図書室で本を読んでたんだ。そしたら本が光って、こっちの世界、トワイライトタウンじゃないにせよ来れた。今までは保健室で目が覚めたのもあって、寝オチした夢だと思ってたが、よく考えればリアルアースの外に出れるアイテムだったのかもな、その本。夢で貰った指輪が現実にあるわけないし」

ルーウエンは右手の指輪を見て言った。断罪のリング、その力は依然知れない。だが、何らかの力はあるはず。

「そういえば最近、世界政府が腐敗とか騒いでいたな。リアルアースが崩壊してから二ヶ月、なんの動きもないのは、政府が政局つてのに必死だったからとか。政局つてなんだ？　食い物じゃないのが腐るのか？」

「政局つてのは、選挙とかどこが与党になるとかってやつだ。政治腐敗つてのは、まあ、政治家が違法に金貰って、悪代官と越後屋みたいなやつだ」

なるほど、とルーウエンの説明で杏子は理解したようだ。かつて羽川も政府について言及していた。しまっちゃんおじさんも政府との関係を明かしている。しまっちゃんおじさんはタイガーフォースの一員だったはず。なら、タイガーフォースと政府は何らかの繋がりがあるとルーウエンは考えていた。

「タイガーフォースはまだ謎があるな……」

「そうだな。ま、あたしは難しいこと考えんの苦手だから、ぶっ飛ばすだけだがな」

杏子は空を見据えて言った。

学園都市 とある病院

ここは科学技術が発展し、人口の八割が学生という特殊な町、学園都市。この町は学生に能力開発という、超能力のカリキュラムを組ませている。このカリキュラムにより、学生は個々により性質や強弱様々な超能力を有するのだ。

しかし、この町の学生でない人間が、能力開発を受けていた。

「うむ、この能力ならあの快樂殺人鬼に勝てる！」

能力の測定を終えて測定室から出てきたのはバン・グローリーだった。ルーウエンが殺したはずだが、生きていたみたいだ。この病院の医者がカエル顔に似合わず名医だったからだ。しかも、患者に必要なものは何でも用意するという信念と、学園都市理事長へのコネにより能力開発も受けてしまった。

ルーウエンにとってはピンチだが、能力開発が上手いかなければ大丈夫だ。だが、その能力開発が不成功したから問題なのだ。

「レベル5、つまり最高ランク。この力があれば！」

バンは両手を眺めて廊下を歩いていた。彼の目的はただ一つ。リアルアースに帰ることだ。

彼はアニメがほとんど放映されないリアルアース日本国静岡県で育ったせい、体育会系でありアニメを見るのは弱さの証明と考えていた。外で動き回ることこそ己を強くすることだと教わったのだ。バンは受験生だが、すでに特待の誘いが来ている。競技は水泳。

将来はオリンピックで金メダルもと言われた記録を持ち、彼の将来は輝いていた。それなのに、リアルアースが崩壊して将来は失われた。バンはなんとしても、リアルアースに戻らねばならない。

タイガーフォースには集団で志願した。周囲でどうしてもリアルアースに戻らねばならない仲間を募ったのだ。数に押されたのか*も快くタイガーフォースに加入を許した。少し予定はズレたが、バンの未来は軌道修正されたかに思えた。

その矢先、ルーウエン・ヴァイサスの登場である。ルーウエンは

容赦なくバンの仲間を虐殺し、リアルアースに帰りたくないという
怠惰な理由でバンと仲間達の未来を奪ったのだ。

「ふむ、能力を得て調子づくのはよいが、力を持つことは相当な
覚悟を要するのだ」

廊下を歩いていたバンにクレアが声をかける。窓を開け、サッシ
に腰をかけている。病院に吹き込む風が彼女の髪を撫でる。

「覚悟、だと？」

「大きな力ほど、使い方を誤れば悲劇を産む。もともと、そんな
力のないルーウエンや私には無縁だがな」

「ルーウエンは力の使い方を間違えてる。なぜその力をリアルア
ース復活という当たり前の目的に使わないんだ！」

「お前にとっては当たり前でも、ルーウエンにとっては違う。彼
はこつちの世界の方が好きみたいだからな」

バンはリアルアース復活に協力することが当たり前だと考えてい
た。しかし、リアルアースに帰りたくない人間もいることをクレア
は知っている。

リアルアースの住人には、封印がかけられていた。リアルアース
の特殊な一面だ。

しかし、リアルアースの崩壊で封印は失われた。封印が解ければ
姿も名前も能力も、全てが本来のものとなる。それが今のクレアや
バン、ルーウエンなのだ。

リアルアースでのクレアは病弱な少女だった。ゲームの中の屈強
な戦士に憧れても、入退院を繰り返す生活ではトレーニング一つで
きない有様だ。だが、リアルアースが崩壊して自分の封印が解ける
と、病氣一つしないどころか戦士もかくやという身体能力を得た。
リアルアースに帰ればまた病院生活だ。クレアも本心では帰りたく
ない、リアルアースの復活は望んでいなかった。

「それではダメだ！ 俺達が生きるべき本当の世界は、リアルア
ースなんだ！ そこから逃げたらダメなんだ！」

「貴様には一生わからん。病室から出ることなく、なにも出来ず、一生命をだらだらと伸ばすだけの、人間の気持ちか！」

クレアは珍しく語気を強めた。バンはリアルアースへの回帰を望んでいるが、あまりにリアルを知らない。知らな過ぎる。恐らく彼は、ルーウェンやクレアの様な人間の気持ちを理解せず、リアルアースが復活したらしたで、独善的な感情を持ってリアルアース住人全員を探して帰らせるだろう。そんな馬鹿な真似を、やる奴なのだ。バン・グローリーは。

「ルーウェンがお前に言ったそうだな。『お前を殺さないとな誰かが悲しむ気がする』と。それは正しいみたいだ」

クレアはそれだけ言うと、病院の窓からいなくなった。バンは大馬鹿野郎なので、クレアの気持ちには微塵も気づいていなかった。

行政機関 ホールシティ

ポートランドとは別の世界に、世界政府の行政機関は存在する。

ポートランドにあるのは貿易の施設や三権分立でいうとこの立法機関だ。司法機関はまた、別の世界にある。それぞれワープホールで繋がってるとはいえ、多少面倒に感じる議員や役人がいるのも事実だ。

「かなり非効率的ですね。まるで要塞のようだ」

「すいません。7年ほど前のサイクロプスによる襲撃事件により、一時世界政府の中枢が機能しなくなったためです。そこで司法、立法、行政の三権を世界ごとに分けることとしたのです」

無駄に豪華な廊下を歩くのは白い鎧の*。その隣にへつらってる政治家は面倒な世界政府の仕組みのわけを説明した。

「ふむ、だいたい理解した。『サイクロプスの目』とは、その『サイクロプス』という組織に属する者の印と。たしか、そう最初におっしゃいましたよね？」

「はいそうです。取り分け、ジンという娘は目を持ち、容姿が首

謀者、メアリー・ブロードに似てるため、我々ではそやつの血縁者と考えています。メアリーの妹か娘かはハッキリませんが、サイクロプスの少ない残党や新たにメアリーに感化された人間がジンを押し立て、再び我々に刃向かったら大変です」

＊は説明を聞きながら昔を思った。彼はかつて、世界政府直属の兵士だった。メアリーもまた、＊の同僚だったが、ある事情により世界政府に反旗を翻したのだ。

「メアリー・ブロード。なぜ君はあんなことを？　そういえば、ジンが拾った子供に彼女の名前をつけていたのは、あの娘がメアリーに似てるからだっただね」

＊の言うジンとは、初代ジンのことである。メアリーが世界政府に反抗し敗れた後、初代ジンと＊は一度面識がある。その際に初代ジンが話していたのだ。ルーウエンが初代ジンにそっくりで、＊も一瞬驚いたことはクレアにも黙ってるが。

「何でも、そのサイクロプスの乱を平定したのはタイガーフォーを率いた貴方とか。世界中の荒くれ者を束ねる貴方の腕は聞いております」

「よしてくれ。荒くれ者ほど乗せやすい奴はいない。寧ろ、臆病者や怠け者を束ねる方が私には難儀だ」

「またまたご謙遜を……」

＊はその議員の態度を見て、かつてメアリーと話したことを思い出した。

『世界政府は腐っている』

長い茶髪をなびかせたメアリー・ブロードは金色の瞳で＊を見つめて言った。

『そんなことくらいわかっているさ。だから私は、内部から世界政府を変革する』

『甘い！　腐った連中がそんなので変わるのか！　私には共に戦う仲間がいる。自分の手を血で汚さなきゃ、何も守れない！』

メアリーが吐き捨てた。メアリーはこの話をする前日、世界政府

の無茶な開拓作戦で自分の部下を全て失ったのだ。

『君が道を踏み外せば、死んだ部下も悲しむ』

『黙れ！ 私の気持ちなんかかわらないくせに！ 私は奴のここへ行く、ジンのところに』

メアリーはそう言っで*のもとを去った。*が自らメアリーを倒した時、自分のやり方で世界政府を正すと彼女に誓った。

今も廊下で堂々と賄賂が行われている。そんな世界政府は変わらねばならない。

（待っていてくれメアリー。私は世界政府を正す。自分のやり方で！）

*は強い意思で、豪華な絨毯の敷かれた廊下を踏み出した。

番外 テストですと？（前書き）

「テストとは、青春を阻害するものでしかない」

「いや、運動できない人間にはテストの成績が全てだ。そのテストすら出来てなさそうだがな、ルーウェンは」

『バン・グローリーとその友人、テストについて語る』

番外 テストですと？

トワイライトタウン 屋敷の会議室

「なあジン、お前テストってどう思う」

「テストってあれか？ 新装備の実用テスト」

ルーウエンは学校の話題をジンに振ったことを後悔した。ジンは生まれてこのかた、テストを受けたことがない。最低限の読み書き計算ができる程度で、学校には行っていないのだ。

「じゃあ、マイナス1足すマイナス1は？」

「……『マイナス』ってなんだ？ 新手の茄子か？ あ、それなら知ってる。自分の家でマイ茄子育てるのが流行りなんだ。えっと、答えはマイナスが二つだから2個だ」

「……」

聞いた俺が馬鹿だったよ、とばかりにルーウエンは沈黙した。正解はマイナス2。数学において、中学版1+1みたいな問題だったが、それすらジンには出来なかった。

「んじゃ、植物が二酸化炭素を取り入れて酸素を作ることをなんと言っ？」

ルーウエンは問題を変えた。ここまで来ると一般教養レベルだが、それすら怪しい感じがする。

「光合成」

「意外に出来たな」

「舐めてるのか？」

さすがにこれは出来た。ユニバースに入るには一般教養も必要らしい。

「お前、今何歳だ？」

「およそ16」

「年上だったの？」

ルーウエンは衝撃の事実を耳にした。ジンはルーウエンより年上だったのだ。ルーウエンは15歳である。

衝撃から立ち直れないまま、ルーウエンは問題を出した。ここまで行くと数学より算数のレベルだが。

「えっと、九九言える？」

「本格的に舐めてるのか？ 私は三回までパスを許されれば言える」

「それ言えたことにならん」

ルーウエンはジンの限界を把握した。これで買い物とか困らないのだろうか。いや、こいつがまともに買い物するはずない、とルーウエンはジンの食生活を見て思った。

基本的に食事は近くの食堂で食べるのが漆黒の騎士団だが、ジンはカロリーメイトみたいなものをかじってるのみでまともな食事風景を全員が見たことがない。ルーアという友人なら見たことがありそうなのだが。

「とりあえず、それで生活できるようだな。算数って」

ルーウエンは徐々に自分が勉強していることが無意味なのではないかと思いだした。ルーウエンは羽川の奨めで義務教育分は勉強している。

進路についてはあまり考えてないにせよ、勉強だけはしていたのだ。

「進路か。どうすつかねー」

ルーウエンはタイガーフォースを倒してから進路を考えることにした。

番外 テストですと？（後書き）

テストのせいで二週間連続更新出来ず……！
最終回まであと4話なのに！

7・主役のいない学園都市（前書き）

世界ガイド

学園都市

『とある魔術の禁書目録』に登場。いわゆる科学サイド。超能力の開発が行われており、人口の8割が学生というのも特徴。

7・主役のいない学園都市

トワイライトタウン 屋敷会議室

「緊急事態か」

「そうなんです。ジンの熱が下がらなくて……」

会議室でデイズと羽川が話している。用件はジンの体調の事だろ
う。ジンはここ数日、高熱を出して寝込んでいるのだが、その熱が
ウルトラセブンもビックリな超高熱なのだ。

「なら、学園都市はどうだ？ ルーウェンが言うに、腕のいい医
者がいるそうじゃないか。ヨヨからも受診を奨められた。あそこな
ら装備の拡充も可能かもしれないな」

「なら、次の目的地は学園都市ですね」

羽川は手元の端末でグミシップにアクセスする。これでグミシッ
プに自動操縦の行き先として学園都市が追加される。

「では、早速ミッシェンプランを立てよう」

デイズはミッシェンプランを決めるため、一旦会議室を出た。

グミシップ内部

「今回はジンが戦闘できない。よって、いつもより多めにメンバ
ーを選出する」

「で、決まったのはこのメンバーなわけ？」

「……」

ルーウェンは例によって例の如く、くじ引きでメンバーを選出し
た。選出されたメンバーがほむら、BRSという問題はあったが。

よりによって無口な二人が選ばれたためルーウェンは己を呪った。
ルーウェンとしては戦力戦法が共に同等な三人から誰が選ばれよう
が問題ない。しかし、コミュニケーションの都合上一番話しにくい

ほむらとBRSが二人揃ってというのはルーウエン的に厳しかったりする。

「なら、行くか？」

ルーウエンは重い空気を留めないためにグミシップを動かす。彼女達は好きで気分を重くしてるわけではないが、無口寡黙では自然とそうならざるをえない。

ジンをすでに乗せてある。病人には騒がしくない方が嬉しいかもしれないとルーウエンは自分を納得させた。

「そういえばルーウエンは、佐倉さんの弟子なの？ どこことなく身のこなしが似てるわ」

「あ、ああ。まあな。杏子が言うには、俺は剣術の才能があるらしい。リアルアースじゃ運動が嫌いだったから、その片鱗も見れなかったがね」

ほむらはそんなルーウエンの気持ちを察してか、話題をふった。杏子が人を褒めること自体珍しいことだが、ベテランの魔法少女、特に近接戦闘をメインにした杏子がいうのだから間違いないだろうとほむらは自己完結した。BRSは黙ってぼんやりグミシップの外を見るだけだった。

グミシップは一瞬で宇宙空間に出、一気に加速する。向かう先は学園都市。

「たしか杏子は、さやかって青髪の奴探してたな」

学園都市に関してはリアルアースにいた頃より情報を得ているルーウエン。二次元の世界と諦めていた世界に行ける興奮はリアルアースの住民ならではだ。ルーウエンはあわよくば、能力開発を受けようと考えていた。

そんなルーウエンの浮ついた気持ちを尻目に、BRSは険しい顔立ちで進行方向を見つめていた。

常盤台中学は学園都市でも5本の指に入る有名校である。また世界屈指のお嬢様学校であり、ペルシャ絨毯の直し方を習ったり選択授業で宇宙に関するものもあったり、本当に世界で通用する人材を作る気満々である。名ばかりのお嬢様校とは違うのだ。さらに、能力開発の方も凄い。学園都市に七人しかいないレベル5が二人在籍し、全生徒の力を合わせれば生身でホワイトハウスを攻略可能だそうだ。

「マイケル・ウィルソン大統領がいるなら話は別、か」

常盤台中学の寮前、そこでクレア・ハーディは人を待っていた。カモフラージュのためか常盤台中学の冬服を着ていた。これがよく似合っているのだ。クレアは事前に得た情報を、前に別の世界で会った大統領と重ねて回想した。なんでも大統領魂で解決するハイテンション大統領相手では、さすがの能力者達も厳しいかもしれない。そんなことを考えてると、寮の入口から*が出てきた。

「やー、待ったかい？ 協力を仰ぎにきたレベル5の超電磁砲、御坂美琴君は不在だそうだ。なんでも、単身ロシアだって。第三次世界大戦で一方通行もないそうだ」

「そうか。ならアスタリスク魂でなんとかしてみるか？」

クレアは屋台で買った、ひよこを模ったお菓子にプラスチックのフォークを刺した。その様子に*はおののいた。

「ひ、ひよこが！ あ、なんだお菓子か。ついにクレア君が強さを求めて無垢なひよこ達を踊り食い……」

「誰がするか」

クレアは*の言葉にちよつとむくれた。言葉遣いが古臭いとはいえ、クレアは13歳の少女。驚くことにルーウェンより年下なのだ。無論、ひよこの焼き菓子も食べるのをもつたいたいと思いつつぼうばっているのだ。

「ところでバンの奴は作戦中か？」

「そのようだ。今回はリングの無い世界。狙うはジン一人。内通者の情報によれば、ルーウェンはジンの治療を目的に来るそうだ」

クレアはバンのことを聞いた。ちなみにバンはルーウェンと同じ年だ。

「内通者などいつの間に……」

クレアは*の周到さに舌を巻きつつ、もう一つひよこをほづばった。

学園都市 とある病院の病室

「よかった。ただの過労だって。少し安静にすれば治るよ」

ジンの病床に付き合ったのはヨヨ一人だった。戦闘要員とは別にグミシップに乗り込み、ジンの世話をしていた。おかげでジンは「なぜなら私はアメリカ合衆国大統領だからだ！」と叫ぶのみで済んだ。

他のメンバーがいないのは戦闘を行う戦士としての気遣いだろう。共に戦場に行く仲間に弱い部分を見せたくないというジンの気持ちにルーウェンが汲み取ったのだ。診察室あたりから姿が見えない。もしルーウェン達がジンをお見舞いしようとしたなら病室探しに苦労するだろう。

個室のベッドに横たわるジンはヨヨに言った。

「ヨヨ、しばらく一人にして」

「了解っ！」

ヨヨはジンの言葉に満面の笑みで敬礼した。ルーウェンがヨヨにジンの事を相談したら、ヨヨは医者に見せようと言ったそうだ。そこでルーウェンがカエル顔の医者がいる病院まで行くことを決めた。ヨヨは鼻歌混じりに病室を後にする。扉が閉まる音を聞くと、ジンは目を閉じた。

少しだけ昔を思った。かつて、彼女が初代ジンに拾われた時のことだ。冷たい雨に打たれていたら、いきなり柔らかで温かい布団の上に寝かされていたから、死んだのかと思った。初代ジンは彼女に似ている女性の名前から取って、メアリー・ブロードと名付けてく

れた。

不意に、ジンの目から涙が溢れる。一人になった心細さからか、それとも昔の暖かな思い出からか、彼女にはわからない。しかし、彼女は気付いていなかった。

ヨヨが去った扉から、バン・グローリーが姿を現したことに。

学園都市 地下街

「よし、俺らは学園都市を楽しむぞ！」

「その必要はないわ」

ルーウエンの宣言はほむらに抹消された。BRSもコクリと頷いてほむらに同意。そして二人は各々好きな方向へ行ってしまった。学園都市にない学校の制服を着たほむらとフライトユニットを付けたBRSの格好は大変目立つと心配になりながら、ルーウエンは二人を見送った。

そこからはルーウエン一人旅である。ルーウエンは地下街をしばらくぶらついた。地下街のゲームセンターにはリアルアースにない魅力的なゲームもあるが、今ルーウエンが求めているのはジンへのお土産だ。

ルーウエンは漆黒の騎士団外部派遣チームとして働き、決して安くない報酬も得ている。それがルーウエンの食費だったりお小遣だったりするのだ。

お金の使い方が下手なルーウエンはつつい、お金を使わないで貯めてしまう。彼は300円以上を一度に消費することに躊躇いを感じる性格だ。だが、使うと決めた分は使う。

「そうだな。アクセサリーとか？」

ルーウエンは手近なアクセサリーショップに入った。アクセサリー類が沢山陳列され、光り物好きなルーウエンはそれだけでテンションが少し上がる。

ルーウエンはひとまず、ジンに似合いそうなものを探す。とはい

え、ルーウェンにアクセサリーなどわかるわけがない。とりあえず適当にその辺のペンダントでも手に取ろうとする。三日月を模ったペンダントだ。ジンの持つ黒いカードには三日月が印刷されていたからだ。

黒いカードは後に漆黒の騎士団に加入したほむら、木乃、BRSも作っており、それぞれ時計、リボルバー、星のマークが印刷されている。

そんなマークからヒントを得たルーウェンだったが、ペンダントを取ろうとした手が他の手と触れ合う。

ルーウェンは手の主を足元から確認する。茶色いローファー、チエックのプリーツスカートから露出する白く細い脚、着ているのは常盤台中学の冬服、腰の下まで伸びた金髪は空調の風でさえ揺れるほど軽やかで、うさぎの様に赤い瞳はこちらをキョトンと見つめていた。ただ、背負った筒の様なケースが異質さを感じさせる。

「クレア？」

「なんだルーウェンか」

手の主はクレアだった。クレアはルーウェンの方を向いてぞんざいに言った。

「ここはフラれた男の来る場所ではないが？」

「ギギギ……」

今だ引きずってるのか、ルーウェンは妙な声で呻く。男の方が引きずるのだ。ルーウェンもなにげに言い返す。

「お前も、こういうのに興味があつたとはな」

「私も女だ。リアルアースではまともにオシャレも出来ないくらい入院生活が続いてな。ここに来て元気になったから、やりたいことをやるだけだ」

クレアはさらりと流す。人生いろいろだなとかルーウェンは思ったりしたが、特に何も言わなかった。

それからしばらくして、爆発が起きる。地下街の遠くでなにかが爆発したのだ。

「なんだ、作戦でもしてるのか？」

ルーウェンは落ち着いて答えた。クレアは背負った筒を下ろし、中身を取り出す。中身は白い槍だった。筒に書かれた白いワイバーンの紋章は鍛冶屋としては有名な『リズベット武具店』のものだ。

「まあ、な。だが、私の目的は君との戦いだ」

「じゃ、始めますか」

クレアの言葉を聞くなり、ルーウェンは武器を抜いた。

学園都市 上空

「しつこい……」

BRSはフライトユニットで上空を飛びながら戦闘していた。学生を頭を掠めパニックを巻き起こしていたモンスター、サライムシの群れに長大なキャノンに向け、彼女は呟く。

1秒間に20発の岩石を乱射出来るというキャノン、『Rock cannon』はサライムシのボール状に細い手をぶら下げた身体に標準を合わせる。凄まじい轟音と共にキャノンから岩石が発射される。

それだけで100匹近いサライムシの群れは一掃される。上空での戦闘が5分に渡っており、強風を起こす風船みたいな生物やくらげみたいな生物もいくらか倒した。

BRSは不意に空を見上げた。空から石で出来た円筒が二つ落ちてきたからだ。彼女はそれを難無くかわすと、円筒が落ちた地面を見た。円筒はちょうど横にある程度の間合いを取って落ちている。BRSは珍しく困惑の表情を浮かべた。なにより、落とすならただの円筒より爆弾の類が効果的ではないのかと感じたのだ。

さらにBRSは自分の目を疑うこととなる。透明で巨大な人影が円筒の後を追うように落ちてきたのだ。巨大な人影は二つの円筒を手と足でそれぞれ挟み込む。その姿はまるで車だ。

「気味悪い」

これまた珍しく、BRSは本音を吐き出した。彼女は試しに剣で斬ることにした。一気に地上に降下し、人影の頭を叩き斬る。しかし、人影はびくともしない。BRSは次に、キャノンに向けて。キャノンのフルオート射撃が人影を襲う。すると人影が紫へ変色した。「目標補足、衝撃に弱い！」

BRSはそれを見定め、剣で的確に切り付ける。人影はどういう原理か、タイヤにしていた円筒を破壊されて逃げに徹した。

「逃がさない」

BRSはキャノンのバヨネットに目を向けた。衝撃に弱い弱点を突き、重量のあるキャノンで人影を討つのだ。バヨネットもキャノンの質量が加われば十分な衝撃だ。彼女は飛び上がり、位置エネルギーも稼ぐ。人影が息を切らしぜーぜーやってる瞬間に目を付けた。まるで必殺技みたいだとBRSは思った。そこで、ルーウェンみたく技名でも叫ぶことにした。ルーウェン曰く、技名を叫ぶと技をイメージしやすく、上手くいくのだとか。

「ギロチンキャノン」

彼女にしては頭を捻って考えた必殺技名だ。頭の捻り具合と反比例して捻りのない技名の後、BRSはフライトユニットを駆使して急降下。錐揉み状に回転してるため、回転によるエネルギーも追加された。そして、ハイパワーのバヨネットが人影を切り裂いた。

人影はそのまま真つ二つとなり、霧散した。あまりに呆気ない最後だった。

「他愛ない」

BRSはツインテールをなびかせ感想を口にする。元の世界では人類の最終兵器だった少女には、リアルアースの住民にトラウマを刻んだ『アメボウズ』の討伐すら準備運動でしかなかった。

学園都市 操車場

ここは第一七学区にある操車場。そこではかつて、最強の能力者

と最弱の能力者の対決が行われた。今、そこに置かれたコンテナの上には外の世界から来たものがいた。

「ま、サイクロプス捕獲なんて口実なんだけどね」

＊はコンテナの上に立って呟いた。タイガーフォースは『サイクロプスの反乱』の際、政府直属軍で力のあった＊が世界中から選りすぐった戦力を束ねた非正規部隊だ。今はサイクロプスの捕獲の任務に当たっているが、それは単なる口実に過ぎないのだ。任務をズルズルと伸ばして世界を巡る理由を作る。そして八元素のリングを手にするために。

「フロントワールドとは、直訳で『前線世界』という意味だ。世界政府がかつて、恐怖政府を敷くために作った兵器だ。リアルアースはその保護結界。フロントワールドは出来上がった瞬間、とある魔術師にリアルアースで封じられた。ここまで、わからないことは？ あれば解説いたそう」

「その必要はないわ」

今まで＊は独白してる様に思えた。しかし、後ろにいる者に語りかけていたのだ。＊はさらに続ける。

「世界政府はリアルアースのある政治家、日本という国の首都を治める者に新型の発電所を渡した。それは世界からエネルギーを吸い取りいずれ崩壊に導くものだ。他の世界にも同様の発電所を渡したのは、狙いがリアルアース崩壊であることが判明するのを避けるため。つまり君の世界は下らないカモフラージュに使い捨てられたのだよ、暁美ほむら君」

「世界が壊れても、まどかが救われれば充分」

＊の後ろにいたのはほむらだった。既に变身しており、いつでも戦える状態だ。だが、ほむらは戦うより先に話を始める。そのせいか殺気も薄い。だから＊も安心して背を向け、語れたのだ。

「ところで、まどかを見なかったかしら。それさえ解れば用はないわ」

「見なかったが、どうも魔法少女同士の同盟があるらしいな」

＊はほむらの問いに答え、コンテナから降りた。そして、指を鳴らす。

「来い、ダイオウデメマダラ」

操車場の地面から生き物が現れる。丸みを帯びた体をし、その半分近くに渡る大きな口をしている。蝸牛のように体から突き出た目がほむらを見た。背中には苔が生えて、攻撃は通じなさそうだ。紫の舌を垂らし、ほむらに向かってくる。

「ダイオウデメマダラ。チャッピー系の生物では最大、ね」

ほむらはコンテナから降りて対峙する。銃で何回か撃ったがあまり効いてないようだ。ダイオウデメマダラが近づき、舌を伸ばすのでほむらは時間すら止めず避ける。巨体ではあるが、動きは緩慢なので避ける事自体は容易だ。

「ある星で見つけた珍しい生き物だ。あの世界だと私達が小さくされていたから持ってきたら今度はこいつが小さくなっていたよ。ビッグライトでもとに戻したがね」

＊は呟きながら操車場を後にした。ほむらはパイプ爆弾を手にして言う。

「身体が固いなら、中を攻撃すればいいじゃない」

そしていくつかの爆弾をダイオウデメマダラの口にほり込む。ダイオウデメマダラはそれを飲み込んだ。すると体内で爆発が起きたのか、ダイオウデメマダラは煙を吐き出して倒れた。

「さあ、次は貴方の……」

ほむらが振り返る頃には、＊はいなくなっていた。

学園都市 地下街

「やるじゃねえか！」

「そつちも！」

学園都市の地下街ではルーウエンとクレアが激しい戦いを繰り広げていた。途中、放たれた小さなチャッピー達を巻き込みの激戦で

ある。

ルーウエンの武器は剣、クレアは槍である。槍に勝つには相手の三倍強くなければならないというが、この二人は互角だ。

これは実質的な負けである、とクレアは感じていた。

クレアが槍を突き出すのに従い、ルーウエンは右へ身体を反らす。槍は突き出したら戻すのに時間がかかる。その隙にルーウエンは懷まで潜り込む。クレアも早めに槍を戻し、ルーウエンの一撃を槍の柄で防ぐ。

「一文字スラッシュ！」

攻撃を弾かれたルーウエンはバックステップを踏み、一気に踏み込む。バロウズ邸で見た技だ。

「閃光撃！」

クレアも攻撃を受けた勢いで後ろへ下がると、槍を構え踏み出す。二人の攻撃は相殺された。

「何と無くわかる気がする。君は戦いが好きだ」

「俺も正直、自分がこんなに好戦的だとは知らなかった！」

クレアとルーウエンは再び技をぶつけ合う準備をする。

「ジン、アイデア借りるぜ。スターダスト・ティア！」

ルーウエンが放ったのは飛ぶ斬撃。それはジンの流星爪に似ていた。これは威力重視のジンのものと違い、切れ味重視なのがルーウエン流のようだ。風車斬りの完成版というべきか。

「真槍真理！」

クレアは槍にエネルギーを溜めるとそれを投げた。ぶつかった二つの技は爆発を起こして打ち消された。

学園都市 病院

「お前は、バン・グローリー……！」

「覚えていたか！ 早速ついて来てもらっ！」

いきなり部屋にバンが入ってきたため、ジンは慌てて立ち上がった。

た。パジャマ姿では戦闘に向かない。熱が出たから開けていた胸元も閉めた。

「いきなり入るな礼儀知らず！ あとなんで病室知ってる！」

「実は内通者に教えてもらった。誰かは言えんがな！」

ジンの質問にバンは堂々と答えた。本来なら内通者は存在自体知られてはいけないのだが、バンは言ってしまった。

バンはジンの顔を見と言う。

「お前、泣いてたのか？」

「泣いてない！ 断じて泣いてない！」

バンの言葉にジンは顔を真っ赤にして首を横に全力で振った。実はさっきまで泣いてましたと敵に言うわけにはいかない。

「さて、大人しくついて来ないなら力づくで連れていく！ 俺のレベル5能力、『ストームナックル暴風拳撃』を受けて見る！」

突き上げたバンの拳に風が纏わり付く。ジンは場所が場所だけに避けるのを諦めて受け身を取る準備をした。体調は万全ではない。熱でフラフラする。正直、今こうして立っているのも辛いくらいだ。

「暴風ナックル！」

「っ……！」

バンが突き出した拳から、凄まじい風が吹く。ジンの小柄な身体はまたたくまに吹き飛ばされてしまう。窓を割り、病院の外に叩き出された。ここは10階だ。落ちればかなりのダメージを受けるだろう。着地できればいいが、今のジンには不可能だ。

（ダメだ、身体が言うこと聞かない……）

なぜならバンの風で身体を切り裂かれ、既にかなりの深手を負っているからだ。

（落ちる……！）

とジンが思った瞬間、いきなり地面が近づいた。同時に落ちる速度も遅くなる。地面に落ちたが痛みもさほどない。

「まったく、なに柄じゃないことしてんだか」

倒れたジンに近づいたのは一人の学生だった。学生といっても服

装は異質だった。ブレザーの上着は腕を通さず羽織り、胸元はピンク色の布をサラシの様に巻いているだけ。軍用のライト付き警棒を持った姿は学生なのか何なのか不明な状態である。ジンも同じ女性として、このファッションはないだろうと自分を棚に上げて思った。「で、どうしたの？ 自殺？」

「おっと、ゆっくり下ろしてくれたのか。それはありがたい」
学生が聞くなり、バンが横から口を挟む。窓から飛び降りてきたのだろう。学生はバンに向かって言う。学生は呟いた。

「能力者ね。威力からするとレベル4……」

「いいや、システムスキャンならレベル5と出たぞ」

「あんたがやったのね」

学生はカマをかけた様だった。窓の破壊を能力と推測し、窓から飛び降りてきたバンを疑ったのだ。バンが阿呆でなければ引っ掛からなかっただろう初歩的なものだ。

「さて、なんか怪しいのよね。あんた、逃げなさい。あ、私の名前は結標淡希」

「え、でも……」

淡希と名乗った学生はコルク抜きを手にバンと対峙する。ここに能力者同士の戦いが始まった。

学園都市 地下街

「え？ 病院が？」

「どうした？」

一方その頃、地下街でルーウエンは携帯を取り出して話していた。相手はヨヨ。病院がバンに襲撃されたのだ。しかしこの携帯、地下街で繋がるとは高性能である。魔界の品で魔力を飛ばして会話する。魔力なので特定の相手にしか繋がらないが、電波と違い地下などでも通話可能だ。

「くそ！ あの馬鹿生きてやがった！」

「バンか。あの馬鹿！ 本来の作戦忘れよって！ 能力者のスカーウトが優先だろう！」

ルーウェンとクレアの二人に馬鹿呼ばわりされたバンは今頃淡希と戦ってる。クレアは珍しく焦り、ルーウェンに停戦を呼び掛ける。「仕方ない。ここは一時手を組んで馬鹿を倒す。行くぞルーウェン！」

「わかった！ 勝敗はトドメバトルに変更だ。バンを倒した方が勝ち！」

クレアとルーウェンは剣撃を交わしながら病院へ走り始めた。

「ところで本来の作戦ってなんだ？」

「君も見ただろう。あの生物を放って強い能力者を探すことだ。

サイクロプス確保はタイガーフォースが動く口実だ」

「なるほど、バンが馬鹿だから口実を鵜呑みに……」

ルーウェンとクレアは走って剣撃しながら会話もしていた。ここまで来ると相手の行動を無意識に読んでるのではないかと疑ってしまう。

「俺さ、少し自信が無かったんだ。けど、今は違う。クレアみたいな強い奴と互角に張り合って、お喋りする余裕があるんだ。俺は強い！」

「それはよい。迷いは剣を鈍らせる」

ルーウェンとクレアは病院へひたすら戦いながら向かう。リアルアースでの自分を振り切るために。

ルーウェンはリアルアースの話題をクレアに振る。

「お前、リアルアースじゃどんななんだ？」

するとクレアは自嘲気味に呟いた。

「病弱な子供でしかない。そういう君はどうなんだ？」

ルーウェンもまた、自虐の様に言う。

「ただのオタクさ。出来の悪い兄ってイメージが皆に定着してる」
クレアはルーウェンの言葉を聞いて少し笑った。

「似た者同士だな、私達」

学園都市 病院

「な、なぜ邪魔を……」

「知らないわよ」

病院の駐車場、そこでバンは淡希に瞬殺されて倒れていた。手足にはコルク抜きが刺さっている。レベルはバンの方が上だ。しかし、能力での戦いにおいて淡希の方が鉄板何枚も上手だった。

まず淡希は以前、レベル5と戦ったことがある。超電磁砲の名に恥じない威力で圧されたが、そこから彼女は対策を学んだ。要は相手が能力を使う前に倒せばいいのだ。しかもバンは能力の内容をベラベラ喋り、長い前口上まで語っていた。攻撃し放題だったので淡希は攻撃したまでだ。

淡希の能力は『座標移動^{ムフポイント}』。いわゆる瞬間移動だ。コルク抜きなどを相手の身体に重ねるように移動させると身体に刺さるのだ。これを利用して攻撃を行う。

「その、サイクロプスは……、世界を破壊ぐは！」

淡希はコルク抜きをもう一本腕に刺して黙らせた。

「大変大変っ！ 病院が変な生き物に襲われているよっ！」

そこにヨヨが緊張感のない声で緊迫した状況を伝えにきた。街で暴れていた生き物が病院に押し寄せたのだ。

「やばいわね……」

「お、あわきんじゃん！」

「知り合いか？」

淡希が呟いた瞬間、自分も呼ばれたことない愛称でルーウェンが彼女を呼んだ。クレアも一緒だ。

「ジンは無事か？ 生物は俺らに任せて、あわきんはジンを小萌先生のところへ！ そこなら安全だ」

「え、ええ……」

淡希はなんで自分と小萌先生が知り合いであることを知ってるの

か気になった。それはルーウェンはリアルアースの住人なので学園都市の情報は小説という形である程度持っているからだが、そんなことあわきんの知るよしもない。

「……」

「間に合ったわね」

BRSとほむらも合流して戦力アップ。ルーウェンは全員に声をかけて病院へ駆ける。

「おめえらいくぜ！ 生物の死骸で目指せ一万ポコ！」

「わけがわからないわ」

ほむらもぼそりとツツコミを入れてルーウェンの後を追う。座り込んでいるジンはその背中をただ見ていることしかできなかった。

（私がタイガーフォースに追われることで皆に迷惑をかけてる。なのに……、私は！）

ジンはタイガーフォースの真意を知らない。故に、タイガーフォースが本気で自分を追い掛けているわけではないこともわからない。ジンは自責の念を募らせていった。

学園都市 某所

「断罪のリングを継ぐ者、ルーウェン・ヴァイサス。君を私は知っている」

学園都市のとあるビルの屋上、そこで*は独り言を言っていた。ルーウェンに関することのようにだ。

「始めは初代のジンかと思ったが、メルアの面影もある。メルアから断罪のリングを受けとったのか。あの時の子供か」

*は一枚の写真を取り出した。そこにはメルアとジン、そして素顔の*が写っていた。言葉からすると、*は昔リアルアースから出たルーウェンと面識があるようだ。

「君はこの世界に来たことがある。そして世界政府最強の戦士『断罪者』の称号をリングと共にメルアから託された。ふふっ、お陰

でリングを無くした政府は『聖騎士』の称号を新たに設立することを余儀なくされたよ」

＊の独白は続いた。その言葉は学園都市の空に消えいく。

「君はどうだい？ ルーウェン・ヴァイサス。世界を変えたい？ リアルアースに帰りたい？ 叶えたいことがあるなら戦え」

7・主役のいない学園都市（後書き）

解説

生物

今回登場した生物は一貫してピクミンシリーズのもの。ちなみにクレアとルーウェンが戦う前に爆発したのはサクレシヨイグモという生物。アメボウズはトラウマとして名高い。

8・一つ目法廷

学園都市 小萌宅

「ルーウェンちゃん達は世界を旅してるのですか」

「まあ、そんなところかな」

どう見ても小学生にしか見えないミニ教師、月詠小萌の家でルーウェン達漆黒の騎士団は鍋パーティーをしていた。淡希は小萌の家で生活しているのだ。

ルーウェンは話しながらも木乃がいなくてよかったと感じていた。木乃の食欲なら一人でこれを平らげかねない。畳の部屋、その中央に置かれたちゃぶ台の上に鍋はあった。最近話題のコーゲン鍋でもなくキムチ鍋でもなく、普通に鳥すき焼きだ。しかし、これはこれでほむらが時間停止をするんじゃないかと戦々恐々とするルーウェンだった。

ほむら、BRSは黙々と鍋を突いている。時間停止の心配はなさそうだ。

それより気掛かりなのは内通者だった。ジンが言うにルーウェン達が知らなかったジンの病室にバンが現れたのだ。タイガーフォースの作戦からして、偶然ではない。仲間で病室を知ってたのはヨヨだけだ。

「どうしたの？」

「い、いや何でも」

向かいにいるヨヨを見たら声をかけられた。ルーウェンは慌てて視線を反らす。ヨヨのわけがない。こんなほわほわした、どこか気の抜けた人物にスパイなど勤まらない。

ルーウェンは隣にいるジンを見る。何やらさっきから一言も発していないし、箸も進んでない。体調でも悪いのだろうか。

「ほら、あんたも食いな」

「う、うん」

淡希に言われてジンは箸を伸ばす。しかし野菜ばかり取っている。「しかし、バンが能力者になったのは厄介だな。生きてればだけ」と

「外の人間が能力開発を受けるとはね。ま、あれで生きてる人間がいたら驚きだけだ」

「あいつはギャグ漫画の住人に違いない。殺しても死なないんだよな」

淡希は全身をコルク抜きでブサブサ貫いてやったバンを思い出した。ルーウェンが言うには、二回ほど殺したが死ななかったらしい。ルーウェンもカードを置いてきたから今度こそ死んでるといいなと話していた。

「あのカード、あのまま貯め続けたらどうなるの？」

「5枚で金の脳と交換できます」

淡希の疑問にルーウェンはジョークで返す。ほむらも乗っかってみる。BRSも何気に乗ってきた。

「……白子入れとメロンパン入れ、どっちなの？」

「裏をかいてメロン入れ」

ルーウェンは落着いて答える。何気なく言ったことにマジレス（と、言った人が人だけにルーウェンはそう感じた）されて戸惑ったが、なんとか返せた。

「金の脳はホルモン入……」

「ちよつと、外の空気吸ってくる」

ジンが立ち上がり部屋を出る。ジョークのオチを崩されたルーウェンはガクツとなった。それを見たほむらがフロアのつもりなのか一言呟く。

「ホルモン入れで滑るよりマシよ」

「そうかい……」

ジンは玄関から外に出て月を眺めた。さすがに冬だけあり、防寒

着がフリースだけでは肌寒い。彼女が外に出たのは空気を吸いたからではない。あの場の雰囲気能耐えられなかったのだ。

ジンはタイガーフォース始め世界政府に追われている身だ。今回の事件もいままでのリングを狙ったタイガーフォースとの戦いと違い、ジンが学園都市にいたがために起きた。

（私がこのまま皆といれば、皆は世界政府と戦うことになる……）
ジンは思い詰めていた。現に、ルーウエンは負傷こそしてないが病院で生物と戦った際に剣が折れた。BRSが自分の剣をルーウエンに渡していなかったら、ルーウエンは危なかった。否、ルーウエンだけでなく病院そのものも、そこにいた患者も危なかった。

（このままだと、ルーウエン達が死んじゃう！ 私がいるから！）
ジンはベランダの柵を叩いた。そして、一つの決意をする。

（世界政府に出頭しよう。私がいなければ、リングの奪い合い以外でタイガーフォースと戦う必要はなくなる）

携帯を取り出し、ある場所に電話する。ユニバースだ。ジンの携帯は傭兵用に世界中どこでもユニバースの本部及び支部にかけられる。本部は壊滅したが、別の世界にある出張所は無事なはず。電話をすると、ソルジャー管理局の男性が出た。世界中に散らばる傭兵達を管理する部所だ。

『こちらユニバース、ソルジャー管理局。登録番号3678、ジン・クレッシェンドだな？』

「……はい」

『世界政府から話しは聞いている。逆探知による現在地は学園都市。出頭するなら第十七学区の操車場に来い』

管理局は電波を逆探知して居場所を割り出した。ジンは電話を切って操車場に行く。

「今夜は満月、か」

月を見ると見事な満月。これが見納めだろうとすっかり目に焼き付けた。

一方、ジンが帰ってこないのを心配したルーウェン達はざわめき出した。

「あれ？ 帰ってこないぞ」

「外、結構寒いよ？」

ルーウェンがシメのうどんをやるうと言い出したので、ヨヨが準備したらジンがいないことに気付いた。ルーウェンは玄関を開けて確認する。

「いない……だと？」

「探しましょう」

ほむらが立ち上がって玄関から出る。ほむらはなんだかんだ言っても世話焼きなのだ。

ルーウェンもほむらに次いで玄関から飛び出した。ルーウェンはわかりやすく動揺してる。

BRSはフライトユニットを蒸してベランダから飛んだ。空から探すつもりだろう。

「じゃあ、私はうどん作ってるね」

「みんな、帰ってきてくださいよ」

淡希が出たあたりでヨヨと小萌が言う。外には雪が降り始めていた。

第十七学区 操車場

「来たか」

大量の勲章ロングコートを付けた金髪の若い男がグミシップを伴って操車場に立っていた。グミシップはルーウェン達が使ってるものと違い、白地に金の模様と成り金趣味全開だ。

「逃げも隠れもしない。さっさと捕まえて。ルーウェン達が来るかもしれない」

「そうか。私はレイド・シャーロット。世界政府軍最強の戦士、『聖騎士』の称号を持つ男だ。サイクロプスの反乱前なら、『断罪

者』と呼ばれた立場の人間だ」

レイドと名乗った男は、ハッキリいえばルーウエンの2Pカラーしか見えなかった。いや、単にロングコートかつ背中に剣を背負っているという特徴からジンが勝手にルーウエンを連想したかもしれない。

「今すぐ連れていけ。あんたしか来てないなら、ルーウエン達の方が戦力が上だ。連れ戻されるかもしれない」

「心配はいらないよお嬢さん。それでも私は最強の戦士。すぐ返り討ちにするさ。だが、戦闘になると厄介そうだから、お望み通り連れていこう」

ジンは今すぐ学園都市を離れたかった。この場にルーウエン達全戦力が集まれば世界政府最強の戦士でも勝てるとは限らない。なにせ、中には時間を操る魔法少女と瞬間移動の能力者もいる。

「さあ行こう。世界政府の司法権、ジャッジメントランドへ」

レイドはジンをエスコートするとグミシップへ乗せた。内装まで豪華で、成り金趣味全開だった。シャンデリアの様なライトに皮張りのシート。いくらしたのか不明だ。

グミシップは高度を上げ始めた。レイドはジンに携帯を差し出す。「さ、仲間達に別れを言うんだ。その様子だと、挨拶も出来てないようだからね。番号なら必要ない。魔力を辿って繋げた。これも魔界の携帯だ」

学園都市 某所

「ジン？ ジンなのか？」

ルーウエンはマンションの上で携帯をとった。屋根を飛び移って探していたのだ。未登録の携帯からかかってきたから驚いたが、相手がジンだとわかるとホッとした様子だ。

『う、うん……』

「どこにいるんだ？ 早くしないとどん伸びるぞ」

『ゴメン、帰れないんだ……』

「へ？」

ルーウェンには電話の向こうの声が震えているように聞こえた。寒いからだろう。出てった時の格好を見ればわかる。

「どゆこと？ 迷子？」

『そうじゃないの。私はみんなとられない』

「わけわかめ」

ジンの言葉に困惑するルーウェン。いきなりこんな電話されれば誰でもわけがわからなくなるのも当然だ。

『みんなといると、タイガーフォースが来る。タイガーフォースの狙いは私。安心して。タイガーフォースはもう今回みたいにリングに関係ないことで追ってこない』

「おいおい、タイガーフォースなんか俺が蹴散らしてやるさ。ほむら達もいるし」

『でも……今回はルーウェンも危なかったし、私はみんなを危険に晒したくない！』

「武器折れたくらいじゃ俺は死なん！ 現に俺は生きてる。いいから帰ってこい！」

『ルーウェンだけじゃない。病院も襲われた。だから、やっぱり無理だよ……。みんなの迷惑になる』

「ジン……」

『さようなら』

電話は切れた。マンションの屋上にはルーウェンが一人残された。

グミシップ内部

「別れはすんだようだな。ではこれから君の罪状を確認する」

レイドがグミシップを運転しながら言った。ジンは黙って窓から外を眺めていた。

「君の体の何処かに刻まれているであろう、『サイクロプスの目』

とは、反政府組織サイクロプスのメンバーである証明」

「それで？」

「君がその目で差別を受けたのはそういう理由だ。そして今から話すことは極秘事項だ、メアリー・ブロード」

「……！ どうしてその名前を？」

ジンはかつての名前で呼ばれたため驚いた。ジンとしてはあまり人に話したことのない過去だ。初代ジンとの思い出は、ほとんど誰にも話したことがない。

「とぼけてもらっては困る。君はサイクロプスのリーダー、メアリー・ブロードなのだから！」

「え？ 名前はその人から取ったって、ジンは言ってた……。その人が、私？」

ジンは軽く混乱した。自分の名前の元になった人物が、まさか自分自身だとは思わないだろう。

「でも、昔写真で見たメアリーは今の私より年上だった。それがなんで……」

「おかげで君を探すのが遅れたよ。転生の術だ」

「そんな……」

転生の術。記憶と引き換えに年齢を遡る魔術だ。ジンも名前くらいは聞いたことがある。

「つまり、私がサイクロプスのリーダー、メアリー・ブロードが転生した姿。くっ、伏線くらい張っておいてくれてもいいじゃないか」

「そうだな。メタ発言はやめような。せつかくのシリアス展開が台なしだ」

レイドはメタ発言をしたジンをたしなめた。そのくらい、彼女にとって衝撃的な事実だったのだ。

「なるほど、それなら気が付いたらブカブカな服を着て荒野にいたのも納得がいく」

ジンは自分の記憶と照らし合わせて納得することにした。転生な

ど、世界広しといえど例が少ない。

「流血のリングは仲間を多く失った戦士に与えられる慰めの品。それはメアリーのものだ。それをジン、君を拾った者が受け継ぎ、君に渡した」

「リングにそんな意味が……？」

ジンは服越しに、今も首からかけているリングを握った。一体、昔の自分に何があつたのだらう。悲しいことがあつたのは事実だ。ジンはメアリーを案じた。

学園都市 小萌宅

「そういうことだ」

ルーウエンは電話で聞いたことを仲間達に話した。ジンは自分がいると漆黒の騎士団が危険に晒されると考えているらしい。

「で、貴方はどうしたいの？」

「助けにいくさ」

「武器もないのに？」

「……調達しよう」

ほむらに聞かれた通り、ルーウエンには武器がない。しかし連れていかれた場所なら見当がつく。世界政府が罪人を裁くならジャッジメントランドの可能性が高い。

「理事長からお届け物ですよー」

小萌が武器のないルーウエンに大きな箱を持ってきてくれた。ちやぶ台を占領するくらいのサイズがある。ルーウエンが開けると刀の様なものが出てきた。デザインからして完全に刀だ。

「えー、何々。『都市での騒ぎを止めてくれて感謝する。お礼と言つてはなんだが、学園都市の技術で作られた刀を贈る。実戦使用は始めてだから下手をすれば折れるかもしれないが、君なら使いこなせるはずだ。アイレスター・クロウリー』だとさ」

「つまり、刀ね」

ほむらの言う通りに刀である。何処に科学技術があるのか不明だ。恐らく使う鉄や鍛え方に科学技術が用いられているはずだ。

「確かに剣士だが、刀は始めてだ。剣と同じなのか？」

ルーウェンは刀を腰に差した。そして、部屋を出ながら宣言する。「ジンをちよつと連れ戻しに行ってくる。まだシメのうどん食ってないし」

「そう。なら、さつさと行きなさい」

ほむらは軽くあしらったが、それがほむらなりの返答だと感じ、ルーウェンは歩き出した。

9・断罪者対聖騎士

ジャッジメントランド 最高裁判所前

「ここが最高裁判所か……。ジン奪還作戦、開始だ！」

お堀で囲まれた、城の様に厳重な最高裁判所。ジンが捕われてから一週間、その前にルーウエンはいた。このくらいならジャンプで飛び越せそうだが、問題は壁を破れるかだ。この壁、かなり硬そうである。なら橋を渡って扉から入ろうと思うと、見張りがいて突破は難しそうだ。ルーウエンは最高裁判所の裏で突破の方法を探していた。

「さて、どうすつかね……」

ルーウエンがあたりをキョロキョロ見渡して打開策を練る。走るとすぐに入口の橋に行けた。町が狭いわけではない。ルーウエンの足が速いのだ。町のと真ん中にある最高裁判所だけに、下手な騒ぎは起こせない。町全体が迷路の様な作りなのも、罪人を逃がしたり奪還されたりを防ぐために違いない。裁判所周りを一周するだけでもかなり曲がりくねった道を進んだり地下を通ったりしなければいけなかった。

入管も厳しく、ルーウエンは学園都市からグミシップでトワイライトタウンへ戻り、駅から公共交通機関のグミシップに乗りジャッジメントランドまで来た。

漆黒の騎士団メンバーは動かさなかった、いや、デイズ動かさなかったのだ。もし全戦力を投入してトワイライトタウンをすっからかんにした隙をタイガーフォースに狙われたら一大事だからだ。だが、トラヴァースタウンにいる『ある人物』が無謀にも手を貸してくれた。

「こねえなあいつら。協力は無しか……。てか、協力者も来ない」
だが、賭けに近いが無策ではなかった。ある組織にジンが捕まっ

たことを話したのだ。ジンが捕まると都合の悪い組織だ。その組織とは敵対関係にあるため、あまり打ち合わせはしていない。ただ、一週間後の午後3時に最高裁判所前に集合という待ち合わせだけだ。遠くから雄叫びが聞こえた。なにやら大軍勢が押し寄せてるようだ。足音が地面を揺らした。

「なんだ？ あいつら、こんな大群で来たのか？」

あまりのことにルーウエンは肝を冷やした。隠密行動のつもりがとんだ殲滅戦になってしまったのだから。

やって来たのは首のない上半身裸の男達。どうやって叫んでるのか、雄叫びは彼らのものだ。しかも手には爆弾。かなりヤバイ。

「な、なんだあ？」

ルーウエンはとっさに飛びのいた。男達は橋を渡り、閉まっている扉に激突した。そして爆発。

「な……なんじゃあれ？」

「首無しカミカゼ、とある世界にいるモンスターだ」

驚くルーウエンの横に*が現れた。組織とはタイガーフォースのことだった。以前クレアからジンの捕獲はタイガーフォースが自由に動くための口実だと聞いていた。学園都市でジンが連れてかれた後、ルーウエンはデイズに電話の魔力の逆探知を頼み、操車場にジンがいたことを知った。たどり着いた操車場には*もいた。*が言うには罪人の身柄はしばらくジャッジメントランドの最高裁判所に留置される。

そこでジンが捕まると都合の悪い者同士で協力することにした。タイガーフォースは表立って動けないので、侵入に手を貸すだけだ。

「やっときたか……」

遠くからバイクの音が聞こえる。無謀な協力者のお出ましだ。

白いバイクに跨がっているのは短い学ランの高校生だった。フルフェイスのヘルメットをとると髪型がリーゼントであることがわかり、昭和の不良みたいな感じがした。

「では、私はこれで」

*は協力者の到着を見届けると去って行った。協力者らしき男子高校生は啞然とするルーウエンに言った。

「俺は如月弦太郎。世界の全員と友達になる男だ！ よろしくな！」

「あ、ああ……」

「お前ダチを助けに行くのか？ 俺にも手伝わせろ」

如月と名乗った高校生はおもむろにある機械を取り出す。真ん中にモニターがあり、左右に二つずつ赤いレバーとスイッチがある。スイッチのデザインは全て違う。右には大きなレバーがある。一体なんの機械だろうかと怪しむルーウエンを尻目に、如月はそれを腰に当てる。

「変身ベルト？」

その機械から瞬時にベルトのようなバンドが飛び出し、如月の腰に巻き付く。そう、これは変身ベルトだった。

そうこうしてるうちに衛兵らしき集団が現れた。なにやらおぼつかない様子で、だんだん本当に衛兵が怪しくなってきた。

「まずはお手並み拝見、か」

「任せとけ！」

バイクから降りた如月がベルトの赤いレバーを一つずつ入れる。何か溜める様な音がして、カウントダウンが始まる。

「3、2、1」

「変身！」

如月が大きなレバーを引く。すると如月は光に包まれ、あっという間に姿を変えた。白い宇宙服をモチーフにしたスーツみたいだ。

「宇宙、キター！」

「なんじゃそりゃ！」

「仮面ライダーフォーゼ、タイマン張らせてもらっぜ！」

如月改めフォーゼはグダクダになりながら集まる衛兵に宣言する。グダクダながら数が多い。フォーゼはベルトから右側モニターに近

い方の青いスイッチを引き抜く。代わりに紫のスイッチを装填した。
『スモーク』

ベルトから滑舌のいい英語が聞こえる。そして今度は、右側モニターに遠い方のスイッチを押す。オレンジのボタン式スイッチだ。

『ロケット・オン』

奇妙な発音の英語と共にフォーゼの右腕がオレンジ色のロケットに変わる。

「こんな数相手にしてらんねえな。時間ないんだろ？ 突破する

！」

「え？」

フォーゼは先ほど装填したスイッチを押した。

『スモーク・オン』

奇妙な英語が響き、フォーゼの右足に発煙装置が現れる。煙が衛兵達の視界を妨げた。

「行くぜ！」

「ちょ、おま……」

フォーゼはルーウエンを掴むとそのままロケットで空を飛んだ。

無駄な戦いは避けて目的を達成するつもりらしい。

ルーウエンとフォーゼは最高裁判所へ飛び立った。

最高裁判所 客室

「なんだ？ 地震か？」

裁判所の豪華な客室。その中央、あのネメシス二人は寝れるだろ
う広いベッドに眠っていたジンは地震で目が覚め、身体を起こした。
そして着ていたドレスの様な寝間着を脱ぎ捨ててバスルームへ向か
った。

バスルームも落ち着けないほど豪華だ。ひんやりした大理石のタ
イルに足を置くと、この待遇がどれだけ自分の身の丈に合わないか
実感できた。

ジンは一応、世界政府最強の戦士メアリーと同一人物らしい。彼女はそれゆえ、罪人なのに待遇がこんなに立派なのかと思ったりした。記憶にない努力でおいしい思いができるほど世界は甘くないのかも感じていた。

様々な色の花が浮かぶ広い湯舟に浸かっていると、そんな意味もないことをついつい考えてしまう。

（そういえば変な薬を与えられていたな。飲むように言われたから一週間飲んでみたが、変な夢を見るくらいしか効果がない。毒薬かと思っただけど、そうでもないし、なんだろう？）

ジンは薬の影響で見た夢について思い出す。物凄い断片的で、起きた後殆ど記憶に無いので少し苦労しながらだ。

『やっぱりこの子、ジンに似てるな』

これは女性の声。自分の今の声を少し低くした様に聞こえる。この女性が言うジンは誰を指すのだろうか。自分か、それとも初代のジンか。

夢の視界はこの女性のものだ。そして、『この子』とは目の前にいる銀髪の幼い少年だ。

『いや、目つきは君にそっくりだよメアリー』

「ジン！」

思い出した声でハッキリとした。これはジンとメアリーの会話。つまり、転生により失われた昔の自分の記憶。

『そうか？ ルーウエンはお前の生き写しの様に思えるが……』

「ルーウエン？ なんで？」

メアリーは目の前の少年をルーウエンと呼んだ。確か、ルーウエンは断罪のリングを持っていた。そして断罪のリングは世界政府最強の戦士の証。恐らく、ルーウエンはメアリー、つまりジンから指輪を受けとっている。なんらかの方法でリアルアースを抜け出してそして、出会った頃からルーウエンは初代ジンに似てると思ってた。『ジンとルーウエンが似てる』という会話の内容からして、この幼いルーウエンは漆黒の騎士団のルーウエンと同一人物だろう。

『君にこれを託したい』

記憶を探ると、確かにルーウェンにリングを渡すシーンがあった。これはメアリーとジンの会話より後の記憶みたいだ。

ルーウェンがトワイライトタウンで初めて会った時に見せてくれた物と同じ断罪のリングだ。

「今から死ぬんだ。考えても無駄か……」

メアリーがサイクロプスを率いて反乱した件の裁判は既に終了していた。判決は死刑。ジンもしばらくここに留置されたら処刑場で殺されるのだ。

ジンは湯舟から上がる。脱衣所でバスタオルを手にして身体を拭く。肌触りはいいが、いかんせん吸水性が悪く水滴がいくらか身体に残っている。そのまま服を着る気にはなれず、ジンはバスタオルを身体に巻くだけで済ませた。

ベッドに倒れ込んでもう一眠りといったところで、ジンの足がいきなりもつれた。

「っ……！ のぼ、せた？」

いきなり身体に力が入らなくなる。暑いわけじゃないからのぼせたわけではない様だが、身体全体が張る様な感覚があった。それはすぐに痛みへ変わった。

「うつ……、ぐ、あ！」

ジンはしばらくベッドの上で身体を抱いて痛みに耐えるしかなかった。

最高裁判所 ロビー

『スパイク・オン』

左側モニターに近い方の黄色いスイッチを緑色のスパイクスイッチに入れ替えると、フォーゼは早速スイッチを入れた。左足にトゲトゲが付く。

「おりゃ！ ライダートゲトゲキックだ！」

トゲトゲは蹴りが当たると伸びるようで、殺さないまでも的確なダメージを衛兵に与えていた。

「なんだ？ 殺さないのか？」

「殺したらダチになれないだろつと！」

ルーウエンは一方で、学園都市製の刀を使い衛兵を殺していた。そのため、殺されたくない衛兵達がフォーゼに集まっていた。ルーウエンとフォーゼはおよそ半々の数で衛兵を倒していた。最高裁判所に常駐する衛兵は100人。その命運は、どちらに斬りかかったかで決まった。

「終わりだな。まったく、相手が殺す気で来てんだから、殺す気でいかないと死ぬぞ？」

言い終えたルーウエンが法廷へ向かう道を向いた。フォーゼはベルトの左側モニターに遠い方の黒いスイッチを抜いて別のスイッチに入れ替える。

『メディカル。メディカル・オン』

流暢な英語の次に個性的な英語の電子音。フォーゼのスイッチチエンジの謎音声にもそこそ慣れてきたルーウエンだった。

「よし、これで足りるな。なんだ、殺すとか言いながらちゃんとギリギリ生きてんじゃん。お前やつばいい奴だな！」

「得物が慣れてないやつだったのと、こいつらが情けないあまり殺す気が失せたただけだ。こんなんじゃ俺もまだまだだな」

フォーゼはメディカルスイッチで左腕に現れた薄い黄色のコンテナから薬を取り出し、斬られた衛兵を治療した。

「ほう、君が殺す気を無くすとは。やはり衛兵はサイクロプスの反乱当時と比べると情けなくなったな。いや参った、まさかタイガーフォースが君ら討伐の任を負おうとは」

そんな様子を眺めていたらしき*が歩いてきた。どうも帰った後、タイガーフォースがルーウエン討伐の仕事を与えられたようだ。

「クレア君が来たがってはいたが、置いてきて正解だ。今回は間に合わなかったことにしよう。ここには薫風のリングがあるから、

それでチャラにして欲しい」

「そりや助かる。俺もクレア相手だと本来の目的を忘れそうだ」
ルーウェンはフォーゼと法廷への道を行く。＊はその姿を見送って呟いた。

「任せたよルーウェン君。こんな無謀な真似は君しかできない。どうやら私は、私なりの方法という言い訳で世界政府との対決から逃げていたようだな」

最高裁判所 客室

「っ……。なんだ、一体？ これはなんだったんだ？」

痛みが引いたジンは身体の異変に気づいた。痛みで転げ回ったため、バスタオルははだけてしまっている。その身体を眺めて気づいた。

背中一面にサラサラとした髪が当たる感触がある。手足が前よりスラリとしている。というか色々変わっていて別人の身体になっている。

慌てたジンは急いで脱衣所に向かい適当な服を着る。ドレスサーにある「こんな大きいサイズ必要ねーよ」と思っていたドレス群からすぐに着れそうな服を選んだ。その結果がチャイナドレスだとしても誰も何と言わないだろう。

青いチャイナドレスに身を包んだジンは脱衣所の鏡をみる。いつもの顔は少し大人びて写った。髪は腰の下まで伸びて、茶色が少し濃くなった。

「私の知ってる私じゃない！ なんかこれじゃない！」

ノースリーブのチャイナドレスから伸びる腕はか細く戦いなど出来そうにないほどだが、触れて見れば柔肌の下にしっかり鍛え込まれた筋肉がある。スリットから覗く足も光を反射して色つぽいが、ジンはなんだかいつもより跳躍距離が伸びそうだと思った。

「しかし、胸は殆ど変化なしか？」

……。ガクリ」

レイドは致命傷を負いながら宣言した。

最高裁判所 処刑の間前

法廷を突き抜けてたどり着いたのは処刑の間なる部屋の前。重そうな扉がルーウェンとフォーゼの行く手を阻む。

「ここにジンがいるのか……」

「よし、俺に任せろ！」

フォーゼは左側モニターに近い方のスイッチを抜いた。代わりにガトリングの銃身を模したスイッチを装填する。

『ガトリング。ガトリング・オン。ランチャー・オン』

同時に右側画面に近い方のスイッチを入れる。右足にミサイルポッド、左足にガトリング現れた。

「これでどうだ！」

それらを一齐発射。かなりの威力だが、扉はびくともしない。

「この扉化け物か？」

「ならこれだ！」

『ファイアー。ファイアー・オン』

フォーゼはロケットスイッチを赤い消火器のピンの様なスイッチに変える。スイッチを入れるとフォーゼは赤く姿を変えた。

「なんだ？ 変わったぞ？」

「仮面ライダーフォーゼ、ファイアーステイツだ」

フォーゼは手にした消火器型の銃、ヒーハックガンにファイアースイッチを挿す。警告音が鳴り響き、フォーゼは変身の時に使ったレバーと銃に挿したスイッチを入れる。

「ライダー爆熱シュート！」

『リミットブレイク！』

ミサイル、弾丸、火の玉の雨霰が扉に降り注いだ。さすがに扉ももたず、穴が空いた。

「よし！ 待つてろよジン！」

扉をこじ開けたルーウエンとフォーゼは処刑の間に入った。

最高裁判所 処刑の間メイク室

世界政府にはある伝統がある。処刑される女性は華やかに着飾るべし、と。

「で、なんでウエディングドレスなんだ？」

「レイド様はウエディングドレスこそが女性を最も美しくする衣装だとおっしゃりました。身内のいない女性の衣装を決めるのは断罪者及びそれと同格の聖騎士と決められていますので」

ジンは処刑の間に併設されたメイク室で着飾られていた。着付けを担当したのはドレスを運んできた行商人兼旅芸人のファントム一座の女性達だ。座つて鏡に向かっていた。

「きつくありませんか？」

「ああ。こういうの始めてだから基準がわからんが」

女性達の一人、黒髪の少女がジンに聞いた。ジンにはこういう華やかな衣装を着た経験がない。メアリーだった時も同様に。最年少である若干17歳で世界政府最強の戦士『断罪者』となったメアリー・ブロード。その人生は数奇なものだったと、再生した記憶を辿ったジンは思った。

とある世界で奴隷の子として生まれたメアリーはコロシウムで殺し合いを金持ちに見せる剣奴として富豪に買われた。命懸けの戦いを生き抜くために、彼女は独自の剣術を編み出した。そして、コロシウムで敵無しと呼ばれた頃に世界政府の軍事、フォルテ・クレッシェンドに引き取られた。フォルテがコロシウムを滅ぼして解放したのだ。

そして、将来性を見抜かれたメアリーはフォルテの元で暮らした。その時双子の初代ジン・クレッシェンドと、*ことアスタリスク・クレッシェンドと出会った。

（あいつら兄弟だったんだ……。記憶戻って始めて知った）

ジンは奇妙なことを思った。『記憶戻って始め知った』などと口に出来る人間が世界に何人いようか。

しばらくして世界政府で兵士をやリだしたメアリー、初代ジン、*の三人は数々の武勲を立てた。初代ジンは問題児で出世に恵まれなかったが、民衆からは人気だった。

そのうちメアリーは最年少で『断罪者』となった。しかし、それを妬む者の手で罠にかけられ、多くの部下を失った。その時、『流血のリング』を賜った。

いつからか始まっていた世界政府の腐敗に気づいたメアリーと初代ジンは*の制止を振り切り反政府組織『サイクロプス』を立ち上げ、世界政府に反抗した。しかし、メアリーは*に倒されサイクロプスは解散。メアリーは転生で死を免れたが記憶を失った。

その後各地を転々としたメアリーは初代ジンに拾われ、そっくりだという理由でメアリーと自身も忘れた本名で呼ばれた。

そして初代ジンの死後、二代目ジン・クレッシェンドとなったメアリーはユニバースに就職し、今に至る。

「ホント、人って不思議ね……」

ジンの呟きは鏡の中に吸い込まれていった。レイドがメイク室に恐る恐る入る。着替え中に入ったりしたらパイルドライバーもかakyatという威力の蹴りを何発貰うかわからんからだ。

「準備はいいな。では人生のフィナーレを飾ろう」

レイドは着付けの終わったジンの手を取り、立ち上がらせる。ジンはこれでよかった、と自らの命を諦めていた。

これで私は、漆黒の騎士団のみんなを危険に晒すことはなくなる。みんなが生きてれば、既に死んだ自分の身などどうでもよい、と。

ジンは自らの人生に終止符を打つため、歩き出した。

え……？

処刑の間に一歩足を踏み入れたジン改めメアリーは絶句した。処

刑の間には刃の付いた大きなシャンデリアがあり、それがギロチンとして処刑される者の身体を引きちぎるのだが、

「おい見るよ如月！ このロープ、ロープのくせに頑丈だぜ！」

「ホントだな！ 気に入らねえ、だからダチになる」

「さすが世界の全員と友達になる男！ げんちゃんカツコイイ！」
そのシャンデリアの上にルーウエンと赤いフォーゼがいたのだから。しかもシャンデリアを止めるのはロープ。ルーウエンの体重は45kg、フォーゼの体重は97kg前後。ギロチンシャンデリアを200kgと過程しても、ただの丈夫なロープに342kg程度の負荷がかかっている計算になる。

「如月、処刑装置の破壊が優先だ。よく考えりゃ夢のシャンデリアアスレチックなんかしてる場合じゃねえ！」

「そうだなっ！」

『シザース。シザース・オン』

左腕に鋏を出したフォーゼがロープを刃で擦り始めた時には、ポカーンとしていたレイドも慌てて我に帰った。

「おいお前ら！ 神聖な場所で何をぎゃああ！」

近づいた瞬間にシャンデリアが落ちてくるものだからレイドは腰を抜かした。

「お前がルーウエンのダチか？」

「いや、俺のダチはもつとちっこい奴だ」

「ちっこくて悪かったな」

シャンデリアから降りてきたルーウエンの言いようにメアリーは毒を吐いた。メアリーの姿はサイクロプス時代、なんらかの力でリアルアースを抜け出した幼いルーウエンを拾った当時のままだ。それなのにルーウエンは知らない人を見る目でメアリーを見ている。

「そうだ。あんた、あんたと同じ髪と目の色したちっこい女の子知らないか？」

「私だ」

「へ？」

ルーウエンが不覚にもジンの所在を本人に聞く。メアリーは当然即答した。ルーウエンの言うジンはメアリーなのだから。

「マジ？」

「本当だ。奴らの薬で身体を元に戻されたらしい」

驚いたルーウエンはフォーゼを呼んだ。フォーゼはシザーススイッチをメデイカルスイッチに代えてスイッチを入れる。

『メデイカル。メデイカル・オン』

「この薬で治るか？」

メアリーは差し出された試験管の様な瓶をルーウエンから受け取ると、中身を飲み干した。

「変化ないな」

「と、当然だ。異常なのは転生していた身体の方だからな。今のメアリーは正常だ」

腰を抜かしたレイドが割って入る。メアリーという名前を聞いてルーウエンは何かを思い出したようだ。ルーウエンはウエディングドレスに包まれ、顔を薄く化粧したメアリーを眺める。ベールやティアラなどの装飾もあり、まさに花嫁姿だ。

「メアリー？ この断罪のリングをくれた？ 確かに似てるな……」

「似てる、じゃなくて私がメアリーなんだ。まったく、あの時は可愛かったのに、こんなに憎たらしくなりやがって」

メアリーはルーウエンの現状にぼやいていた。彼女はジンとしての記憶もメアリーとしての記憶もある。メアリーは成長したルーウエンとの接し方を探っているのだ。

「悪いが、帰ってくれないか？ 私は死ぬつもりなんだ」

「いやそのりくつはおかしい」

メアリーの言葉にルーウエンはサラッと棒読みで返す。どうしてもメアリーを助けたいみたいだ。ルーウエンはメアリー「ジン」で認識してみたんだ。

「俺さ、みんなの前でお前を助けるって大見え切った手前、手ぶ

「じゃ帰れん」

「それこそ納得できん理屈だ！ 私はみんなを危険にさらさないように……」

「危険ってなんだ？」

ルーウェンはメアリーの言葉に微動だにせず答える。メアリーはなんとか言葉を続ける。

「それはっ……、世界政府の軍隊がやって来て……」

「今までお前を追ってたのはタイガーフォースだけだ。そのタイガーフォースもお前を捕らえようってのはリング獲得を目的に世界を自由に調査するための口実に過ぎないって言ってた」

「でも、病院の時は本当に危なかった……」

「あれは馬鹿が馬鹿した結果の事故だ。何度もあの馬鹿が同じ馬鹿やったらそれこそ愚かという言葉の立場がねえや」

「ここで私を連れ帰れば、世界政府の軍隊が追ってくるぞ！」

「軍隊ならボコした。最大戦力のタイガーフォースが捕まえる気ないなら、もう安心だ」

メアリーが危険を伝えてなんとか帰らせようとするも、ルーウェンは全て論破した。ルーウェンはメアリーを見据えて言う。

「それともお前、俺らのこと嫌いか？」

「そんなこと……。嫌いじゃない」

メアリーが俯き加減に言う。それを聞いたルーウェンは笑って右手を差し出す。

「なら、来いよ。なんかあっても、俺ら全員で守る」

メアリーは白いレースの長手袋で包まれた両手でルーウェンの手を掴む。

「なら、約束して。私のことは守らなくてもいいから、私より先に死なないで」

「約束する」

ルーウェンが応えると、空気をぶち壊してレイドが割り込む。処刑の予定を完全に狂わされて怒り浸透らしい。

「貴様ら……！　よくもこのレイド・シャーロットの顔に泥を塗ってくれたな！　本来なら断罪者という栄誉ある称号はシャーロット家の様な名門にこそある。それを、ポツと出の職業軍人の養子とリアルアース民に！　渡すものか！」

レイドは背負った鞘から剣を抜く。メアリーはドレスのロングスカートを裂いて右側から足が出せる様にすると、ティアラとベールを脱ぎ捨て、ルーウエンに破いたドレスの切れ端を渡す。

「髪くくつてくれ。私は髪など縛ったことがない」

「わかった」

ルーウエンは切れ端をリボン代わりに長い茶髪をポニーテールにした。髪で隠れていたが、開いた白い背中が惜しげもなく晒される。

「私がやる。守る必要なんてないって安心させなきゃな」

ルーウエンから刀を受けとったメアリーはレイドに走り寄り、ヒールで蹴り上げた。ハイヒールなので先ほど蹴られた時よりダメージは大きい。レイドは高く打ち上げられた。恐るべき脚力だ。

「ぐはっ……！」

「実力の伴わない称号、か」

メアリーは勢いを残して近くの壁を蹴り、高く浮いたレイドまで飛ぶ。何回か蹴った感触から想定するに、レイドは一般の衛兵より鍛えられてない。コネと家柄で得た地位だった。

「月狂、」

メアリーはレイドをすれ違いざまに切り付けると、反対側の壁にたどり着いた。その壁も蹴り、メアリーはボールの様に壁と壁の間を跳ねる。レイドをすれ違いざまに斬りながら。

「流星群！」

室内殲滅技の月狂流星群がレイドを切り刻んだ。ルーウエンの近くに着地したメアリーは刀をルーウエンに投げる。

「ルーウエン、成長を見せてみる！」

「おっけ！」

ルーウエンは刀をキャッチすると落ちるレイドに走った。そして、

刀を振り回した。

「ブライドローズ！」

刀を振り回して生まれた斬撃が荊を作る。何本もの荊がレイドを飲み込んだ。

「馬鹿……な！」

「これが俺の成長だ」

奇麗に咲き誇る血の薔薇。それはルーウェンが自身の成長によって咲かせた花だった。レイドの血肉は薔薇に吸われ、破片も残っていない。

「さて、帰ろうぜ。腹減った。晩飯の時間だ」

ルーウェンは刀を鞘に収めると処刑の間を後にした。フォーゼは赤いレバーを戻して変身を解く。

「やったな！ 友達、取り返せたじゃん！」

メアリーはそのあとを追いつけた。彼女は久しぶりに仲間の暖かさを感じたくなった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6486x/>

幻界戦線フロントワールド

2011年12月25日14時52分発行